
葉崎Guardian

nakoso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葉崎Guardian

【NZマーク】

NZ722C

【作者名】

nakoso

【あらすじ】

「少しでいいから……話を、聞いて」女の言葉から、物語は開始する。

プロローグ・01「街角奇行」

プシッ。

プルタブを立てた時の、炭酸が溢れる音が好き。左手を腰に当て、開けたばかりの缶を一気に呷る。ひんやり冷たい液体が喉を流れ、ぱちぱちと爆ぜる炭酸の名残が連れる爽快感。

そして、げっぷ。

通りすがりのオバさんが露骨に嫌そうな顔をしたが、知ったこつちやない。

空っぽになつたアルミ缶を手で潰し、ゴミ箱に放り込む。たつた今出て来たばかりの銭湯を見上げ、出入り口として迫り出した瓦屋根の掲げる時計を確認。

ただいま、午前7時37分。

「 よし

自らを奮い立たせて、足元に下ろしていたショルダーバッグを肩に掛けた。

黒と紫のボーダーシャツと、デニムハーフパンツに革のサンダル。すっかり夏を感じさせる晴天の下、差す陽射しにラフな服装で対抗する彼の向かつた先は、銭湯から歩いて10分ほどの場所にある古びたコインランドリーだった。文字がかすれてかるうじて『コインランドリー』と読めない事もない、看板の構えるドアをスライドさせる。

バンッ！

「わつ！？」

突然の大きな音に彼は、マヌケにも声を出して驚いた。

見れば、列を成す乾燥機にスーツの男がへばり付いていた。茶色く染めた短髪を立て、細面にサングラス。派手な柄のシャツをだらしなく着る胸元には、太い金のネックレスが覗いた。見るからに、そういう人だった。

……わー。

正直なところ、今すぐここでも逃げ出したかった。

「つだ、だつだつ」

男の口がパクパクと開く。えらくぞもつた言と、異常なまでに見開いた双眸は瞬きもしない。

「だつだだつ誰だ！」

よくよく見ると、尋常でない量の汗をかいているのがわかつた。額に浮いた汗の粒が顎先にまで伝つていて、首に至つては、水をぶちまけられたかのように濡れている。恐怖と焦燥と疑心と……他、マイナスなもの諸々が、男の体を取り巻いている。

「えつと……」

逃げようか逃げまいかというところで引け腰になりながら、どう答えたものかと逡巡する。一秒の間を置いて男が再び悲鳴じみて問う。

「誰なんだよ！」

男が誰から追われているのは明白だつた。

「は……初めまして。松原幸輔まつばら こうすけといいます……」

氣迫に負けて自己紹介。乾燥機にへばり付いて鬼気迫る形相の男と、入り口で逃げ腰になりながら名乗る少年 傍から見れば、さぞかし愉快に映るのだろうが。

「……えー、じゅ、一八歳のフリーターです」

「…………」

「……コンビニでバイトして……」

「そんなの聞いてねえよ！」

「じもつとも。

「どうしてここに来た！？」

「あの……洗濯物を取りに……」

「こんな朝早くにか！？」

「……バイトが深夜だからです……」

「うそつけえ！」

狭い部屋で叫ばれるのは鼓膜によろしくない。

「じ、じゃじゃじゃじゃあ！　じゃあそのバッグは何だ！？」

ツバを飛ばし、なおも叫ぶ男。

「洗顔用具です……」

ショルダーバッグのベルトを握り締め答える。手の平がうつすら汗ばんでいた。あ

「さっきまで銭湯に行つて……」

「うそつけえ！」

いつも頭ごなしに否定されると泣きたくなつて来る。

「うそかんじかじやないつてば……」

「中味見せろ！」

「え？」

「中味見せろおおーー！」

男の金切り声といつのが！」今まで聞くに堪えないものだと初めて知つた。

「な、中身なんて見て、どうどうするん……」

「つべこべ言うな！　見せねえつってんだ！」

何なんだよ……　仕方なく、背負つたバッグに手をかけて。

「待て！」

「何ですかあ……」

あれやれこれ待てと言われ、さすがに立腹を覚え始めたが、すぐにその表情が強張つた。スーツの内ポケットから震える手で取り出したのはナイフ。両手でしっかりと握り、震える切つ先を幸輔に向けたところで、顎で促す。

「見せる……見せろおおー！」

凶器と狂氣を田の前に出され、幸輔はすっかり竦み上がつた。ここまで狂つてる相手なんて、今までに対峙する機会がない　あるわけもない。

「見せろよ！　モタモタすんな！」

カクカクと何度も頷いて、慌ててショルダーバッグを外す。口の

ジッパーを開いて引っ繰り返し

シャンプーボトルが、音を

立てて、落ちた。

途端。

「ああああああああああああ！」

れおおおおおおおおおおおおおお

負けじと幸輔も悲鳴を上げる。

地面に後頭部をしたたか打ち付け悶える幸輔を残して、外に飛び出した男は走り去つて行つた。

プロローグ・02「アソーにお願い」

ガタタン！ ガタタン！ ガタタン！

電車が線路を滑走する音と同調した地響きが体に心地良い。骨を直接的に震動する感覚。皮膚、肉をまといながらも、やはり人体は硬質な物体なのだと体感する瞬間。

時間にして10秒足らず。列車の音と震動が彼方へ過ぎ去ってから、麻生浩介は人の気配にまぶたを開いた。果たして、見知った女が覗き込んでいた。

「こんなところで寝転がつてたら轢かれるよ？」

腰を折つて覗き込むせいで長い髪が顔に垂れ下がり、微風に毛先がそよぐ。

「車なんか滅多に通らねえんだよ」

アスファルトのど真ん中で大の字になつたまま、麻生は面倒臭そうに答えた。

「わっかんないよー？ 道歩いてただけで暴走車に轢かれる人だつているんだから」

「そりやお氣の毒。運が悪いんだ」

ふわふわと雲の泳ぐ空を背に、女は小さくため息をついた。

「運なんて自分じゃわかんないでしょ」

「今日の蟹座の運勢は一位だつて言つてた」

麻生の唇がアクビで開く。

「占い、好きだよね～」

呆れる女に口の中を存分にさらして、はたと思い出した。

「あれ？ ヒロ、仕事は？」

「まだ時間あるのよ。それまでヒマだからアソーに遊んでもいいおつ

と思つて」

秋野尋絵は、麻生の事を『アソー』と発音して呼ぶ。『アソウ』と呼ぶよりも呼びやすいのだと言つ。

「遊んでもらおう。たって、そんなヒマ、じやねえよ」

「見るからにヒマ、じゃねえか」

尋絵は地声が低い。

「……ま、傍から見ればな」

「どうからどう見ろ。つーんだ?」

おまけに口調が荒かつたりもする。

「少しでいいからさ」

刺々しい物言いはしかしそうに緩んで、まるで哀願するかのよう
に擁んだ。

「ほんと、少しでいいんだよ。少しだいいから、……話を、聞いて」

突然となりにへたり込んだ彼女に、麻生は狼狽した。

「おい……?」

上体を飛び起こし、いつむいた尋絵の顔を覗き込んで　一層
驚く。

彼女は泣いていた。

「え、泣いてんの?　泣いてんの?　な、泣くなよ、まるで俺が泣
かしたみたいに見られつかりさ」
しゃくり上げ始めたその肩を撫でたり揺らしたり、何とか宥めようとしたのだが、泣き止んでくれそうにない。
パンツ、パンツ!

頭上に皿をやると、ランダに干した布団を叩くオバちゃん（5
02号室、夫婦暮らし）と田が合った。

ニヤリ　意味深に口元を歪めるオバちゃん
いい予感はしなかった。

「わかったつ。ヒロッ、ヒロッ、ヒロッ— 部屋行こ。俺の部屋で話そつー!」

「

とこうわけだ。

それから7分後、麻生と尋絵はソファで肩を並べる事となつた。

「あのー……」「めん

彼女が落ち着くまで所在無くテレビのリモコンをいじっていた麻生は、大して頭に入つてもいないテレビ番組を見つめたまま応える。

「大した事ねえよ」

気まずそうに髪をいじる尋絵を見ると、前に会つた時よりも痩せた印象を覚えた。元来より細身である尋絵は同姓からよく羨ましがられていた。どんなに食べたところで体重の変動が少ない 平たく言えば、太らない体质の持ち主。よつて、世の女性が持つダイエットの悩みとは疎遠

「ちゃんとした食つてんの?」

「んー?」

「頬がこけてる」

言つて麻生は自分の頬を、ムンクの叫びのように両手で挟んでみせた。

「それに情緒不安定。 ヒロに限つてそんな事がないだろ? と思

うけど、クスリに手え出したりしてねえよな」

努めて優しく言つたつもりでも、吐いたそれは厳しかった。

「何言つてんの?」

即答。

「私がクスリをやるわけないじゃない。アソー、私を見ぐびりすぎじゃない? いくらなんでもクスリは手え出さねーよ。そこまで落ちぶれちゃいねーよ。それとも何? 信じらんない? 私が信じらんない? 私がクスリやつてるつて? あははー。へそで茶を沸かしてやろーか」

なおかつ隙間なくまくし立てられた。

「……へそで……何?」

「へそで茶を沸かす。ちゃんちらおかしいつて事。こんな事説明させんな日本人」

「まったく申し訳がござりません」

かしこまつて頭を下げる と、尋絵は吹き出した。

「あはははー!」

弾けたように笑う。泣いたり起こつたり笑ったり、感情のギアチエンジがせわしない女だ。

「やっぱアソーといふと楽しいわー」

「ばんばん背中叩くな」

「私の男になんない?」

「結構です」

「女いたつけ?」

「いねーよ」

「じゃ、私がなつたげる」

「いりません」

「どうしてキレ氣味なんだよ」

「えー?」

「あははっ

ソファに転がったクッショーン（中サイズ）を抱えた尋絵の表情が、おもむろに暗くなる。

「アソーに、お願いがあるんだけど」

唐突に思い詰めた顔をされれば、麻生に限らず誰だつて戸惑うはすだ。

「私の友達が悩んでるんだ。力を借りたいの」

今までにない真剣な眼差しで射抜かれれば、誰だつて。

それで、か。

秋野尋絵は今年で23を迎える。麻生とひょんな事で知り合つたのが去年の事。明朗快活な性格で、場を明るくする魅力を持つている。纖細という言葉の枠外に常に立つ彼女は、しかし友人が関係する時だけは例外だった。ひと度友人に悩みを打ち明けられれば本人と同等に、否、同等以上に共有してしまう質だった。友人を大切にし、大切にするあまり精神的に、無自覚のまま負担がかかる。体重など毛の先程も気にかける事のない尋絵がやせる理由　本人の問題ではなく、友人の問題。

「力を借りたいって言われてもさ、貸せるだけの力があるかどうか」

「アソーしか頼める人がいないんだよ」

切実に訴える尋絵の期待に応えたいのも山々だが。
麻生は弄んでいたリモコンをテレビに向け、画面を消した。

期待に応えたいのも山々だったが。

「……話、聞こう」

「力貸してくれるの！？」

「聞くだけだつての！」

ぱあつと明るくなつた尋絵の表情で慌てて強調した。

プロローグ・03 「桜田トーク」

さくらだりか 桜田梨香 尋繪の仕事で知り合つた友人で、21歳。明るく元気な「だ」という。

「……ずいぶんとまた、つかみにくい人間像だな」

尋繪と梨香が知り合つたのは半年前。仕事場に新しく入つて来た梨香に尋繪が声をかけ、2人はすぐさま意気投合し、その日のうちに居酒屋を4件ハシゴした。

「……すげー打ち解け具合い……ってか酒豪……」

3件目の居酒屋で通算7本目の日本酒を空にしたところで、腹部は満腹感に満ち、血中アルコール度数も高くなつて、酔いにお互いが気持ち良くなつていた。アルコールが饒舌にしていたせいもあるだろうが、梨香はポツリポツリと、恋人の話を口にし始めた。

「7本も！？」

梨香が恋人と出会つたのは高校3年生の頃だつた。わんぱくな盛りだつた彼女は日ごと夜遊びに徹底し、まだ付き合つていなかつた恋人は、その時の遊び仲間の1人だつた。男3人、女3人。同じ顔ぶれで夜の街を遊び歩く空気を存分に堪能していた。当時の事を、梨香はこう述懐する 5日間オールなんて、あの頃は若かつたわ。

「寝ろよ成長期」

時を同じくして、梨香の住む街では暴行事件が多発していた。不定期で報道される凄惨なニュース。被害者の共通項は、全員高校3年生。学校はバラバラ。路地裏や人気のない公衆便所に連れ込み、事に及ぶという。

犯人に至る有力な証言もつかめず、警察は苛立ちだけを募らせていた。

被害者である女子高生たちから得られた情報は、犯人は背後から忍び寄ると薬品を染み込ませた布で口元を押さえ、気を失つた彼らを蹂躪するという手口のみ。最中に意識を取り戻した数人は、口

の中に布のようなものを突っ込まれていたせいで助けも呼べず、目隠しをされていたせいで相手の顔や姿を見る事もかなわなかつた。

「ひでーもんだ」

そして事件は起つた。

いつも通り夜遊びに興じていた梨香が1人、帰路に着いていたところを、その背後に忍び寄る影が……

「んで、レイプされそうになつたところを彼氏が助けたつてんだろ？」

「……どーおして最後まで話させてくんないかな」

心底落胆し、悔穢を込めて麻生を田で責める。

「長えんだよ」

「これからが面白いってのに」

「本題を話せ」

「えー？ 結論だけー？」

正直ムカついた。

「ところで、アソー。梨香の彼氏が今何をしてるか知ってる？」

「知るか

「ヤクザ」

至極簡単に、尋絵は言い放つた。

空咳ひとつ、麻生は立ち上がる。

「 今の話、俺は聞かなかつたつて事で」

「ひどつ！？」

尻を搔きながらキッチンに向かつた麻生に何をするかと思ひきやろくに狙いも定めずに尋絵は跳んだ。

ソファの背もたれを軽々と越えた彼女の手が、もがくように麻生のスウェットパンツを引っつかむ。重力に従い落下する体とともに、ズばっと足元に落ちるパンツ 足をもつれさせた麻生は顔面から突つ伏した。

「じつ。

「ひどいじゃない、アソー！？」

「どつちがだ！」

がばつと振り返る麻生の鼻は赤く、目に涙。

「もつと穩便に引き止められねえのかおまえはー!？」

「彼女を助けてあげてよー！」

「これが頼む態度か！」

「それはそれ！」「これはこれ！」

「それもこれもあるか！」

ぴん、ぼ～ん。

床に這いつくばつて言い競う二人をドアチャイムが失笑する。

「放せ」

「嫌」

確固たる決意の瞳で尋ね。

「あつ」

スウェットパンツからすると抜けてみせた麻生は、何やら叱咤する彼女を無視してドアに向かった。

がちやつ。

麻生の田の高さで、やわらかい栗毛が頭頂で揺れる。顎を少しだけ引いて、視線を下に 松原幸輔がいた。

「おはよー、こーちゃん！ 今日は朝から大変だつたんだよ。マイシンランダリーでいつも通り洗濯してたんだけど、そしたら……」

よく回る彼の唇は、突然に止まった。幸輔の視線が麻生の下半身で止まり、麻生越しに何かを見付けたらしく絶句。幸輔が目を見開くほどのものがあつたかと振り向いた先で

上体を起こしシャツの中でブラの位置を直す、恥じらい顔の尋ね。

「……なに、その意味不明な行動」

麻生が冷ややかに呴いたのと、幸輔が我に返ったのはほぼ同時だった。

「ごめん！ 邪魔したね！」

「まあ待てよブラザー！」

元気溌剌ときびすを返し全速力で走り去ろうとしたその首根っこをつかむ。

「だつて、まだ途中でしょ？」

しつと言うその頭を、麻生は容赦なく叩いた。

プロローグ・04 「6月23日、火曜日の夜」

「 カギだな」

声に出して言わざとも、一見すれば即座にわかるような事を麻生は言った。目の高さまで摘み上げたそれをテーブルに放る。からからと、金属製のそいつは転がった。プラスチックの柄から伸びる、特有のギザギザを幸輔に向けて止まる。

「以上」

「……始めてから、見せただけでビリーハンとは考えてなかつたけど、こつもあつさり言われるとやる気も失くすね」
げんなりとぼやく幸輔の脇から、尋ねが手を伸ばす。

「この『015』って何だろ?」

プラスチックの柄部分にはめ込まれたプレートを差すと。

「コインロッカーの番号だろ」

またもや麻生の淡々とした物言い。

「こーちゃん……」

テレビを付け、ブラウン管眺め始めた彼は幸輔の呼びかけに目だけを向けた。

「これが何のカギなのか気にならねーの?」

「コインロッカーのカギだろ?」

「どこのかつて気にならねーの?」

「どつかのだろ」

「何があるのか気にならねーの?」

「何かだろ」

「うわあ、ラチあかね~~~~~」

幸輔、テーブルに伏す。

「いきなりやつて来たと思えばそれ見せて、これなんだと思つ~?
つて聞かれてわかるわけがねーだろ」

「アソーの意見に一票」

「ぴんと真っ直ぐ尋絵の手が上がった。

「人間って、真っ直ぐ手を上げると自然に背筋も伸びるよね」

「そんなの聞いてねーし」

麻生からきつぱりと言われたが、幸輔にとつては慣れた事だつた。というよりも、そんな事を気にするような性格ではなかつた。

「いつも通りバイトの後、ランドリーに行つたんだよ」

退屈そうに、麻生がテレビに目を移し尋絵がテープルに頬杖をついた事などまったく意に介さず、幸輔は身振り手振りを加えて経緯を話した。一人で勝手に切羽詰つたヤクザがまるで窮鼠に見えた事、敵意も戦意も皆無な幸輔にナイフで切りかかつた事、猫を噛み損ねた窮鼠は氣勢を発したまま脱兎と化した事。後頭部を打つた幸輔が意識を失つた事。

「うわっ、こりやひどい」

幸輔の頭に触れ大きなコブを確認した尋絵は、痛そと唇を歪めた。

意識を取り戻した後、乾燥機に詰めた洗濯物に紛れて、カギはあつた。

「ヤクザ、ね」

麻生の咳きは2人には聞こえていなかつた。尋絵がコブを叩き、幸輔が悲鳴を上げている。

尋絵の友人、梨香の恋人はヤクザ。
幸輔の見付けた力ギにも、ヤクザ。

嫌な符合だつた。よくもまあ、2人そろつて関わりたくない話を持ち込んで来たものだ。

「あのヤクザ、きっと命狙われてたんだよ。このカギを持って逃げて、いよいよ追い詰められたんだ。最後の悪足掻きでランドリーに飛び込んで、乾燥機に放り込んだつ

ずいつと身を乗り出して熱弁した幸輔の額を、麻生は平手ではいた。

「いてつ」

「想像力たくましそう」

「もしかして」

テーブルのカギを注視したまま、尋絵がポツリ呟いた。

「その人、梨香のカレシ……」

「まさか」

語尾まで聞く事なく一笑に付す麻生。頭^ごなしに否定されるなど当然気分の良いものであるはずもなく。

「どうして言い切れるのよ」

「どうしてそう思うんだ?」

尋絵が睨もうとも、麻生には効かなかつた。

「梨香のカレシ、突然連絡できなくなっちゃつたのよ。身分が身分なだけに心配にもなるでしょ。もしコースケの会つたヤクザがそつなら、連絡できない理由も見えて来ない?」

「見えて来ない。見えて來たくもない」

「梨香を巻き込みたくない状況にいるのよ。その理由が、このカギ

……」

「なわけねーだろ」

尋絵の空想を真っ向から拒絶する。

「2人そろつて都合良く想像膨らませやがつて
あまつさえ吐き棄てる。

「秘密文書のカギかもしれないじゃん!」

「コインロッカーに入れるかよ」

幸輔の額に2発目の平手打ち。

「大変!」

「ばんつ! 突然テーブルを叩いた尋絵に2人の視線が集中する。

彼女は青褪めた表情で一層声を荒げた。

「梨香が狙われちゃう!」

「…………考えすぎだ」

ほどほど呆れ果てるくらいしか、麻生にはできなかつた。

そしてその夜

6月23日、火曜日の夜。

外は蒸し暑く、クーラーをかけたまま寝た夜。

桜田梨香は襲われた。

第1話：「友人とノロケと奇遇」

大東病院の3階、廊下を歩いて最も奥、南向きの日当たり良好な個室に桜田梨香はいた。

尋絵からは曖昧極まつたイメージしか聞いていなかつた麻生だが、まさか翌日に本人と対面するなど思いも寄らない。赤銅に染めた髪は短く、尋絵と同じ長身スリム型。瞳が大きく頬もふっくらしているせいで、21歳の割りに童顔に見えた。無類のマンガ好きだという彼女の性格を、簡易棚に積まれた十冊ほどの単行本が如実に物語つていた。

「昨日買つたんだけど、刺されちゃつたじゃない？　読む時間なかつたんだよねー」

6月24日、水曜日。麻生と尋絵が病室を訪れた時、マンガを読みふけつていた梨香は声をかけられるまで2人に気付かないほどだった。積まれたマンガは一度に購入したというのだから、彼女のマンガ好きは筋金入り。

「あ、アソーケン？　尋絵から話は聞いてるよ」

頬にえぐぼを作つて笑う女だった。

「初めまして」

「傷、大丈夫なの？」

麻生の挨拶などどうでもいいとばかりに、尋絵は彼女の容態を憂えた。

「そんなに深く刺されはしなかつたみたい。すぐに退院できるつてほら、こんな感じ」

と、浴衣の前を開いたものだから2人は仰天した。

「見んな！」

ごつ。尋絵の拳が麻生の頬にクリティカル。

「オープンすぎるのよ、梨香は」

「別に見せるくらい、いいじゃない」

まるで親が子をたしなめるよつた会話だ。床に崩れた麻生が不満顔の頬をさすりさすり立ち上がった時には、すでに浴衣は閉じていた。

「……見た？」

殺意すら込められた尋ねの睨み。

「見る前に殴つとしてそりやねーだろ」

見た。

白い肌の腹部には包帯が巻かれていた。深く刺されはしなかつたという話だが、痛々しい事には変わりない。数瞬前の視界を思い返しての、麻生、胸中の一言。

「じつあんです。

下着を着けていない胸は尋ねより大きかった。

「前から刺されたって事は、犯人は見たの？」

ベッド脇のイスに尋ねは腰を下ろした。イスは1脚しか見当たらず、麻生は壁に寄りかかる事にする。

「ん~」

気まずそうに頭を搔く仕草から察するに、見ていないらしい。

「どうして？ 前から刺されたんじゃないの？」

身を乗り出し食らい付く尋ねとは対照的に、麻生は冷静に病室内を眺めていた。

「刺されたのは前からだよ。けど、それは後ろから肩を叩かれて」
病棟の角に位置しているため、部屋の窓は2つある。南側と東側と、シリングダー錠の付いたスライド式。

「どうして逃げないのよ」

「だって、まさか刺されるなんて思わないじゃない」

ベッドに隣接する簡易棚。ベッドと向き合つ壁には衣類があり、その上にはスイッチの切られたテレビが置かれている。

「現に刺されたじゃない」

「予知とかできないんですけど」

部屋の広さは、もう1人入ってもまだ余裕があるくらい。広くは

ないが狭くもない。冷暖房完備。

「で？ 振り向いた時に顔を見てないってのはどういう事よ

「逆光だつたんだもの」

壁から背を離した麻生は、ベッドの足元を回つて南の窓に近付いた。3階から望む外界は快晴の下、建造物が軒を連ねていた。

「逆光？」

「電柱の蛍光灯あるでしょ？ あれの逆光で見えなかつたの」 窓には落下防止のバーが固定されていた。窓自体は大きいが、このバーをよじ登らない限りは落ちる事などまずないだろう。

「梨香さあ、前もそういう事あつたんでしょ？ 少しは警戒心つての持ちなよ」

窓から広場が見下ろせた。入院患者のための憩いの場。女看護士が老人の車椅子を押し、ベンチでは右足にギブスをはめた男がタバコをふかす。

「だよねー」

麻生が振り向いた時、梨香は苦笑していた。けどさ、と唇が小さく動く。

「私の身に何か起こつたとしても、また助けに来てくれるつて、どつかで期待しちゃつてるんだよ」

思わず見惚れてしまつ、それはそれは綺麗な笑顔だった。

「…………」

尋絵のため息が控えめに揺れる。言いにくく事を発言する直前の、彼女特有の癖だ。

「…………でも、連絡付かないんじゃどうしようもないじゃない現実的でどうしようもなく当然で、何の薬にもならない一言。

「うん、わかってる」

致命的なところを衝かれてもなお健気に笑う梨香を見て、麻生は何とも表現しようのない思いに胸を締め付けられた。

「いつから連絡は？」

衝動的に尋ねていた。

「ケータイに連絡しても全然つながらない」

「根本的な質問、していいか？」

「麻生が交互に見比べた2つの顔はきょとんとしたが、そんなの知つた事ではない。」

「梨香さんのカレシは、どうして連絡付かなくなつたんだ？」つてか、ヒロの言つてた力借りたいつて何」

尋絵と梨香が顔を見合わせる。

「え。尋絵……何の話？」

「梨香の事、こいつに話したのよ」

「どこまで話したの？」

「梨香とカレシの馴れ初め」

「私の事つてか、私とカレシの話じやない」

「そんな感じ」

「おい尋絵」

「だつて最後まで聞いてくれなかつたのよ」

尋絵の不機嫌な視線が麻生に刺さる。

「だから、教えろつつってんだろ」

負けじと言い返した。

「話の途中で逃避したくせに」

ぼそつと唾棄する尋絵を、この際無視する事にした。

「梨香さん。話してくんない？」

「私はシカトかよ」

「探してくれるの？」

不満たらたらの彼女の横で、梨香の顔がぱつと明るくなる。

「怪我した人を目の前にして何もしねえなんて、そこまで非情な人間じやねえから」

「ありがとう！」

「カツコつけてんじやねーよ」

「まあまあ、尋絵。やり場のない憤懣は私のいない所でぶつけるつて事でいいじやない」

ずいぶんとその場限りなあやし方だった。どうせなら尋絵の不機嫌を緩和して欲しかった。

「 私とカレシが出会ったのは高3の時で

「 そつから話さなくていいって

桜田梨香の恋人である井延耕佑いのべ こうすけが唐突にその消息を絶つたのは、4日前の事である。仕事を終えて家に着いた時、同棲していた耕佑の姿がなかつた。徹夜で麻雀など日常茶飯事であつた彼だから、梨香はさして気にも留めなかつた。風呂に入つて汗を流し体を洗い、部屋に戻つてみれば携帯電話に不在着信が残つてゐる 誰かと思えば耕佑からだつた。徹夜で飲んでいる時、『機嫌になるところ』でよく電話をかけてくれるのだった。

「 それで『愛してる』って囁いてくれるの」

「 ノロケかい」

携帯電話には留守番メッセージが入つていた。耕佑からの着信は2分おきに3件。留守番メッセージも3件。そんなにも愛を伝えたいのかと梨香は恍惚とした。

「 あ。鳥肌が

だが、留守番メッセージの内容は、まったく異なるものだつた。

『梨香。しばらく連絡できそうにないんだ。心配はいらないよ、すぐ片付くから』 1件目。

『言い忘れた。ホテル葉崎に部屋を取つてある。何も聞かないで、

梨香はそこにいてくれないか。理由は後で話すから』 2件目。

『梨香？ まだ何も起きてないよな？ 早くホテルに行つてくれ。そこは危険だから 早く！』 3件目。

切迫した聲音で、息切れしながら訴えていた。

『一言、愛してるって言つてくれてもいいのに』

『彼の身を案じよう。ねえ、すぐに案じよう』

哀しげにため息つく梨香に早口で指摘。

『アソー。どう思つ？』

尋絵の顔はこぢらが心配してしまつほど憂色を帶びていた。なる

ほど。こんな事態に直面しているのなら、梨香の事を我が身の事と受け取るのも合点がいく。彼女がすがつて来た時にけんもぼろに接した自分を、少しだけ後悔した。

「梨香さん。カレシに言われた通りに、今はほてるにいんの?」「うん」

「刺されたのも、そこで?」

そうならば、梨香の居場所はすでに突き止められてること考えて良さそうだ。何故彼女が狙われるのかという點は眞田見当も付かないが、ホテルは危険だと思われる のだが。

「ううん。自宅のマンションの前」「あっさり否定。

『へ』

尋絵と声が被さった。

「留守電聞いてから、すぐにホテルに行つたのね。だけど急な話でしょ? 荷物もまともにまとめてなかつたもんだから、足りないものを取りに行つたら、ぶすっと」

ナイフで腹を刺されるジェスチャー。笑えねーよ、なんて無防備な女なんだてめーはと、率直な感想は飲み込むに留まった。

「という事は、すでに家はマークされてるって事ね」「腕を組んで、尋絵がうなる。

「忘れ物なら、俺とヒロが取りに行こう。梨香さんが戻るのは危険だし。てか、この状況で戻るのは不可能だとは思うけど」「アソーー

「あいよ」

「病院も危険じゃない? また狙われたりしたら……」

秋野尋絵という女は、まこともって有人を大切にする人間だと実感する。昨今の病院がセキュリティーを強化しているというのにこの心配ようだ。

だが、備えあれば憂いはない。
備えに絶好な人間がいた。

「幸輔に頼んじゃきやいいだら」

「ゴースケ？」

梨香が目を丸くする。

「アソーの友だち」

説明した尋絵が、あそつか、と手を打つた。

「梨香のカレシも「ゴースケだもんね。驚く事に、アソーもゴースケなんだよ」

「つへ~~~~~」

麻生をまじまじと見つめて感心する梨香。言われてみれば、3人もゴースケが集まるとは大した偶然だ。

「すっげー奇遇」

梨香に同感。その口が、あ、と開いた。

「そーいや、梨香さん。恋人のゴースケさんってどこの組？」参考までに聞いただけ。

「えっと、たしか

ヤクザに首を突っ込むと面倒になるのは目に見えていたし、ましてやそこに飛び込もうなど微塵も考えていなかつた。組の名前を聞いたところで麻生には縁遠いものだと高をくくつていた。

「そうそう。三雲興会」

梨香が気軽に口にした名は、しかしずつと身近なものだった。

第2話・「佐藤井公園」//コノヘイ

「これから仕事だという尋ねを葉崎駅まで送り、幸輔がバイトから帰つて来るまでの時間を、麻生は駅前のファーストフードで潰した。昨日は遅番で、今朝は早番で……よく体が持つものだと心底感心する。

「いらしゃこませ！」

潑刺とした店員の声を耳に、つまんだポテトを口に、カウンター席で駅前のバスロータリーをぼんやり眺めていると、幸輔が窓の外を横切つた。わざわざ足を止め、1メートル未満の距離で全身を使い手を振つてくれる。

「こーちやーん！」

店の自動ドアをすり抜けるや、犬のようになに駆け寄る。

「どうして無視なんだよ！」

「窓挟んで臆面もなく手え振んなよ…」

「18歳とは思えない暴挙と思えた。」

「バイト上がりで疲れてるところ、悪いな」

「そんな事ねえよ。3時間寝られりやいいし」

麻生のとなりに座るとすぐにポテトに手を伸ばし、幸輔は平然と言ったのだが、紛れもない事実だった。松原幸輔は、たとえどんなに眠かろうが3時間の睡眠で事足りる。1日3時間でも良ければ、3日3時間でも十分だといつから驚きだった。4日を越すと6時間に繰り上がる反動は愛嬌。

「尋ねさんの友だち、どうだった？」

「食いすぎだろ」

半分以上残つていたポテトはあつという間に幸輔の胃袋へ消えた。

「何が？」

自覚ゼロなのが厄介。

「何でもねえよ。腹減つてんだろ？ 何か食えよ」

「あ、いい？ バイトでメシ食べはしたんだけど、小腹がすこちやつてさ。ちょっと待つて」

と言つて幸輔が買ったのがポテトだった。

「……おまえ、そんなにポテト好きなの？」

「大好きだよ。イモくさいところが」

しかも「サイズ。

それ以上の言及は避けた方が得策だと、麻生は判断した。

「梨香さんは軽傷で済んだよ」

「誰？」

「おい」

「あ、尋絵さんの友だちか」

「んで、どんな話になつてるかつーと」

2人の馴れ初めなど当然省いて、現状を伝える。もくもくとポテトを熱心に口に運んではいたが、相槌も打たずに幸輔は聞き入つて

最後の3本をくわえたところで、話は終わつた。

その間、実に3分。

「食つの早つ」

「なるほど、そういう話になつてんのね」

「無視かーい」

「小腹空いてるつて言つたる？」

「小腹の域越えてんだろ、ぜりつー」

呆れるばかりの麻生がポテトの空き箱を見ていると、幸輔の手の平が叩き潰した。

「三雲興会つてーと、タケさんか」

指先を舐め、窓の外を見つめる彼の瞳に懐古が映る。

「そーいや、最近会いに行つてないね」

「タケさんの所には俺が行く。幸輔には他に頼みたい事があんだよ

幸輔が振り向いた。

「頼みたい事？」

「梨香さんの見張り」

「梨香さんが怪しいのか

「ちつづけーよ」

神妙に咳く幸輔の後頭部をはたいた。

「また襲われるような事がねえとも言い切れねえだろ？ そつじゅなくとも、襲つたヤツが来るかもしれない」

「ん〜〜〜」

「……何だよ、その不満面」

「いや、不満じゃなくて。腑に落ちねーんだよ

「梨香さんを刺しただけってところか？」

「そう、そこ」

幸輔の人差し指が、ビシッと麻生の鼻先に突き付けられた。

「うぜー」

指を叩き落としたが、彼は気にせず話を進める。

「カレシさんの居場所を知りたいなら、刺す前に脅すでしょ。しかも、襲われたのはマンションの前。ヘタすりや人目につく。部屋まで尾行するか、待ち伏せして脅して、部屋の中で話をした方が懸命だ。悲鳴上げられりや終わりだけど、それにしたつて、いきなり刺すのは馬鹿だね。ラチるでもないわけだし。単なる通り魔じゃん、それじや。どうして刺すだけに止まつたのか、そこが納得できないナリ」

「ナリつて何だ」

「見張りはいつまですりやいいの？」

見事なスル一具合だった。

「少なくとも、梨香さんを襲つたヤツが尻尾出すまで。そう簡単に出すとは思えねーけど、俺も三雲興会から調べてみる」

「ホテルは？」

「ホテル？」

オウム返しに尋ねてから、幸輔がホテル葉崎を指しているのだと思い至る。

「ああ、そつちは今のところ平氣だろ。襲われたのはマンションの

方でだし、ホテルはまだ安全なんじゃねーの？　ホテル行つたつて
梨香さんはいねえんだから

「……今まで言つた麻生の脣が不意に止まる。もしも　仮説が頭を
よぎる。

「きっと俺とこーちゃん、同じ事考えてるんじゃね？」

幸輔が笑んだ。

「その、梨香さんって人がカレシから何かを受け取つてるんじゃな
いかなーって、俺は考えたんだけど」

ぴったり同じ事を考えていた。

「…………あー、ダメだ。そんな話聞いてねえな。言つてねえだけ
かもしんねえけど」

梨香と話した時間は短く、襲われた時の事しか聞いていない。

「じゃ、それは幸輔にお願いするわ。もしかしたら、何かを受け取
つてるかもしんねえし」

「確認しとく」

「よろしく」

一度帰宅してから病院に行くと、幸輔と別れた麻生の足は、そ
のままバスローラリーに向かつた。歩いても行ける場所ではあつた
が、バスに乗つた方が早く着く。

「……ま、妥当な判断だろ」

乗客の少ない車内のシートで揺られながら、独り言ひとつ。

葉崎駅から東へ15分ほど　　麻生が降りたのは佐岩井公園だつ
た。海辺に程近い、緑生い茂る広い公園である。昼間はちつこいや
んちゃ坊主が母親に見守られ駆け回り、夜は平均身長172センチ
の茶髪やんちゃ坊主が女を引き連れてたむろする公園もある。さ
らに加えるならば、深夜は18歳未満立ち入り禁止区域もある。
あちこちの草むらから聞こえる猫の鳴き声をヒントに、推して知る
べし。将来ある君子ならば危うきに近寄らずがよろじ。

そう考えると、この公園も末恐ろしい空間だと感じぬ。

感じてみただけだが。

公園の入り口のバス停に降り立つと、湿気をふんだんに含んだ熱気に麻生の唇がへの字に曲がった。バス車内は冷房が頑張ってくれたおかげで快適だったものの、その反面、半端でない温度差に体が参りそうだ。奮い立たせた氣もすぐに萎え、ダルい足取りで敷地内に入る。噴水広場を抜け、アスレチック広場を抜け、定年を迎えたと思しき老夫婦がウォーキングしている姿を横目に 麻生は公園の最奥部へと歩を進めた。

そよ風が少し強く吹いた。

足元の芝生が滑らかに揺れ、頭上に延びる枝葉がざわめく。すぐ近くでセミが鳴き始めた。

ミーン、ミーン、ミーン、ミーン……

歩道はどうに足元から消えていた。

見る限り緑色と茶色と白の視界。

あるのは葉擦れと木肌と木漏れ日の世界。

その中に、コミコニティはあつた。

「おー。コースケじやねえか」

ブルーシートとダンボールと骨だけの力サで造られた4つのオブジェが、それぞれ4本の頑丈な幹に寄りかかる様子は、依然訪れた時と何ら変化がなかつた。自然と、麻生の唇の端が笑む。

「ずいぶんご無沙汰じゃねえか」

最も手前に位置するオブジェから、ワンカップのビン片手に出て来た男は、麻生を見るなり太く大きな声で迎えてくれた。身長190と少しの巨体に、ボサついた白髪。頬骨の浮いた細面には無精ひげはなく、田尻には優しい笑いジワ。元は灰色だつたと予想できるが、点々とシミが付いているせいで薄汚れている印象しか与えない、つなぎの作業服。

「久しぶり、リヨージさん」

「ミコニティ一番の背丈と綺麗好きの性格を持つ63歳、リヨージ。麻生は笑顔で挨拶して。

「他のみんなは?」

残る3つのオブジェは、一見したところ静かなものだつた。誰かが出て来る気配もなければ、誰かがいる気配もない。何より、笑顔だつたはずのリヨージの顔が、不意に曇つた事が気になつた。

「みんな、今はタケさんの所に行つてるよ」

タケさんの所 そう聞いて、麻生の視線は「ミコニティの奥にあるオブジェを見やつた。すっかり錆び切つた上にパンクしている自転車が淋しく停められたオブジェ タケの家である。が、やはり誰かがいるような気配は皆無。

彼の飼つているはずの雑種犬（名前は忘れた）すら、いない。「行つたつて追い返されるだけで、無駄なのになあ」

「みんな、どこ行つたつて？」

「大東病院に行つてる」

「はあ？」

驚きのあまり素つ頓狂な声を出す。

「どうして病院なんか…………」

嫌な、胸騒ぎがした。胸がむずがゆく締め付けられる。胃が収縮する。重力が徐々に消え失せる。

タケさんの所へ

「おとつい、急にぶつ倒れたんだよ」

あれだけ暑かつた空気が冷たい。ねつとりと 肌にねつとりとまとわり付くのは湿氣か汗か。こめかみで血液が脈打つ。耳鳴り。ドクンドクン早鐘打つてるのは何だ。右手が痙攣する。耳鳴り。瞬きも忘れた。眼球の奥に鈍痛。三半規管が震動する。喉が渴いた。水が欲しい何か飲むものを。耳鳴り。耳鳴り。タケさんがどうした。タケさんがどこ行つた。タケさん タケさんが どうしたつて？

「…………うそだろ？」
セリがつるセー。

第3話：「点 線 交錯」

まさか、こんなにも早く舞い戻る事になるなんて予想だにしなかつた。

大東病院。

葉崎市が誇る総合病院であり、わざわざ遠方から通う患者が朝から待合室のイスを埋めるほどの人気ぶりである。それが果たして喜んで良いものかどうかは、判断に迷う点ではあるが。

「コースケー！」

ロータリーを抱えているせいで広々とした正門に入つたところで、昇降口の自動ドアからすゞごと出る2人の老人を見付けた。

「タケさんは！？」

氣息奄々と駆け寄つた麻生に、2人は沈痛な面持ちを左右に振るばかりだった。

「ダメだ。まつたく入れてくれんね」

肉付きの良い体と、これまた肉付きの良い顔とスキンヘッドの男は、東北生まれの「ゾー。東京に来て十数年というが、まだ東北訛りのイントネーション。

「このナリじゃ、入れてくれんねーんだよ」

「ゾーとは対照的に小柄な瘦躯をしょんぼり縮ませているのがオサム。頭のてっぺんはすっかりはげ、取り巻くように生える白髪も薄い。

2人ともリヨージと同じ作業服を着ているが、どちらもそろつて汚れていた。おまけに汗臭いともなれば、病院側としても受け入れるわけにはいかない、というわけか。

「わかつた。入れてくれつて行つて来る」

『無理だつて！』

踏み出した麻生を2人がかりで抑え込んだ。

「何でだよ！ せつかく来たつてのに入れねーなんて理不尽だろ！」
頭に血が昇り沸騰している麻生は老人を振りほどこうと暴れたの
だが、さすがに2人を突き飛ばせなかつた。

一落ち着け、コースケ！」

「おめえが行つてもなんもなんね！」

入り口でこれだけ大いに騒げば人目に付かないわけがない。自動

他大勢の好奇の視線が、麻生の神経を逆撫でた。

「おひるー。だいだい

喚き暴れる彼を、2人の老人は必死に引つ張った。開いては閉じ、開いては閉じを繰り返すドア越しに、ぎこちない力一歩きで横へ異動していく3人を、病院関係者・患者たちは啞然と見送った。

悲痛な叫びだけが尾を引いて

きつかり5分後

「めんなさい」

麻生は土下座した。

「いいつていいくて！」

顔上げていいからつて！」

そんな彼をオサムトコーゾーが慌ててなだめる。その様を脇から

眺めていると、滑稽で楽しかった。

「あいたぐわー」あわたに攻撃的に取り舌す「一ちゃんも珍しいよ

プ
シ
ツ

炭酸飲料の缶を開けながら、芝生にあぐらを搔いた幸

輔が不機嫌に言い捨てた。

言い捨てた。滅多に見られない麻生の土下座で、内心

は大爆笑であつたが。

「返す言葉もないです」

「もう顔上げなって！」

「こっちも落ち着いて話もできねーから！」

老人2人の必死の説得は、かれこれ10分は続いていた。ひと度頭に血が上るとあらゆる規制も自制も利かなくなってしまうのが、自他共に認める麻生の欠点。今回の騒動も、タイミングよく幸輔がやつて来て、彼の頬を3発ほどはたかなかつたら、我に返る事はなかつただろう。

肩で息をし呆然と立ち尽くす麻生を、とりあえず落ち着かせようと連れて来た場所がここ 病棟を見上げる広場だった。今4人がいる芝生の丘をぐるりと歩道が囲い、敷地外との間には木々が立ち並ぶ。看護士や入院患者、その見舞い客の姿がちらほらと見受けられる。

「 でさ。どうして、こーちゃんとゴーボーさんとオサムさんがここにいるのか、とりあえず教えてくんね？」

麻生がやつと顔を上げたのを待つて、幸輔が尋ねた。

「……あー」

我を失つた事が相當堪えたらしく、へこんだまま正座を崩そともしない麻生。指先で芝生をいじる姿に情けなさすら覚える。

「ダメだこりゃあ」

即座に麻生を切り捨て、2人の老人に視線を移した。答えてくれたのはコーゾーだった。

「ゴースケが一心不乱になんのも仕方ねー事なんだよ。今なあ、タケさんがこの病院にいるんだ

「はい？」

「おとつい、急にぶつ倒れたんだ。いつものように朝起きて、メシ調達しに行こうとした矢先にな。俺らがぶつ倒れたんならもう後はねえんだろうけど、タケさんは違う。救急車呼べば病院に運んでもらえるし、すぐに駆け付けてくれる人もいる

「ゴーザーは、見上げる者すべてを等しく圧迫するよつに建つ病棟を見上げ呟いた。

「正直、うらやましいんだ」

「俺らは決して歓迎される側じゃねえものな。金もなきや家族もない。いつどこで死んだって、誰も気付かねえ」

笑うオサムに、幸輔はどうしても笑えなかつた。

「俺らとタケさんは違つ。違うけど、死んじゃほしくねえ

「んだな」

どうして2人は笑い合えるのだろう。

どうして2人は朗らかでいられるのだろう。

そして何より。

少なくとも俺は悲しいです。そんな一言が、幸輔は言えなかつた。

唇を結んで黙つて聞く彼の手が、強く握り締められた。

「よしひ」

ぱんっ！ 麻生はやおら膝を叩いて立ち上がつた。やつと立ち直つたらしく。

「へこむのは後だ」

それでもなかつた。

「オサムさん。ゴーザーさん。タケさんとこ行ひ」

「だ」あから。無理だつてのがわからぬーのか

ゴーザーがぼやく。となりのオサムと同様、芝生から腰を上げる氣など毛頭なさそうだ。

「どうして。こつちは見舞い客だろ？」

「ヤツらが来てんだよ」

諦観が色濃く染めたオサムの言葉は端的で、十分だつた。麻生の表情に苦渋がにじむ。ヤツらがどいつもらのかくらい、幸輔でもわかる。その事が何を意味するのかを汲み取る事もできた。

「……何人くらい？」

麻生のその質問が茶を濁すに至らない事すら、わかつた。

「6、7人だ。俺とオサムさんが受付のバアさんともめてる時に余裕ぶつこいてエレベーター乗つてつた。あのババア、人を外見で判断しやがって」

しらふで他人の悪態を吐くコーボーを見るのは珍しいのだが、対象が逸脱している。

「6、7人か……」

肩を落とした麻生は見ていて氣の毒になつてしまつくらい氣落ちしていた。

「門前払いが関の山だ」

零すオサムと一緒に、コーボーの口からも大きなため息が漏れた。
「……あきらめるしかねーな。タケさんが無事である事を祈ろう」
完全に脱力した彼を見上げ　幸輔の脳内で、にわかにイメージ
が膨張する。徐々に開く双眸。気付く失念。

「こーちゃん！」

今度は幸輔が立ち上がつた。

「い、いきなり大声出すなよ」

虚を衝かれ驚き惑う麻生に言い放つ。

「梨香さん！」

それだけで伝わつた。

「やばい！」

身を翻すや駆け出した彼の後に幸輔も続く。オサムが何かを叫んだ。「コーボーも何かを言ったような気もある。だが2人の鼓膜には届かず、ひたすら駆けた。広場に面した病棟の、自動ドアが開き切る前に隙間を抜けてエレベーターホールへ　ちょうど到着していたボックスに乗り込み階数ボタンを叩く。『閉』ボタンを連打する麻生の気も知らないで、極めて業務的にドアを閉じ、マイペースに上昇するボックスが腹立たしい。3階に着くまで、麻生は苛立つて壁を叩いた。

チンツ

ドアが開く頃には2人の焦燥は沸点に達し、衝動に背を押される

ままに病室を目指し全力疾走　田的のドアノブに手が届く　麻生
が思い切り引つ張った　！

ばんつ！

「あはははははははっ！」

テレビを見ながら、梨香は大爆笑していた。

『えへへへへへへへへ』

緊張の糸がふつたり切れ、2人そろってその場に崩れ落ちた。

「ははははは！　あれ。どーしたの？」

「どーしたのじゃねーよ……」

2人に気付いた彼女は、笑いすぎて目にあふれた涙をすくいながら、呑気なものだった。

「…………幸輔。あとよろしく」

快心の肩透かし。壁に手を付いて立ち上がる麻生の声音は疲弊で

いっぱい。

「あいよー」

「便所に行つて来る…………緊張と一緒に膀胱も緩んだ」

「漏らすなよー」

「…………手遅れかも」

「…………つそつー？」

頼りない足取りで廊下を歩く麻生の後ろ姿は、気持ち内股だった。

「…………え。ほんとに？」

「ああ！」

突然大声を張り上げた梨香に幸輔の肩がビクつく。

「あなたがもう1人のコースケくんね！」

「もう1人つて…………？」

そんな疑問も、しかしすぐに消える。

「初めてまして、梨香です。よろしくね」

満面な彼女の笑顔は、幸輔の中にある何かを確実に射抜いた。

「よ、よろしくお願ひします～」

弛緩しきつた頬で裏返る声。

松原幸輔、18才。コンビニのアルバイトで生計を立てている。
特技、ひと目惚れ。

第4話：「白スース Tessy」

時に。

麻生浩介は決して潔い性格ではない。虎視眈々と獲物を狙い、いつでも襲いかかれるよう常に爪を磨いでいるような性格の持ち主。だが同時に。

向こう見ずで鉄砲玉な、衝動に駆られるままに飛び込んでしまつ、実際に危険な一面もあつた。

己自身を省みても、扱いにくい人間だと思う。もしも田の前にこんな人間が現れたならば、露骨に距離を取つてバリケードを張つた拳句に深い深い溝を掘ることだろう。

にも関わらず。

幸輔や尋絵を始めとして、友人はいる。頼り信じてくれる人間がいる。

「幸せな事だねえ」

呟いた麻生は、3階から続く階段に足をかけた。幸輔に梨香を任せた後、3階の廊下を歩き回つたのだが、目指すものはなかつた。テンポよく階段を上がり、5階と壁に表記された4階へ。

目指していたのはすぐに見つかった。

右、左、真正面の3方向に伸びる廊下 真正面の廊下の先に、素人目にもそれとわかる異様な空氣。スースに柄シャツをまとつた男たちが剣呑な空氣を生んでいた。その数、6。

ドアの閉じた病室の前で、皆一様に沈黙したまま、備え付けのベンチにどつかと腰を下ろしている。

男たちの中でも最も屈強な男と目が合つた。

「…………」

やつぱやめた。

田を逸らした麻生は右の廊下に爪先を向け、男子化粧室のドアを押し開いた。4つの便器と3つの個室、タイル張りの壁に囲まれたトイレは念入りに清掃されているらしく、汚れなどまったく見当たらない、見事なまでの清潔感だった。

「さて、どうしたもんか」

一番奥の便器で用を足していると、ドアが開いた。患者でもなければ先の屈強な男でもない。白のスーツを細身にまつた若い男歳は麻生と近そうだった。端の便器で用を足そうとチャックを開く彼の服から、甘い匂いがする。ちりちりと便器を打つ音が一つ増えた。

「葉巻、吸うんですか？」

放水し続ける自分のモノを見下ろしつつ、麻生。

「キミも吸うの？」

鼻にかかる声は眠そうだった。

「親父が吸つてたもんで。俺が吸わないんですけど」

「高尚な趣味を持つてるんだね、キミのお父さんは」

「そうですかね」

「そうだよ」

男は断言した。

「見たところ、入院してるわけじゃなさうですね」

「自分のモノ見ながら、よくわかるね」

「横の視界が広いんですね」

「へー。そりやす」「」

「お見舞いですか？」

「祖父が入院してるんだ」

チャックを上げて、男は言い添えた。

「……まだ終わらないの？」

ちろちろちろ……

「膀胱が破裂するんじゃないかなってくらい我慢してたんで」

にこやかに、彼に振り向く。

アッシュに染めた髪を無造作に散らした男の顔と対面 イラストで描かれる猫のような細田に、すっと通った鼻筋。小さな脣も、その頬も、健康的に血色が良い。背丈は麻生より高めだが、気に入るほどでもなかった。白スーツをきっちり着こなす佇まいは紳士的で、まさしく紳士。

そんな彼の笑顔は柔和だった。

「我慢は良くないよ。したい時にしないと、本当に破裂しちゃうよ」「次からそうします」

ドアが開いた。

男が振り向いて、麻生が見やつた先に、ドア枠いっぱいの体格が

先の屈強な男がいた。彼は麻生の事など見えていないかの『』と

「会長が目を覚ました」

「わかった、すぐ行く」

白スーツに言い置くとすぐに退室した。

「彼、細木つていうんだ。苗字からは考えられない体格だよね」元来親しみやすい性格のようで、氣さくに笑う白スーツだった。
「じゃあ、苗字がコンプレックスだつたりするんですかね」
「そうでもないみたいだよ。キミも誰かの見舞い?」
流れるように華麗な話題転換に麻生は首肯した。

「友人の」

「まだ終わんないの?」

「今終わりました」

チャックを上げ、男の脇をすり抜けて洗面台で手を洗う。

「友人の見舞いかー。病気?」

「いや、刺されただけなんで」

「刺されたの?」

「ぶすつと」

鏡越しに見た男の顔は心底驚いている風だが、細田は細田のまま
だった。見開くかと思っていたのだけど。

「ケンカ?」

「いやいや、一方的に」

「世の中、危険でいっぱいだね」

「お互い、刺されないように気を付けましょう」

「あはは~」

「ははは~」

朗らかに笑い合つて、2人はそろつて化粧室を出た。

「キミは面白い男だね」

肩を並べて歩くと、麻生との身長差が大体5センチほどだとわかる。

「見舞い客なら、また会えるのが楽しみだよ」

「俺はつまらない男ですよ」

「自慢じやないけど、人を見る目には自信があるんだ」

男は細目を指し示す。

廊下の交わるところで、どちらからともなく足を止めた。

「じゃ、俺はこっちの病室だから」

彼が指した廊下の奥 先程までいた男たちの姿は消え失せていた。

「俺は3階なんで」

「わざわざここまでのトイレまで?」

「限界まで我慢するのが好きなんです」

「Mだねー」

しつつと言う麻生にからからと笑う男は、見たままの乾いた性格のようだ。

「気が合いそうだ」

それは遠慮願いたい。

「ヒマがあつたらいつでも来ていいよ。いつもいるわけじゃないけど、誰かしら人はいるから。連絡してくれれば飛んで来るよ」

人はいる それは明らかに、患者の他に、というニュアンスを含んでいた。

「また来ますね」

「その時は一緒に葉巻でも吸おう」

「いいですね。一度吸つてみたかっただんですよ」

笑顔で別れ、踊り場まで降りた麻生の背後に声が降る。

「仲良くしようね、麻生くん」

ぴたりと足が止まつた。

「…………」こちらこそ 勅使河原さんてしがわら

振り向く

階段の上から笑顔で見下ろしていた彼は、

「『ひつしー』でいいって言ったでしょ？」

ひらひらと手を振ると背を向けて歩き去つた。

……憶えてやがつた。

彼の鼻歌と、リノリウムの床を叩く足音が妙に響き渡る。

「あいつ……」

麻生の表情が険を帯びた。

「…………」手エ洗つたか？

第5話・「F O O - N o c k G i r l s」

梨香の病室に戻り、麻生がドアノブに手をかけると、
『じゃんけんぽいっ！』

何やら賑やかな男女混声が聞こえた。

『あいこどしょつ！』

『あああああ！』

がちゃや。部屋に入つてみれば、ベッドで笑い転げる梨香と、床に跪いて頭を掻きむしる、上半身裸の幸輔 田の前で苦悶している幸輔の哀れな姿が一体何に端を発しているのか、一瞬理解に窮した。

「あ、アソーくん。おかえり」

「何やつてんの」

「野球拳やつてんの」

それでこれ、というわけだ。

「はい、幸輔。つまんないけど、次は靴下ね〜」「

「ちくしょお……ちくしょおおお」

悔しう涙で靴下を脱ぐ頃輔の姿は、情けないくらい惨めでいっぱい。

「てか、どうして毎回つから野球拳なんだ？」

とてもとても面白そうに彼を眺める梨香へ、素朴な質問を投げる。

「2人で黙つてたつてつまんないでしょ？」

「だからって即野球拳かよ」

「私から提案したら快諾してくれたから」

「提案すんな。快諾すんな」

「いいいいよおおつしつ！」

靴下を脱ぎ終えた幸輔が、みなぎる鬪魂を胸に立ち上がった。こ

いつもこいつで、何をそんなに熱くなる必要があるか。

「次こそつ！ 次こそ勝つ！」

「そう言つて負け続けるじゅーん」

指差し笑う梨香。

「幸輔が1回でも勝てば、私はハダカなんだよ？」

肌は汗を含て艶めかしく上半身をくわせせる
阿だこの異空間は 麻生、絶句。

「神よつ！」

「何の神だ」

叫ぶ項輔の足元に転がるシャツ、カットソー、靴下。対して、梨香は何かを脱いだような様子もない。1回でも勝てばつまつたところ、幸輔3連敗。

弱

というより全体的にバカだつた。

一
じや
次行くよ

梨香が右手を振り上ける。幸

幸輔の喉が振るい震え、雄々しく右手を振りかぶる。

「神が宿つたのは左手じゃねーのかい」

ハヤハガハ麻生の歌、邊に邊に済いが
幸浦　いはや。

梨香
ぐい。

「一」愁傷様

会心の笑顔を前に、幸輔は膝から崩れた。

すもなく。

「幸輔、弱すぎー！」

腹を抱えて爆笑する梨香。よく笑う女だ。

「こんなに弱いヤツも初めて見るわあ」

まぶたにあふれた涙をすくつっていたその瞳が、麻生を捉えた。

「アソーくん、やる？」

「やんねーよ」

「てか何してんの、あんたらは」

3人の視線がドアに収束した。

「入院生活が暇なのはわかるけど、一日田からずいぶんと穏やかにすごしてるみたいで結構な事だわ」

すらりと細い長身が、開け放たれたドア枠に肩を寄りかからせていた。首の後ろでくくつた髪は長く茶色に染め、赤縁メガネの瞳は眠そうに半分まで落ちかかる。華奢な肩に白衣を羽織り、カットソートスカート、タイツにサンダルという出で立ちを見れば、この女が何者なのかは誰の目にも明らかである。白衣の胸ポケットを挟んだ、『忍足』と入ったネームプレートに麻生は目を凝らした。

「……しのびあし？」

ガンを飛ばされた。

「あ？」

女らしからぬ気迫にたじろぐ。

「シノタリ先生だよ」

強烈な視線は梨香に飛んだ。

「オシタリですー。オシタリヒロトですー」

「ご…ごめんなさい」

麻生でもたじろぐのだから、梨香が小さく叢縮するのは当然。
「次間違えたら傷口かっびらくなな」

医者とは程遠いセリフを口走る。

「すみません…っ」

「わかればいいのよ」

一瞬にして殺人的な忍足の気迫は霧消 再び睡眠不足な顔に戻つた。

怖っ。

口に出したら何をされるか……麻生は胸の中だけで言い留めた。

「お二人は始めてよね。彼女の手術を担当した忍足よ。見舞いに来てくれるのはいいけど、変に気合いの入ったじゃんけんやら奇声やら悲鳴はやめて。フロア中に響いて迷惑だから。あと、そこのキミ」

淡々と話す忍足の指が、ジーンズを脱ぎかけたまま硬直していた幸輔へ向ぐ。

「は…ひやー」

「早く服を着ないとケーサツ呼ぶわよ」

「……ひやー」

不可思議な返事にはまったく触れようともしない。大人しく服を着始める彼から梨香へ、忍足の目が滑る。

「秋野さん。調子はどう? 麻酔がまだ効いてるだろ? から痛みはないと思うけど」

「大丈夫です」

「ま、あれだけ爆笑してるんだから、心配するところはないなしそうね」無表情で抑揚もなく言つ。

「麻酔が切れたら痛みが出ると思うけど大して心配はしないわ。あんまり痛むようだつたら、ナースコールで呼んで」

実際に業務的かつ一方的に話した忍足は、梨香の返事もろくに聞かぬまま出て行つた。

「…………あのが担当医?」

彼女が後ろ手に閉めたドアを畳然と見つめ、全身に張り付いていた緊張が徐々に解れて行くのがわかる。

「怒らなければ怖くないんだけどね」

「十分に怖え」

「怖く見えるだけだよ」

「じゅん 梨香は仰向けに転がつた」

「本当に怖い人なら医者になんかならないでしょ?」

「医者は金が入る」

「忍足先生は違うよ」

えくぼを作つて破顔されると、麻生もそれ以上は言えなかつた。

「無表情だからそう思うんでしょう？ 何考えてんだかわからないから怖い。 けど、そんだけの事だよ。歩み寄つてみれば、きっと

いい人だつてわかる」

2個上の意見とは思えないほど、梨香の言葉には心地良い穏やかさがあつた。

「なんか、21とは思えねえな」

「どーして？」

「21つついたら、ほら、まだ人生遊んでるもんだけ考えてたから

「あはは！ みんなそうでしょ。私の場合は仕事柄、そういう人も来るからさ」

「梨香さんって、何の仕事してんの？」

シャツの袖に腕を通していた幸輔が横から入つた。

「尋絵と同じ、ソープよ」

「あ、なるほど。だつたらいろんな人と接するね。俺はまだ行つた事ないんだけどね、ソープ……つて、えええええ！？」

「騒ぐと、また先生が来るぞ」

そう脅してやると、慌てて幸輔は自分の口を両手でふさいだ。

「幸輔くん、知らなかつたの？」

まさか彼がそこまで大仰な驚きように至るとは夢想だにしていなかつた梨香の目が、キヨトンとする。

「尋絵さんはファミレスのウェイトレスだつて聞いてた」

「そりやあいつが高校生ん時の話だ」

そう言えば、尋絵は幸輔をからかう事に愉悦を感じていた。

「こーちゃんは知つてた？」

「知つてた」

「わー、俺だけ蚊帳の外か～」

「そう落ち込むなつて。尋絵にからかわれている幸輔を見てると、

俺も俺で楽しいんだから」

「楽しんでんなよ」

「幸輔つて楽しい人だよね」

「えー」

梨香に言われ、まんざらでもない顔の幸輔　人選誤ったかも
麻生には、幸輔の表情が手に取るようにわかつた。

第6話・「尋絵 - s 腹の虫」

葉崎市の東端 隣接する市との境界線として流れる宇佐川沿いに、桜田梨香と井延耕佑の家があった。鬱蒼と草の生える川辺からは夏の虫の鳴き声が染み出る夕方6時。吹く風は湿氣を含んで蒸し暑い。

「こりゃまた、人気の少ねえとこだな」

周囲を見回す。部活帰りと思しき高校生たちが、遠くに見える橋を自転車で走っていた。

「若いねえ」

「年寄り臭つ」

田を細めた麻生を見もせず、尋絵が吐き棄てた。聞こえなかつた事にしよう。

「ここには何度も遊びに来てんの？」

「何度も遊びに来てんの」

「あつそ」

嫌味つたらしく訂正された。どうやら腹の虫たちが一ぱたりて悪い場所にいるらしい。

一軒家やらアパートやらマンションやら、住宅が連なる区画の中でも、2人が目の前にしているマンションは建てられて間もない事がはっきりと明瞭に見て取れた。3階建てのグレーの外壁は色落ちもしておらず、オートロック式の出入口は蛍光灯が明るく照らし出す。幅が狭い代わりに奥行きを持った、神経質なまでに直方体な無機物。埃ひとつ許さないという意気込みを感じる、綺麗にガラスの磨かれた自動ドアで仕切られた、エレベーターホールの手前に備え付けられているのは、2列×5列の郵便ポストである。そのうちの1つを、無遠慮にも、尋絵が開けた。

ばさつ。

彼女の足元に封筒がまとめて落ちる。ひつー。苛立たしく舌打ちする尋絵に「うんざりしながらも、

「おまえさー、何そんなに苛立ってんの？」

封筒を蹴つ飛ばしかねない彼女より先に、麻生が拾い集めた。きびすを返し不機嫌を大いに散布しながら、尋絵がオートロックの自動ドアを開けている。

「……番号、知つてたのかよ」

ドア脇の壁に埋め込まれたパネルを横目に、ずかずか進む尋絵を追う。麻生の言葉なんて初めからなかつたかの如く、尋絵は別の方に向から麻生と向き直つた。

「仕事でやなヤツの相手したのよ

「どんなヤツ?」

「話したくない。思い出したくもない

「おい

8通集めた封筒を片手に、大股で歩み寄つた尋絵の肩を強引に引つ張る。

「痛いっ!」

悲鳴を上げた尋絵が手を振り払つ。

「何すんの!」

「お前が仕事でやな思いする事だつて俺は知つてるよ。仕事が仕事だしやな客でも相手しねえといけねーだろ? それで不機嫌になつて言つてんじゃねーんだ。空氣悪くすんなつて言つてんだろ。ハッ当たりなら一人でやれよ。見せ付けるよつにすんじゃねー」

「うるせーよ」

「うるせー? 一緒にいる俺の身にもなれ。めちゃくちゃ居心地わりーんだよ。苛立つくれーなら話してくれた方が断然マシだ

唇の端を持ち上げ、睨め上げる尋絵は鼻で笑つた。

「話してどうなんの?」

「いつもやうだよな

「は?」

「自分以外の事だと相談すんのに、自分自身の事になるとまったく話さねえのな。目の前で苛立つてハツ当たりして、話してくれないとわからんねーだろ」

「じゃ、放つといて」

「放つとけねー」

尋絵の顎を麻生の手がつかんだ。肉付きの少ない骨の感触。前に会った時より痩せ落ちた頬。

「自分の事話したっていいだろ。何を考えて何を感じてんのか、そんな事くれえ言ってくれたっていいんじゃねえか」

「……そんなの知つてどーすんの」

「おめーを知れんだろ。苛立つなつて言わねーよ、俺だつてイラつ

く事あんだから。話せ。おめーにとつて俺はそんなもんか」

睨み続けた尋絵から、小さくため息が漏れる。

「…………放して」

その言葉からはもう刺が感じられない。

言いたかった事はすべて吐き出した。麻生の胸にあつたわだかまりは、払拭されこそしていらないものの。

「放して…………もうエレベーター来てる」

見れば、ドアが口を開いていた。一言も口にする事なく手を放し、居心地が悪いまま尋絵とボックスに乗り込む。定員5名の空間で壁に寄りかかり、階数ボタンを押す尋絵を視界の隅で見つめた。

ウウウ…………

ドアを閉めたボックスが緩やかに上昇　　その機械音だけが響く箱内で、麻生はぼつりと言つた。

「友だちなのに何も教えてくんねえって、なんだか寂しいだろ?」

足元に視線を落としたまま沈黙し続ける尋絵に耐えかねた。

「…………」

「放つとけねー」

次の句を放とうと口を開いたら、彼女に先を越された。麻生の口

マネをして無表情のまま、また鼻で笑う。

「告白みたいじゃない」

「ときめいちやつた?」

「いつぺん頭かち割つたら?」

語調が静かなだけに、「冗談か判別し難い。

チンツ

3階に到着したボックスは、ゆっくりとドアを開いた。尋絵は動かなかつた。

「出ひよ

麻生の言葉に応える代わりに、細い指を『開』ボタンに押し付ける。お先にどうぞ、という意思表示らしい。意地を張るつもりもない麻生は、あっさり箱を出た。

「 今日の客ね

ふいに尋絵の声が麻生を追い越す。

「ひどい客がいたのよ。店に初めて来たみたいなんだけど、やたらと命令するヤツで。あーしりこーしる、何してんだバカ、そんなんで金取つてんのか、ちっともよくねーよ、この店はレベル低いなー。何様か知らねーけど、やたらとぶつサイテー男。 あー、ハラ立つて來た」

振り向く。彼女は下唇を噛んでいた。

「やたらとぶつ?」

「そう。文句言つ度に」

「殴り返しゃいのに」

「『殴つたらオーナーに言つ付ける』」

「ガキか」

呆れる客もいたもんだ。

「顔じゃなくて、見えないとこばかり殴るのよ。腹とか腰とか背中とか、肩とか」

通りで、肩を引っ張った時に痛がつたわけだ。

「わらい」

「密だからってさあ、そんな事していいの？ 真昼間からソープ来てるヤツにどうしてそこまで言われんだよ。ストレス発散グッズじやねーぞ」

次第に熱を帯びる言葉を、麻生は受け止めた。

「ひつちだつて仕事だから大人しくしてんだ、仕事じゃなかつたらシゴくかよ！ 何だあれ！ 勃つてんのかわかんねえくれーのソチンが！」

エレベーターホールで受け止め切れるものじゃなくなつた。

「まあまあ、公共の場でハレンチな暴言は避けよう」

「アソーー」

きつと睨み付ける。

「腹貸せ」

「はい？」

胸を貸せの間違いじや？ 言葉の意味は直後にわかつた。

「ほぐつ！」

「あー！ スッキリしたあー！」

腰に手を当てて立つ立ちする尋ねの足元に、腹を抑えてうずくまる麻生の姿があつた。

「……結局、ハツ当たりかよ……」

「ひついう事あつたら、次もよろしくね」

華奢な体のくせに、不意打ちだったものだから拳が重かつた。

「友だちだもんね」

清々しい笑顔で覗き込む彼女が憎らしい。

「一度と店に行くな、ソチン。

麻生は切に願つたといふ。

「さつさと起きろよ、アソーー」

つい先程までの事がまるでなかつたかのような振る舞いで、爪先で小突く尋ね。

「ありがとね」

麻生が顔を上げた時には、すでに彼女は廊下を進んでいた。

「…………まいっか

緩む頬を制し、立ち上がる。

第7話・「悪意を書き殴る」

エレベーターホールから直進する廊下には2対のドアが並ぶ。廊下の真ん中で身を寄せるように隣り合つ造りになつてているのは、奥行きのある長方形の間取りのせいだろうと察せた。蛍光灯の照らす廊下の突き当たりには、非常階段が夕陽を赤く浴びる。

右手の壁の、奥のドアノブ プレートは空白 に尋ねの取り出した力ギが挿し込まれる。

がちやり。

ドアを引いた尋ねが、玄関に入つてすぐの壁にあるすいつちを押した。果たして暖色系のオレンジ色の証明が灯る。

「ゆつくりしてつてよ」

「つて、おまえんちじやねーだろ」

石張りの玄関に木製の靴箱。スリッパスタンドには4足のスリッパが差されている。そこから尋ねは2足抜くと1足を突っかけ、ステスターと上がり込んで行つた。

「猫に小判」

靴箱の上に置かれた、招福と書かれた小判を首から下げた招き猫をチラ見し、麻生もスリッパに履き替えた。起毛のスリッパはフカフカしていて、履き心地は良かつた。ピンク色なのが気に入らなかつたのだが、残る2足のスリッパはと言うと、緑と紫 消去法でピンクをキープ。

廊下を進んで左に折れると居間だつた。キッチン、食器棚、テレビにテレビ。壁にもたれた本棚にはマンガ本が前後2段構えできつしりと身を詰めていた。

「わつ！」

「どした？」

居間の向こう カーテンで仕切るその奥を覗いた尋ねが、しき

りに手招いていた。きれいに整頓された部屋を突き進み、促される
ままにカーテンの向こう側を覗き込んで、

「うおっ！」

麻生も驚いた。

大きな猫がいた。

もとい。玄関の招き猫をそのまま大きくしたヌイグルミがベッド
の上に鎮座し、こちらを見つめていた。

「何だこりゃあ……」

見たところ麻生の胸元まであるであろう身の丈の、招き猫のつぶ
らな猫目に圧倒される。クローゼットが2つ並ぶ寝室に、そいつは
あまりにそぐわない。

「そーだ」

恐る恐る踏み入った麻生の背中に、尋ねの声がかかる。

「梨香って招き猫が好きなんだつた」

「どんだけ福に貪欲な女だ」

小奇麗な部屋をぐるりと見回す。出窓に招き猫のペア、枕元に招
き猫の目覚まし時計、招く腕にリングをかける置物もあつた。思い
出してみれば、居間のテレビやケーブル、キッチンにも招き猫の姿
があつた。

考へてはいけない事を考へ、口にしたくない言葉を口にする。

「ひょつとして……カレシさん、あまりの不気味さに逃げたんじゃ」

招き猫の隣に腰掛ける。ダブルベッドはいいスプリングだった。

「2人そろつて招き猫が好きみたいよ。2人で招き猫片手に仲良く
撮つたプリクラ、私もらつたし」

「もう突っ込みようがねーな」

丸く膨らむ猫の後ろ頭を撫でていた麻生は、ふとベッドに転がっ
ている物を見つけた。

「2人が幸せならいいじゃない。でも、早く梨香の服を持つてつ
てあげよ。替えの下着もないんじゃかわいそうだ」

クローゼットからブランド物のバッグを取り出し、尋ねは荷造り

を始めた。もう一つのクローゼットはカレシの物だと聞いた事がある。しかし今、その戸を開くべき人間は田下消息不明。どこで何をしているのかわからない。

もしも。

このまま彼が帰つて来なかつたら その時、梨香はどうするのだろう。以前の尋絵がそうであつたように、今の梨香は恋人にべつたりだ。皆の前でこそ明るく振る舞つているが、胸中に侵食している不安を少しだけ忘れようと努めているのが、尋絵にはわかる。

鬼気迫る声音での留守番メッセージ。

それを聞いた直後の彼女の取り乱しようを、麻生たちは知らない。得体の知れない恐怖と不安が混濁し混乱する脳は悲鳴と狂乱しか指令しない細胞の塊に成り下つた。涙なのか、鼻水か涎か汗なのかも判別が付かなかつた。すがる声は悲鳴で、すがる腕は暴力でしかなかつた。水平を維持している天秤から片方の分銅を取れば、当然その腕は傾ぐ。唐突に片割れを見失つた梨香の精神もまた、均衡が幻となつた。

でないの電話に出てくれないの、ビーして出ないの出てよ出てよ出てよおおおーー！

かけどもかけどもつながらない携帯電話を振り回し泣き叫ぶ梨香は、それでもリダイヤルを推し続けた。マニキュアの剥げた爪が白く、指先が赤くなるほど強く。

髪を振り乱す彼女を、必死に抱き締め続けるしかできなかつた。彼女の力になりたかつた。友人を支えたかつた。梨香を救いたかつた。

そして、麻生に救いを求めた。

かつて尋絵を救つてくれた麻生に。

「 ね、アソー 」

こんなもんどうと衣類をまとめ終え、先程から黙り続けている彼を振り返つた。

ウイーン、ウイーン……

尋絵に背を向け、手にしたバイブと同じように首を揺らす麻生を見た。

「黒くて太くて、な、何じゃこりゃあ」

凝視しながら咳いていた。

「あんたは何してんのオオ！？」

即座に背中を蹴つ飛ばす。

「いって！」

「他人んちに上がつて勝手に遊ぶな！」

「ちょっと待て！俺はこれが何なのかと……！」

慌てる麻生の手が何の拍子にか、バイブのダイヤルをMAXに回した。

「ウインウインウインウインウインッ！」

「おおおおー 手が痺れるうううー！」

ベッドでのた打つ麻生。

「つるさいー！」

激しく揺れるバイブを放そともしない手から、強引にもぎ取つた。スイッチ、オフ。

「梨香さん……あんたはスゲー。スゲーよ」

興奮で息も絶え絶えな麻生へ一言。

「本気で死んだ方がいいよ、あんた」

入院生活に必要だと考えられるものをバッグに詰め込んだ後、2人は早々に部屋を出た。まさか主のいない家でゆっくりとくつろぐには気が引ける、目的さえ遂行すれば長居する必要もない。

「犯人は現場に2度現れるつーけど」

予想通りバッグを持たされ荷物持ちと化した麻生は、ドアをロックする尋絵に何ともなく言つた。

「それらしいヤツなんて見なかつたな」

「自分で刺しといて、それでも家を張る理由なんてある？」

「井延耕佑が戻つてくるかもしんねーじやん」

「梨香をホテルに移動させてんのに？」

「犯人がそこまで知つてつかよ」

「あそつか」

肩を並べてエレベーターに乗り、1階に降りるとオートロックの自動ドアをぐぐり 異変に気付いたのは尋絵だつた。

「腹へつたー。メシ行こーぜ、メシ」

「アソーのオゴリなら」

「うわー、搾取つて言葉知つてる?」

「上納つて言葉なら知つてる」

「ソープ嬢つてのはみんなそんなんかい」

「……何あれ」

「腹へつたー」

なおも空腹を訴える麻生の手を引っ張る。

「あんだよ?」

足を止め振り返つた数歩前で、尋絵が指差したのは

「……あれ」

呆然とする彼女の指先を辿つた視線 2列×5列の郵便ポスト
だつた。アルミ製の光沢にピンクが混じつた……ピンク?

麻生の目が見開く。

『FUCK YOU!』

スプレーで書き殴られたピンクの文字。ポストだけで收まり切らず、暴れ回るように壁にまではみ出していた。陰湿な悪戯にも思えたが、露骨なまでの敵意を隠そともしない文字。

カラソツ!

2人の首がドアの向こうに引つ張られる 夜の帳が迫る夕闇の中で、何かが動いた。

「頼む!」

言うが早いか麻生が駆け出す。道路に出てすぐ右折 はるか前方を走るスーツ姿を追つた。距離は5メートルほど。足の速さは…

…追い着ける！

何の目的でここにいる？

あのスプレーはおまえか？

投げ付けたい質問を頭の中で繰り返し駆ける。スーツの人影が脇道へ飛び込んだ。麻生は体ごと体重を横に倒し

キキイツ！

「つとおー！」

目の前に飛び出した車に慌てて身を引く。

迷惑な視線をあからさまに残して おまけに舌打ちしたのも窓越しに見えた 学生と思しき男の駆る車は走り去った。左ハンドルだつたのが気に食わなかつた。

「…………あーあ」

なおかつ、追つていた人影を見失うという失態付き。住宅街を抜ける道では、先のスーツ姿が律儀に待つていてくれるような事もな

く。

「くそつ！」

電信柱を蹴つ飛ばした。

おまけに。

「…………」

マンションに戻った麻生を待つてくれていたのは、スプレー缶とバッグと、尋ねの携帯電話だつた。

道路上に転がるスプレー缶 振り向くきっかけとなつた物音の正体なのだろうが 衝動と力に任せ蹴り上げた。縦回転で放物線を描きながら草むらへと消える缶を背に向け、マンション入り口に放置されたままのバッグへと歩み寄る。程よく膨らんだその上にご丁寧に載せられた携帯電話が

鳴つた。

（

「 ちょっといいかしら」

ノックもせずに忍足女医が現れた時、幸輔と梨香は仲良くバラエティ番組に笑い転げていた。

「あ。俺、ちょっと外すね」

忍足と梨香の顔を見比べ、席を立つた幸輔だが、

「用があるのはキミ」

相変わらず眠そうな瞳は意に反して彼を指名した。

「行つてらつしゃーい」

梨香が呑気に手を振つて送るのを背に、忍足と一緒に部屋を出る。窓の外はとうに暗く、蛍光灯で照らされる病院の廊下は学校のそれを彷彿とさせた。ただ学校とは違つて、清潔感に神経を集中させていられる感があるのだが。

現在午後7時半を回つたところ。病棟内には時間を持て余した患者の談笑や、トイレへ向かう姿が多く見受けられる。そして驚く事に、その患者たち全員に忍足は声をかけた。

「おばあちゃん、腰はどう?」

「薬はちゃんと飲んだ?」

「おじいちゃん。もう若くないんだからはしゃぐんじゃないよ」

表情こそ変化はなかつたが、聞いた事もない柔軟な声で1人1人に話しかけ、患者が笑顔で応えてくれる、その姿は紛れもなく医者だつた。

怖く見えるだけだよ。

梨香の言つ通りだ。歩み寄れば案外いい人なのかもしれない。

「慕われてるんですね」

となりの病棟につながる渡り廊下を歩きながら、幸輔はその背中に言った。

無視された。

梨香さああん！

息苦しさに助けを求めた。

となりの病棟は外来病棟だった。こんな所に連れ出して何のつもりだろう。受付時間とうに過ぎた病棟内は消灯されており、非常口を示すグリーンの光源だけが残る中、2人の足音だけが不気味に響く。

「この病院の診療室、担当医ごとにボックス部屋になつてんのよ」緑色のソファが並ぶ待合室を横切つて、忍足の足が止まつた。廊下の両脇にスライドドアが何枚も並んでいる様は、薄闇に浮かび上がつているようで氣味が悪い。すべてのドアには大きく番号が記されていた。患者を呼ぶ際に、診察室の番号で招くシステムらしい。

「病状やカルテも立派な個人情報だから、密室で診察するの」

7番のドアをスライドした忍足が、診察室の明かりを付ける。

「何してんの。早く入りなさい」

促されるままに入室した。蛍光灯の光に目を細め、ドアを閉める。「座つて」

さらに促され、一見して高価なものとわかる、背もたれ付きの黒革イスに腰を沈める。こんなにも座り心地抜群なイスで診察を受けるのかと、幸輔は戸惑つた。

部屋は4畳ほどの広さ。忍足が座るデスクにはパソコンと、レンズゲン写真を見るためのディスプレイがあり、あとは幸輔の座るイスだけが用意された簡素な部屋だった。

「ここなら、話は外に一切漏れない。この意味がわかる？」
優雅に、忍足の長い足が組む。

「この意味つて……」

今さらながら幸輔の胸がざわめいた。主治医とその患者の友人が密室で話すなど、これではまるで……

「……もしかして、梨香さんの身に何か……」

「彼女は健康そのものよ」

即答はうれしいが、せめて表情に変化がほしい。

「まあ、その梨香さんに関係する事なんだけど」

デスクに肘を突き、メガネの奥の双眸が一瞬にして鋭利に変わる。

「エロエロパラダイスって知ってる?」

「…………」

「…………今、何て言いました?」

「エロエロパラダイスって知ってる? って聞いたの」

端正な無表情で何を言つたかこの人は。

「…………なんですかそれ」

「これなんだけど」

白衣の胸ポケットから取り出した名刺カードを幸輔に差し出す。ド派手なピンクにこれでもかとハートマークを散りばめたいや、詰め込んだデザインの紙に、丸文字で印字された文字。

『エロエロパラダイス エリカ』

「梨香さんが所持していた物よ」

「勝手に取つていいいんですか」

「もらつたの」

幸輔の冷静な突っ込みをものともせずに返した。

「かわいいわねって言つたら簡単にくれたわ。 で、もう一枚」再び胸ポケットに指を入れる。次いで差し出された物も同じものだつたが、こちらにはキスマークが付いていた。

「なんで2枚も持つてるんですか」

「キスマークの方は同僚が落としたものよ」

「はい?」

驚き手元の2枚を見比べる。

「同僚つて言つたら」

「そう、こここの医者」

顔色ひとつ変えずに忍足は言いのけた。

「その白衣から落ちたのを拾ったの。正直げんなりしたわ。こんなところに行く男と、そのネーミングセンスゼロの店名に

「後者はどうでもいいでしょ」

「もつと捻りようがあるでしょ」

「俺に言われても……」

真っ向から責められても困る。

「そこでお願いがあるんだけど」

話題の移行は早かつた。

忍足という女、無頓着と言つよりもあつさりした性格のようだ。

「可能な限り、梨香さんを外に出さないでほしいの」

言われて逡巡。

「それは……同僚に会わせると良くない事でもあるんですか？」

「良くない事しか残らない」

不気味極まりない事を口にし、忍足は背もたれに寄りかかった。

「そこまで」

キスマークのカードを指先で弄んだ幸輔は、

「人目のない所で、その男がキスマークに口付ける瞬間を見たし」

すぐさま壁に投げ付けた。

「梨香さんが入院してるなんて知つたら何するかわからない」

床に落ちたカードを追う忍足の目には懸念ばかりが映る。

「わかりました」

背筋を這う悪寒と、夏だと言つのに立つ鳥肌と、胃を覆つた吐き気を抑えながら、幸輔は頷いた。

「お願いしたわ。私独りじや守り切れないから」

安堵したのか、わずかに彼女の唇が緩む。

「今日は彼、当直じゃないから安全よ。それから 面会時間は7時までなんだけど、あなたに限つてそこは目を瞑る。事情が事情だから、彼女のそばにいてあげて」

彼女と口にした忍足の語調に何か引っかかりを覚えたが、すぐに氣のせいだと考へ直した。

「で、その男の名前は？」

林航助

これで、コースケは4人目だ。

第9話・「Gi - Wack to Tessy」

『もしもーし。あなたの名前は?』

人を食つた物言いだけで電話の向こうにいる人物が誰だかわかつた。

「……てつしー。女をどこにやつた?」

『おつと。いきなりビンゴとは驚きだね』

「答える。女をどこにやつた」

「この女つて麻生くんの何?」

「そこにはいるんだな?」

『ねえ、麻生くんの何なの?』

鼻にかかる声は聞いているだけで腹が煮立つ。

「どこにいる?」

『この女は大切な人?』

「どこにいるかって聞いてんだ!』

『そういきり立たないでよ。怖いな。今お迎えに上がるから』

「どこにいんだよ!』

『またあとで』

電話は一方的に切られた。着信履歴を見ても非通知。携帯電話を地面に叩き付けたい衝動を舌打ちで抑えた。

ほどなくして、一台のライトバンが麻生の前に止まつた。黒塗りの車体から現れたのは、あの屈強な男だつた。細木とかいつたか。細木の開けた後部ドアを、麻生はバッグ片手に仏頂面でくぐつた。シートに腰を沈めるのを確認して細木がドアを閉める。車内には誰もいない。窮屈そうに運転席に乗り込んだ細木と2人きり。とんだドライブだ。

「これ、しどいてくれませんか?』

「何だよこれ?』

「それをしてもらえない、車は出せません」

体付きから容易に予想できる低音ボイスは、思いの外物腰が丁寧だった。仕方なく、手渡されたアイマスクを付ける。罷に決まつてはいるのだが、これしか尋ねのいる場所への道はない以上、従う他なかつた

「 着きました」

1時間もかからないくらいだらうか、視界が真っ暗な状態で車に揺れていた麻生は

豪快にいびきをかけていた。

肩を振り動かされ目覚めると、口元のよだれを拭いながらマスクに手をかけ、

「まだ取らないでください」

「何なんだよ」

文句を言いながらも細木に腕を引っ張られ歩く、そんな自分の姿を想像したくなかった。そして、今。

立ち止まつたかと思えばアイマスクを取られ、今まで暗闇に慣れていた視界に光が差す。あまりの眩さに麻生は手をかざした。

「おいでませ、麻生くん」

正面から、あの声が聞こえた。

「目隠しした無礼は謝るよ。人に知られたくない場所なもんだから、致し方なかつたんだ。何を隠そう、秘密の場所だからね」

声の響き方から考察するに、ここはだだつ広い場所らしい。肌にまとわり付く湿つた空気。冷房もなし。悟られぬよう爪先を動かすと、じゅりつという音と感触があつた。風はない。遠くでは女の喘ぎ声

「聞こえる? 麻生くんの女はクスリとSEXを堪能中だよ

目が光に慣れた。

「うそつけや」

「どうしてそう言えるのかな」

「あの声は未成年の声だ」

「わお、正解」

勅使河原、拍手。

「そ、麻生くんにまったく無関係な女の子。AＶ撮影中でした」

「……これはまた」

彼の言葉を流してまぶたを開く　推察通り、連れて来られたこ
こは廃工場だつた。

「大層な歓迎つぶりじゃないか」

光源は高い天井からぶら下がつた白熱灯。打ちっぱなしの壁。あ
ちこちに高く積まれた木箱。砂利交じりの地面。麻生から4メー
トルほど離れた木箱で、足をぶらぶらと垂らし座る白スーツが葉巻
をくわえていた。そして、麻生の背後には細木。

見る限り、この場には3人しかいよいようだつた。

「麻生君を迎えるんだから、これくらいしないとね」

勅使河原の口から煙の輪が浮かぶ。これくらいとはどれくらいな
のか、ほんの少しだけ気になつた。

「けど、すげーね。喘ぎ声だけで未成年だつてわかるんだ?」

工場内の隅にはプレハブ小屋が見えた。どこの女かなんて知る由
もないが、その中でコドが行なわれているのは確実だつた。少なく
とも、あのプレハブに2人はいるだろう。この場にいる人数、3人
改め、少なくとも5人。

「わかんねーと思つけど、声の湿り気が違えんだ」

「湿り気、ねえ」

聞いてみただけらしい。

「うん、わかんないね」

勅使河原はそれ以上、大して興味を示さなかつた。実のところ、単
に当てずっぽうで言つただけだつたのだが。

「んじや、次の質問。　麻生くん。井延耕佑つて男を知つてる?」

「知らねーよ。会つた事もねー。んな事より、尋絵はどこだ」

そう。場内に視線を配しても尋絵の姿が見えなかつた。

「尋絵ちゃんつていうんだ、あの『?』」

「どこやつた？」

「あの口も同じ事言つてたんだよね。知らないって。会つた事もないって。けどさ、じゃあどうしてあのマンションにいたんだい？」

終始笑みを絶やさない勅使河原と会つた人間は、人当たりのいい人だと口をそろえる事と思う。笑うと線になる細目は穏やかで明朗な性格であるし、不快を与える要素は見当たらない。

だが。

「教えてよ。どうしてあそこにいた？」

首を傾げたその左目が薄く開く。直視する人間の胸中を見透かそうと聞く左目と、その内面に飼い慣らした残虐性を目の当たりにしてもなお、人当たりのいい人だとのたまえるだろうか。

あいにく、麻生は初対面でその2つと対峙していた。
免疫はすでに付いていた。

「……早合点もいいとこだ」

彼を見据え、静かに言を押し出す。

「早合点？」

「俺と尋絵の新居なのよ、あそこ」

堂々と。

「2人の愛の巣」

「麻生くん、結婚したの？」

「いや、まだ。近々籍入れるつもり」

「へへ。それはおめでとー」

勅使河原の拍手が乾いた音を立てた。

「それはそれは、俺もとんだ勘違いをしたもんだ。恥ずかしい恥ずかしい」

「いやいや、とんでもない」

「あははー」

「はははー」

「細木」

勅使河原の呼び声に背後の細木が反応した。

「はい」

「麻生くんと、近い将来のお嫁さんばどの部屋に入った?」「303号室です」

「あれ? 303号室? 本当に?」

「本当です」

迷いのない細木の返答を聞いて、勅使河原は腕を組んで考え込んだ。

「俺の勘違いかな?」

とんだ猿芝居だと、麻生は自分の事など棚に放り上げて胸中で漏らした。

「その部屋、井延の部屋じゃなかつた?」

「間違ひありません」

義務的に答える細木。勅使河原の唇が、にんまり左右に伸びた。

「ああ、もういい」

「くだらない。」

「こんなつまらぬ一事、お互いやめよう」

麻生が、顔と手を振つて制した。お互いがお互い、見え透いた事を言つているこの状況が億劫だつた。

「素直になろうよ、麻生くん」

「ずっと監視してたのかよ」

微笑する彼にため息をつく。

「いや、そんな事ないよ。監視は時々しかしてない。人の生活を覗くのは趣味じゃないから」

肩をすくめてうそぶく勅使河原へ、单刀直入に切り込んだ。

「梨香さんを刺したのはてつちゃん?」

麻生の言い放つた問いを、

「…………うん?」

勅使河原はきょとんと受け止める。

「とほけんな。その井延を探すために刺したんだろ」

空氣を振動した麻生の言は、短く尾を引いて拡散した。

「そんな野蛮なマネをすると思つ?」「

眉毛を上げる顔はそらとぼけてこるものじか見えない。

「他に誰がやるつてんだ?」

第10話：「歪曲f’reendly」

「ん~」

ヒゲの跡もない顎を撫で、天井を仰いだ彼のとぼけようが気に食わなかつた。

「そつか。それで彼女の姿がなかつたのか。ふうん、刺されてたのか

独り言を呟き始める始末。なめきつた拳動は麻生の神経を逆撫でた。

「とぼけてんじや……！」

踏み出したその肩が強く引かれた。振り向いた頬に鈍痛が破裂吹き飛んだ麻生の背中が派手に地面に擦れた。

「つてつ！」

視界で星が瞬いた。遅れて口腔に鉄臭さが充満し、殴られた頬を激痛が圧迫する。

「失礼します」

かろうじて聞き取れた声に続いて、あばらに重圧がかかつた。

「てめつ！」

逃げようと暴れても遅かつた。体に乗っかり麻生の両腕を膝で、腹を尻でしつかりと固定した巨体は、弾き飛ばすには重すぎた。それでも抗いながら細木の顔を睨み付けた顎を、彼の大きな手がつかんだ。潰されるのではと思うほどに強い握力で。

「麻生くん」

組み敷かれた麻生の頭上で、耳障りな声がする。いつのまに歩み寄つていたのか、麻生の頭を左右から挟むように立ち止まつた勅使河原の表情は、照明の逆光で影になつていた。

「突つ走る前に良く考えてみなよ。彼女を刺すくらいなら、部屋に乗り込んで直に聞き出す方が早いし利口だと思わない？」

尋ねを奪われ頭に血が上つていたせいもある。単純に、生理的に受け付けない人間を目の前にして苛付いていたせいもある。答えを急くあまり、失念していた。

歯噛みする。

「そんな頭の悪い事、俺がするわけない」

「……てっちゃん」

「何？」

「井延つて男、何したんだ？」

「教えてあげられない」

「そう言われるだらうと予想はしていた。」

「…………と思つたけど、場合によつてだね」

「…………は？」

予想外な方向に血路が開く。しかし相手は勅使河原、開いた道を容易に渡させてくれるとは思えない。

「麻生くんの友達、たしか大東病院に入院してるんだよね」「過去の麻生自身の言動を心から悔やんだ。こんな事になるのなら、化粧室で迂闊に話すのではなかつた。」

「一方的に刺されちやつた友達の見舞いに、来てたんだよね」「もつて回つた言い方してねーで、ストレートに言いやがれ」「友達に井延の居場所を聞いてくれない？」

「ヤだ」

「細木」

顎をつかむ手に力が込められた。ギリギリと骨が軋み頬に歯が食い込む。全身の筋肉が収縮し、激痛の悲鳴が麻生の喉を灼いた。

「…………」

「はい、止め」

勅使河原に呼応し顎を締めていた力が緩む。

「できれば、麻生くんとは仲良くしたいんだ」

骨にこびり付く痛覚に眉間に寄せ、息息奄々と抗議する。

「これが仲良くしようつー態度かよ……」

「嫌われたくないんだよ。もしも麻生くんの友達が姿を消したりしたら、きっと心を痛めるでしょう？ そんな麻生くんを見たくないんだ。これは、その気持ちを伝える手段」

「強引な男は嫌われつぞ」

「結果良ければすべて良し」

勅使河原が唄うように、ジャケットの内ポケットから何かをつまんだ。麻生の視界には逆光で影としか認識できないそれを、

「動かないでね」

麻生に向け垂直に落とした

スタンツ！

「…………」

鳥肌が総毛立つ間もなく、麻生の首筋、すぐ右脇に突き立ったもの落下する瞬間に見えたものはナイフだった。依然と勅使河原の表情は窺えない。遅れ馳せ、毛穴が一気に開いて冷や汗が吹き出た。プレハブの喘ぎ声が大きくなつた。

「麻生くんに嫌われるくらいなら、いつそ殺す方がマシ」恐ろしい事をさらりと言つてくれる。再びポケットから影を抜き出した。

「……刺したのはおまえんとこの人間じゃねーんだな？」

「違うよ？」

「だつたら……誰だ？」

「知らないね」

麻生の独り言に律儀に応え、つまんだら影をぶらぶらと揺らす。

「あつちは、もうすぐ終わるみたいだ」

喘ぎ声とスプリングの軋みが大きく聞こえるプレハブに首をひねつた勅使河原の顔を、ライトが照らした。

「こつちもそろそろ終わらせないと　あ」

やつと窺えた微笑が啞然とする。指からすり抜けた影が麻生の左目に一直線に落下し

スタンツ！

「やー、『めん』『めん』落としちやつた」

息を呑んだ麻生の左耳元にナイフが突き立っていた。

「……お、おめーよー もう」

喉からはかされた声しか出ない。

「安心して。次は平氣だから」

三度、ポケットから抜く。

「一体いくつ持つてんだ」

「ナイショ」

つまんだナイフの狙いを定めて。

「さ、麻生くん。協力してくれるの？ してくれないの？」言つと

くけど、保留はなしね

「……………くそ」

先回りされた。

「どうする？」

どうする？ 自問した。

ヒロの野郎、マヌケにつかまつりやがって。
胸中でハッ当たり。

喘ぐ女がうるさかつた。

テンポを早くするスプリングがつるさかつた。

漏れ始めた男のうめく声もつるせい。

勅使河原が憎らしかつた。

細木が邪魔だつた。

勅使河原を殴るのに、細木は邪魔だつた。

ヒロの野郎……あとでぶん殴つてやる。

「 時間切れ」

制するいとまも有らばこゝで。

勅使河原の指からナイフが離れた。落ちる事が義務だとでも言うように、ナイフは一直線に。麻生の右目が、その切つ先をたしかに捉えた。憎いまでに尖った先端はそれが権利だとでも主張するよう

に麻生の右目を

ズツツ！

っ！」

「
プレハブの男女が絶頂を迎えた。

尋繪は寝起きがいい。睡眠を漂っていた意識が浮上し、枕とタオルケットの感触の中で寝返りを打つ。腕に触れたタオルケットは短く毛羽立っていて、少しくすぐつた。最近買ったばかりだというのにもう毛羽立ちやがつて そんなはずない。そんなにすぐ、毛羽立つわけがない。

ぱちりと目を開いて、そこが尋繪の部屋ではない事に気付いた。もうちょっと寝てしまえ、と囁く睡魔を無視して上体を起こす。寝室の窓際に寄り添ったシングルベッド。カーテンの開かれた窓からは眩しい陽光と微風が入つた。窓と対面する本棚には文庫本が数冊と、あとは雑貨だけ。そのせいで棚のスペースはスカスカだつた。床に視線を落とせば、雑貨が転がつたまま放置されていた。枕元に置かれたメガネケースを見つけて思い出す。

そういうえば、コンタクトだつたつけ。

「ふあっ」

とりあえず、腕を振り上げて背伸びとあぐび。
ベッドから下りて、居間に出た。

「アソー？」

部屋の主はない様子。どこかへ外出したのだろうか すぐに戻つて来るだらうと踏んだ。

キッチンに入ると冷蔵庫を開けて、ろくな物が詰まつていなか身を見回してからミネラルウォーターのペットボトルを取り出す。本当は牛乳が飲みたかったのだが、麻生は苦手だと言つていた。舌の上に残る感触が嫌なのだそうだ。

多少、鎧が見受けられるシンクの横に置かれた食器入れのカゴから適当にグラスを選んで、ミネラルウォーターを注いだ。ペットボトルを冷蔵庫に戻し、ドアを足で閉め、ソファに足を運んだところで気が付いた。テーブルに置かれたメモと、背もたれにかけられた

タオルケット 昨夜はどうやら、ソファで寝たらし。さぞかし寝にくかつたろう。

「今さら、何を気遣つてんだか」
ソファに座つて、テーブルのメモを手にする。メモに隠れるように、カギがあつた。

『カギ、持つといで』

味気なく走る筆跡は麻生のものだ。

ポストに入れるでも、本人に返すでもなく 持つといで。
何のつもりでどこへ行つたのか知らないが、少しだけ不安に胸が
揺れる。すぐに彼のケータイにかけたが、『電波の届かない所』云
々のアナウンスにしかつながらない。

なーに、すぐに帰つて来る。

自分にそう、言い聞かせた。

ここにいてもヒマな時間を食いつぶすだけだ。今日は仕事もない。
梨香の所へ行く前に自宅に帰つて、シャワーでも浴びよう。カギは、
麻生が帰つてきたら投げ付けてやればいい。帰つて来たら
帰つて来れば。

カギをつかんで出た玄関で、梨香のバッグと、対面した。その上
にメモが一枚。

『よろしく』

「そんで、バッグ引きずりながら家行つて、ここに来たわ
けよ」

「都合良く荷物を押し付けられたんだね」

「出かけるついでに持つてつてもいいじゃない？」 アソーに文句言
つたる

「それから、アソーくんから連絡は？」

大東病院の個室。下着を換えた梨香は、浴衣に腕を通しながら尋
ねた。その腹部を覆う包帯が痛々しい。尋ねは首を振る。
「まったくなし。どこ行つてんだかもわかりやしねーし」

シーツに引っ付いていた赤銅の髪の毛を叩き落したところで、不

満が解消できるわけもなく。

「どこに行つたんだろね、アソーくん」

「幸輔ー。入つていいよー」

梨香の着替えが終わるのを見計らつて、ドアの向こうで声をかけた。わずかに開いたドアの隙間から、おずおずと幸輔の顔が覗く。

「幸輔つてさ、バイトは平気なの？」

尋絵はささやかな疑問を投げかけた。昨日から梨香の見張り役に着任したのは良しとして、就任期間が定められていない。いつまでここにいるのか定かではないが、幸輔にも人並みのスケジュールといつものがあるはずだ。その代表例が、コンビニのアルバイト。と言つが、それ以外を知らない。

「うん、問題ないよ。知り合いが経営してるから、融通利くんだ」ドアの外でしゃがんでいたのか、幸輔は屈伸を始めた。

「知り合い？」

「友達の親」

『あ～』

尋絵と梨香、2人そろつて納得。

「そりゃ多少の融通利くわけだ」

「シフト気にしなくても平気だね」

異口同音に頷く。

「今日つてコーちゃんは来ねーの？」

「音信不通で行方不明なのよ」

尋絵が見舞いに来るなり幸輔を追い出したものだから、彼はその事を聞いていない。同じ事を説明するのはひどく億劫ではあったが、仕方ない、説明してあげよう

梨香のマンションの前で遭遇した不審な人物を麻生が追い駆けて間もなく、その場に取り残された尋絵の前に黒いライトバンが現れた。

「やあ、こんにちは」

田の前で横に開いたドアから、アッシュ・ブルーにしたスースの男がその身を出した。

「ちょっとだけ、お話ししてもいい？」

「怪しい人にはついてつちゃいけないんで」

「大丈夫。俺は怪しくないから」

尋ねの腕を取るなり強引に引っ張る力は強かつた。

「大きな声出さないでね。平和主義者だから、何事も穏便に進めたいんだ」

喉元まで出かかった悲鳴をとつたに飲み込む。平和主義者の手には拳銃が握られていた。

「……誰？」

「車に乗ってくれたら、教えてげる」

乗るか死ぬか　　ずいぶんとまあ、一方的な一者択一だ。

「さ、乗つて」

結局腕を引っ張られ、つんのめるようにして車へ引き込まれた。

「ちょっと……！」

「ちょっと失礼するよ」

抗議の声を上げた彼女の口を布のようなものが覆つ。脳が頭の中で浮く錯覚と脱力感。

「ケータイだけ借りるね」

意識の輪郭がぼやけ朦朧とする聴覚はその言葉だけを捉えて、五感は切断された

第12話：「Love letters」

「……んで、気付いたら麻生の部屋だったのよ。その後どうなったのかさっぱりわからないからって、聞き出そうにも麻生の姿はないし」

「布で口元を押されて……尋ね、貞操のピンチっ！」

「……あんたが言つと笑えない」

わめく梨香への反応に困った。

「そこいらへんは平氣よ。特にこれと言つて、体はなんともなかつたし」

「体 なんとも淫靡な響きだね」

伸脚に移つていた幸輔は無視。

「となると、いよいよアソーくんの行方が気になるな」

「コ一ちゃんの事だから、ひょつこり戻つて来るんじゃない？」

「メモを2枚も残せたくらいだし、心配はしないんだけど。でも何があつたのかは気になるでしょ」

「これ、何？」

「勝手にレディのバッグ覗くんじゃねーよ」

ストレッヂを終えるや、おもむろにバッグを開いた幸輔を蹴つ飛ばす（土足）。悲鳴を上げ大仰に倒れた彼の手から、封筒がばらまかれた。

「ああ、これ」

拾い集めながら、ポストを開けた時の光景を思い出す。あの時の尋ねは自分でも驚くほど苛立つていた。神経がささくれ立つていた。機嫌が悪い事を隠そうともせずに、むしろ前面に押し出していた。麻生の言葉がうれしかった。

「梨香。これ、たまつてた郵便物」

「こりない」

それまでの笑顔が失せていた。普段口々と笑う梨香の顔は、表情すら失っていた。

「でも」

「いらない」

こんなに強圧的に拒絶する彼女を目の当たりにした事がない。差し出した封筒を見ようともせず、頑なに拒み続ける。天井の角を睨み付け、両手の指を組み合わせ、寡黙になる。

「……いらないって言われてもねえ」

尋絵の手の中で行き場を失った封筒たちを見下ろす。一見してダイレクトメールの類ではないとわかるそれらは、皆一様にアズキ色の封筒だった。全部で7通あるアズキ色には、切手があつたりなかつたり。

なかつたり?

「へー。切手なくとも届くんだ」

復活していた幸輔が横から覗き込んだ。

「郵便局はボランティアじゃねーだろ」

本当は、サービス精神旺盛じゃないと言おうとしたのだが、そんな事はどうでもいい。梨香の異常な拒みよう、無表情、切手がなくとも届く手紙。開けるのもどかしい尋絵は一枚の封筒を力任せに引き裂いた。破壊された隙間から覗いた便箋もアズキ色。6通を幸輔に押し付け、抜いた便箋を開く。裂けた封筒が足元に落ちた。

『ぼくの愛するエリカへ

僕に黙つて、いなくなるなんてするいよ

けどエリカは、ぼくの愛を確かめたかつたんだよね?
ぼくに追い駆けてほしかつたんだよね?
わかってる。わかってるよ

待たせてごめんね

やつと見付けたよ

さあ、2人で純潔な愛を育もう

まだ続く文を無視して、幸輔の手から奪つた封筒も同様に裂く。

『あんな店、早く辞めてぼくと結婚しよう』『エリカと一つになりたい』『長身のあの男は誰だい？　ぼくとエリカの仲を邪魔するヤツは許せない』『エリカのために花を買ったよ。小さくて、キレイな花』『最近帰つて来ないけど、どうしたの？　心配だよ』『プレゼントは気に入つてくれた？　エリカの好きなぐしゃつ。

「……何なのよ、これ」

便箋を両手で握り潰した尋絵は、背筋にいる寒気を振り払おうと、禍々しい何かを発する源を、気持ち悪いその何かを、床に投げ付けてた。

「……いつからなの？」

「去年の夏くらい。前の店の客。しつこいから店も家も変えたの」

口にするのもおぞましいとばかりに、梨香の言葉は味気ない。

「信じらんない。店も家も変えたのに」

衣擦れ。自分を抱きしめた彼女の体は小さく震えた。

「何なのよあいつ。気持ち悪い。ただの客じゃない。客だつたじやない。接客しただけだつたじやない。なのにどうしてこんな事するの。こんな事までしてどうしたいの。どこまで私を追い詰めたいのよ苦しめたいのよ、気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い頭を抱え唇をわななかせる梨香を、尋絵は抱き寄せた。揺れる体、蒼褪めた相貌。抱きしめた頭に顎を乗せ、優しく囁きかける。

「大丈夫。怖がらないで大丈夫。梨香には私がいるから。アソーダつて、幸輔だつて、カレシだつているでしょ」

「コースケはいないの。私のそばにいないの。どこに行つちゃつたのよコースケええ。会いたいよ、そばにいてよお」

呪詛は嗚咽に変わつた。

こうなつてしまつては成す術はない。梨香からあふれる感情との身をきつく抱きしめる。彼女が壊れてしまわないように。彼女が崩れてしまわないように。笑顔が決壊し、ただただ流れる涙に頬を濡らしむせび泣く梨香を、強く強く、抱きしめ続けた。

「 ちよつと行つて来る」

泣いて泣いて、泣いて泣いて。泣き疲れて寝てしまつた梨香を横たわらせた尋絵は、心配そうに彼女を見守る幸輔に言った。

「どこに？」

「もう1回、梨香のマンションに」

寝顔だけを見れば、安らかなものだ。しかしその実、内面は疲弊している。すり減つている。どうしようもないほど、どうしようもないくらいに。「口ミ箱にねじり込んだアズキ色を一瞥する。こんな事態になつていては、梨香に見せなかつただろうに後悔したつて、その先には何もない。だからこそ。

幸輔は何か言いたそうではあつたが、何も言つて来ない。だから先に、尋絵が言った

「幸輔。梨香のそばにいてあげて」

「危ないよ。もしも、この手紙のヤツが来てたら、尋絵さんが……」

「その間、誰が梨香のそばにいるのよ」

ぴしゃりと言い放つ。

「だったら、尋絵さんがそばにいればいい。マンションには俺が行く

尋絵の視線を、毅然と幸輔は見返した。

「どこだか知つてる？」

「……え？」

「梨香んち、どこだか知つてんの？」

「……」

幸輔の視線があさつて飛んだ。

「梨香のそばにいてあげて」

「……はい」

不服そうではあつたが、今度は素直に頷いてくれた。

「手に出したらじばくからね」

「そんな事するかい」

「うそ。信じてる」

まるで弟のような彼にふざけて笑って、部屋を出た。

「あ、そつそつ。好きになるなよ っと、これは遅いか」
振り向きざまに言い添えた言葉に幸輔が固まつた。おもしろいく
らいわかりやすい。からかい甲斐があるつてもんだ。

「梨香には内緒にしといてやるよ」

笑つてドアを閉める。その足を踏み出した時、尋ねの顔は一片の
笑みも消えていた。

腕時計を見ると午後4時まであと5分ほど。晴れやかだった空はにわかに曇り始めていた。もしかしたら、ひと雨来るのかもれない。そうなつてしまえば帰りが困る。びしょ濡れになつてしまえばいつそ気も楽なのが、中途半端に濡れてしまうのは避けたい。濡れ過ぎず、乾き切らずが一番厄介だ。

そんな事を考えながら尋ねはマンションに入った。郵便ポストの前で腕組みする男がいた。

「こんにちは」

渋い顔でポストを睨み付けているのは、頭がすっかり寂しくなった中年の管理人だった。梨香の部屋へ遊びに来る際、何度か声を交わした事がある。

「ん？ あ、こんにちは」

「どうしたんですか？」

「これ見てよ」

管理人が顎で示したのは、郵便ポストの壁 ピンクの『FUCHI K YOU』。

「誰が何のためにしたんだが、困りもんだよねえ」

「イタズラですかね」

「じゃなかつたら、こんな事しないだろう。横文字って、そんなにイカしてるのがねえ」

イカスなんて言葉、久しぶりに耳にした。

「じゃ、失礼します」

早々に話を切り上げて自動ドアを開けようとした尋ねを、管理人が呼び止めた。

「ああ、あんた。井延さんとこの友達だろ？ 郵便物来てるよ」と、今度は指で示す。住民ポストを覗くなんてとんでもねー不届

き者だと一瞬思つたが、すぐに思い出した。見れば、ポストの覗き窓から中身が覗いている。

「桜田さんに、お大事について伝えといってくれないか」

不躾で多少乱暴な物言いではあるものの、一住民である井延も梨香も、顔と名前をしつかり記憶しているし、その身を案じている（彼が救急車を呼んだのだと、あとになつてから梨香から聞いた）。

できた管理人だと思つ。

「はい、伝えておきます」

ポストにはアズキ色の封筒が投函されていた

施錠を解いたドアの向こうには、昨日麻生と来た時と何ら変化はない。当然なのだが。

部屋まで、難なく来てしまつた。怪しい人物を見るわけでもなければ鉢合わせになる事もなく、梨香のように襲われる事だって皆無で、難なく、ここまで来れてしまつた。

部屋に来たつて証拠や手がかりなどなのに、不甲斐ない自分に、少し落ち込んだ。

1秒で立ち直つた。

「……よし」

尋絵の手には封筒がある。先の封筒とは異なつて、ずいぶんと厚みがある。テーブルと並ぶ2つのクッショーン　白と黒、白とピンクのそれぞれ縞模様　のうち、梨香のものと思われる白＆ピンクの方に座り、テーブルの上で封筒を開いた。

便箋とビデオテープ

『この2人は誰？

特に男の方

こいつに言い寄られて迷惑してない？』

氣色悪さを堪えて開いたアズキ色には、その3行しか書かれていない。

この2人という文字。そしてビデオ。

日にも考慮して、昨日の麻生と尋絵の事だと容易に想像できる。

ビデオは大方、マンションを出入りした2人の映像だろう。

何が、ぼくの愛するエリカ、だ。さも恋人のように想いを綴り文字を連ねた文面は、思い出すだけでも鳥肌が立つ。時にそういうた誇大妄想へ発展し、自らが客として接客された事を忘れ、ストーカーになる客がいるという事を、話だけなら耳にした事があった。中には、思い詰めたストーカーに殺害された者さえいる。

殺害 嫌な響きだ。一方的で、理不尽で、妄想。それだけで殺されるなど 梨香が殺される事など、あつてはいけない。そうなつてしまふ前に止めなくてはならなかつた。

ビデオデッキを借りる事にして、気は進まないが、確認の意味でテープをセットした。テレビを付けて 再生。画面はすぐに明るくなつた。

「……え？」

カーテン。尋絵。

カーテン越しに尋絵が背後を振り向く。

次いで、麻生。

「これって……」

呆然と尋絵は呟いた。瞬きを忘れた。口を開ざすのも忘れた。思考すら停止した。

音声のない画面の中で、麻生と尋絵は驚いていた。

画面を越えて、こちらを 寻絵を見て驚いていた。

頭が記憶を呼び起こす。弾かれたように立ち上がった彼女は、寝室とリビングを仕切るカーテンを勢い良く引き開いた。ぶちぶちつという纖維の悲鳴。ベッドの上で昨日と変わらぬぶらな瞳で招き猫が鎮座する。

テーブルのペン立てから抜き取つたハサミを、福を招く猫の額に倒れ込むようにして躊躇なく突き立てる。ぶちつ 繊維を貫く音。ハサミを投げ捨て、穿たれた穴に指を突っ込む。人差し指しか入らない穴を強引に広げる。中指が入り、綿が飛び出した。ぶぢぶぢつ 左手の指が入るほどに広がつた穴をさらに裂く。奥歯を噛み締

め、無心に。盛り上がる綿に両手指を押し込んで、生地を左右に引つ張った。渾身の力を込めた。噛み締めた。噛み締めた。噛み締めた。

「ぶぢぶぢぶぢっ！」

少しでも裂けてしまえば簡単に裂け切れた。真っ白な綿が圧迫から逃れて膨張し、左右の目が別の方向へ向き、招き猫の頭はいびつに開いた。細かい纖維が宙を浮遊。窓を雨が打ち始めた。

小型のカメラが、あつた。

息を乱し、肩を上下させ、しばし放心してそれを見つめていたがむんずとつかみ取るや力任せに、床に投げ付ける。

「バキッ！」叩き付けられたカメラはバウンドして転がった。

「……ゲス野郎が」

されるがままの機械に吐き棄て

「ぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢっ！」

背後で弾けた音でとっさに振り向いた視界一面を布が覆つた。のみならず押し倒される。

「ちよつ！？ 何！？」

わけがわからぬまま本能的に手足を振り回す。右足が何かを蹴つた。

「うつ！」

うめき声と同時に、ベッドに押し付けていた力が緩まつた。腹まで膝を持ち上げ、屈伸の要領で何かを蹴つ飛ばす。たしかな手応え。床に重いものが落ちる鈍い音。体が急に軽くなつた。眼間を邪魔する布をつかみ、払う。仕切りとして使われていたカーテンだつた。

「い、痛いじゃないか」

ついさっきまでカーテンのあつた辺り、リビングと寝室の敷居に小柄なサラリーマンが倒れていた。打ち付けたのか、後頭部をさすり立ち上がる。

「おまえ、誰だよう？ ハリカの何なんだよう？」

やばい……っ！

直感的に察知する。

こいつ、私が生理的に受け付けない人間だ…っ！

ベージュのスーツ。ネクタイはずれていた。

「エリカはどこ行つたんだよう。おまえが隠したのう？」

にじり寄る男に対し、尋絵は膝で後退る。足元に何かを見付けた男は一度屈むと、ハサミを逆手に握つて起き上がつた。さーっと、尋絵は自分の血の気が引く音を聞いた。

「エリカをどこへやつたんだ よう…」

「やあああああ！？」

男の振り上げたハサミがマットに突き刺さる。飛び退らなければ、間違いなく尋絵の膝に刺さつていた。

「どこだ、よう！」

尋絵はベッドから床に転がり落ちた。ぶすつといづ音が不気味に耳を打つ。

「な、な、なつ」

必死になつて四つん這いで逃げる進路 リビングへの敷居に男が跳躍した。眼前を阻んだベージュのズボンに心臓が萎縮する。

「きやあああああ！？」

尋絵の頭は恐怖でいっぱいだつた。仰向けに跳ね、踵で床を蹴つて体を後退させる。凶器を持つた生理的に受け付けない男が殺意を向けている 混乱するための要素は十二分だつた。

「エリカはどう？？」

一步、一步。恐怖心を煽るようにゆっくつと歩み寄る。

「来ないで来ないで来ないでえええ！」

後退に限界が訪れた。壁際に追い詰められた尋絵が乱暴に喉を鳴らせる悲鳴。

ぴたりと。男の足が止まつた。

男との距離は一メートル強。

「…………うるさいなあ」

ハサミを振り上げる。

「せ二、せ二、せ二」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃになつた顔を必死に振る。

「ハサハサハサハサハサハサハサ」

エリカを出せよう

折り上に勝は力が込められた

壁に背中を押し付け両腕で頭をかはい声帯を奮わせた絶叫が、

ガシャアアアアアアアアアアアアンツ！――

突如つんざいたガラスの破裂音に搔き消された。

「ねえ！？」

弱々しくうろたえる男の声にまぶたが開く。後ろに下がった男と尋ねのちょうど間 サッシ窓が粉碎され、破片が室内に散つていった。ベランダからベッドにかけて、土が軌跡を描くように直線状に散っている。ベッドに見付けた植木鉢が、残っていた土を零しながら向こう側に転がり落ちた。

割れたらしい。

ベランダから伸びた手がカギを開け、枠だけとなつたサッシ窓をカラカラとスライドさせる。吹き込む大粒の雨と一緒に、ずぶ濡れた麻生が床を踏み締めた。

名を呼ぼうにも舌が回らない。

「病院からここまで、全力で走つて20分
「だだだ誰だよおう！」

「シナリオ」

狼狽か困惑か両方か、飛びかかった男のハサミを簡単によけた麻生の拳が頬にめり込む。軽々吹き飛んだ男は壁に衝突し、泡を吹い

て白由を剥いた。

「あ、あそ……」

舌つ足らずな尋絵を振り向いた麻生は、彼女に寄るとしゃがみ込んでその頭を撫でてやつた。

「顔洗つて来いよ。今のヒロ、ひでー顔してつから」

彼の笑顔で緊張の糸が緩み、抱きつくるや声を出して泣きじやくつ

た。

第14話：「吐」

濡れたシャツは早々に脱ぎ捨てたものの、ジーンズまではさすがに脱ぐ事ができなかつた。正確には、尋ねが脱がせてくれなかつた。

「パンツ一丁でうろつくつもり？」

質問を投げかけた彼女の目が怖かつたので、ジーンズは脱がずに上半身だけ裸体をさらし、頭はタオルで拭いただけ。

何にしろ。

「こんだけすりや、何もできねーだろ」

立ち上がり、腰に手を当てた麻生はフローリングで身動きできずにつめく男をせせら笑つた。膝を折らせて腕を後ろに回させた上にタオルケットでグルグル巻き。

「げほっ……こんな事して、いいのかよう」

縛る時に暴れたものだから腹に一発食らわせていた。吐くまではないにしろ、呼吸は大いに乱れていた。拳を振り上げると、男の身がビクついた。

「ひつ！」

「……女に刃物振りかざしといて、情けねーザマだな」

初めから殴るつもりなどない。女に対し暴力の限りを仄くし、男が現れてからはこの醜態 弱い者イジメ以外の何にも当てはまらない。虫唾が走る。

「あ」

洗面所から、洗つてすつきりした顔をタオルで拭いつつ、リビングの敷居を跨いだ尋ねが立ち止まつた。彼女の様子を麻生が訝る間もなく、その足が動く。つかつかつかつか 一直線に、男を見つめ、麻生の横を抜け、踏み出し続けた爪先は男の腹に食い込んだ。

「『えつ！』

男の首と唇が前に突き出る。

「 つ 」

尋絵はさらりと蹴った。タオルケットで抵抗もできない男の腹を、手加減もせずに2回。

「 ヒロ 」

彼女の突然の奇行に気圧されていた麻生が我に返り、3発目が放たれる直前に後ろから制止した。

「 い…… 痛い、痛い…… 」

むせる男を睨み付け離さない尋絵の方は、荒れる息に大きく上下していた。

「 殺すつもりかよ 」

背中から抱き締め麻生が止めなければ蹴り殺しかねない、それほどまでの殺意と氣迫。涙と怯えをもって見上げる男の視線と交わるのも毛嫌いするように 嫌惡するように、尋絵は視線を引き剥がした。

「 …… この男 」

「 ? 」

「 昨日、私を殴った客 」

「 こいつが？ 」

尋絵の事を思い出したのか、男の瞳が大げさに見開いた。

「 『 ひー 』、『 めんなさい 』『 めんなさい 』『 めんなさい 』… 」

ひたすら謝罪し始めた男を放置して、とにかく尋絵をソファに座らせる。

「 ヒロ。あいつをいくら蹴ったところで何にもなんねーんだよ。気持ちわかるけど、もしもあいつが死んだ事にでもなってみろ。責められるのはヒロなんだぞ？ ヒロにとつて、それは割に合う事じやねーだろ？ 」

「 …… ごめん 」

田は虚ろになっているものの、冷静さを取り戻した風だった。店、マンション、尋絵に2度も暴力を振るつた梨香のストーカー。彼

女が敵意を注ぎ込む条件はあって余りある。一時の衝動を駆り立てる要素を、男は持ちすぎた。

尋絵の頭を撫でてやつて、問題の男に向き直った。

「改めて。こんにちは、ストーカーさん

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

未だ繰り返す彼の前で、どつかとあぐらを搔く。嘆息した麻生は、デッキから取り出しておいたカセットを男の眼前で示した。

「これはどういう事?」

「ごめんなさい……」

「いつからこんな事してた?」

「ごめんなさい……」

「なあ」

「ごめんなさい」

「俺にも蹴られてえか?」

「つ」

口を閉ざした男は必死に首を振つた。

「だつたら質問に答えろよ。いつから盗撮してた?」

「……エリカの、誕生日」

梨香の誕生日を麻生は知らない。

「何日?」

「6月19日」

今日は6月25日。6日前といつ事は、金曜日。

「どうやって部屋に持ち込んだ?」

「…………宅急便で」

そんな怪しげなもん、ベッドに置いとくなよ梨香さん……

「…………の住所はいつから知つてた?」

「せ……先週」

「どうやって知つた?」

「……街で。偶然、エリカを見かけて」

「で?」

「……後を、ついてつた

「気持ち悪い」

尋絵が低く吐いた。

「……そういうや、この部屋にはどうやって入ったんだ?」

マンションの入り口はオートロックだ。住民が自室から迎え入れるか、暗証番号を入力しない限り入る事はできない。尋絵が一緒に部屋に入るとは考えられないし、オートロックの自動ドアをくぐつたのも、彼女一人だと、さつき聞いている。となると、この男は暗証番号を知つていなければ、この部屋には入つて来れないはず。

「……したつ、下にいた男がドアを開けて入つたからその間に

……そりやそうだ。

このマンションに他の住人もいるという基本的な部分をつっかり失念していた。

「じゃあ」

尋絵が、再度男を睨んだ。男の肩が臆病に跳ねた。

「部屋にはどうやって入つたの」

彼女に対してすっかり恐怖心に囚われてしまつた男は、恐る恐る、なるだけ彼女の気に障らないよう慎重に言葉を探つた。

「……カギ、閉め忘れてたようだ……」

「……」

麻生が尋絵を見た。

尋絵はあさつての方向を見ていた。

「おー」

「……」

反応なし。

「エ エリカは？」

急に声を張り上げ男の身が跳ねる。体を起^こそうとしたのかもしないが、タオルケットが許すべくもない。

「エリカはどこだよ！ ぼくの愛するエリカは……！」

「なあオジサン」

静かに強く、男の語を遮つた。

「オジサンとエリカは恋人か？ 店の中だけの関係だろ？ 別に付き合つてるわけでもねえだろ」

「なつ何を！ ぼくはエリカを愛してるんだ！」

弱々しかつた態度が一変、唾を飛ばして抗議する。

「いっぱい店まで行つて！ 手紙だつていっぱい書いて！ プレゼントだつてあげたんだ！」

純情とは程遠く濁つた想い。ノイズの混じつた恋心。ねじれた愛情

「愛してるつて言つたか？」

赤く濡れた男の瞳を見つめる。

「ぼくはっ……！」

「オジサンの事じやねえよ」

その想いを。その恋心を、その愛情を。

「エリカはあんたに、一度でも愛してるつて言つたか？」
ねじ伏せる。

男の右まぶたが痙攣した。

「……え？」

ぴくつ。

「愛してるつて、あんたに言つたか？」
ぴくつ。ぴくつ。

「…………エリカは、恥ずかしがりやだから…………」
びくつ、びくつ。

卷之二

一言わなかつたろ?「

卷之二

「……………」
「……………」

卷之三

一言わなかつたんだろう?」

ひくひくひく

卷之三

經用
卷之二十一

卷之三

卷之六

卷之三

卷之三

一刀由心愛上

卷之三

エリカははれてきとしの恋人がいるんだよ」

... 817

この事しな

たを愛したやしない」

決定的に 男の顔が崩れた

あああああああああああああああああああああああああああああああああ

自我も崩れ我が崩壊した。死んでいた悲鳴が鼓膜をくすぐる。

「アーティストの心」

10分ほど声帯を酷使した男は、涙と鼻水とよだれを惜しげもなく垂れ流したまま呆けていた。喪失した自我を探る事もなく、茫

然自失としていた。

……そんな状態になる前に闇あんをさしよ」「背後で尋絵が毒づいた。

一
だよな

彼女の言を軽く流したのには理由がある。

麻生はケータイを取り出るとアドレス帳を開き、電話をかけた。
相手はすぐに出た。

どうした二十九人殺しの自首がこなれ、審理が終った。

「ちっさーよ。出でできゅうこる遠野のオッサンに手柄をあづまつ
と思つたんだ」

「二〇一六年

『ははっ！　俺にくれる手柄つてな、どんな首だ？』

三

「そんな事件、起きてんのか？」

聞き覚えがなかつた。テレビニュースなんて、思えば最近見ていない。

「ああ。九州でな

「遠いよ。どう捕まえんだよ」

「彼語でガハハ笑いあまりの声の大それには携帯電話を耳から離す。

『まあいい。今回はストーカーで我慢してやる。次はでつけ首を待ってるからな』

「シモンの住所を教えて電話を終えた

「ケーサツ。仲のいいオッサンに」二つの世話を頼んだ

不思議そうに聞いた尋絵へ、魂の抜け切つた男を携帯電話で指した。

電話をしまふと思ひ出る。

「二つの名前って何だ？」

おもむろに麻生か、男のタオルケットを解きにかかるもんだから尋ねは驚いた。

卷之三

卷八

伊豆抄

刹那、誰も叫びを上げた

「」「」「」「」

体を拘束していたタオルケットが解ける

刹那、誰も叫びを止めず

「」

尋絵の悲

鈍い音。

テーブルにあつた招き猫の陶器をこめかみに打ち付けられ、白目を剥いた男は2度目の失神に倒れた。

「アーティザンのやうな」

ほりと胸を撫で下ろす尋絵に破顔一笑。

きしつ
麻生の右手の中で、招き猫が真つ二つに割れる。

空の中鳥から何かが落ちた

麻生の給一上梓たるは、小型マニカビトヨ。

葉崎駅の北口には飲み屋が密集する。北口がこうも偏った発展をしたのは、葉崎駅を最寄りとする大学が4つもあるためだった。並んだ店の灯す明かりがあふれる午後8時　今日は金曜日。サークルで、個人の付き合いで、酒を交わし1軒目を消化した赤ら顔の学生たちが2軒目を探し、あるいは早々に帰路に着き、あるいは道端にうずくまる光景。四方八方から鼓膜を打つ騒ぎ声。

酔っ払い天国と化した大通りを、駅の反対方向へ歩けばすぐにそれは佇む。

ホテル葉崎。

居酒屋がまだ軒を並べる以前から街を見下ろす11階建ての建物は、今や居酒屋の中に埋もれ、湧き立つアルコール臭に息苦しそうにも見えた。ガラス張りで大通りに接する自動ドアをくぐると、赤絨毯にシャンデリアのロビー。右手奥の受付カウンターにはショートヘアの女が折り目正しく頭を下げる。

「いらっしゃいませ」

好印象待合なしの営業スマイルを浮かべる、彼女の前を横切った先のエレベーターで9階まで昇る。揺れを感じさせないボックスで待つ事数秒、緩やかに停止し左右に開くドア。その向こうには、ロビーとおそろいの赤絨毯が直進する。天井に埋め込まれた電球がやわらかい乳白色で照らし出す壁に、木目の綺麗に浮き上がるドアが等間隔に並ぶ様はまるで絵画を思わせるほど、潔癖なまでに完璧だつた。どの部屋にもアンティークの調度品が用意され、シャンデリアのあるリビングと、ランタンをイメージしたライトスタンドのある寝室といったレイアウト。夜になれば淡いライティングで、ワインのグラスを傾ければ彼女もウットリ。海を一望できるベランダもあります。街の光を足元に、2人で夜の海を眺めてみてはいかがで

しう。目を凝らす事なく、夜闇に煌めく橋が遠くに見えます。曇天時には見えない事もあり。葉崎駅から歩いて10分。1泊2食付、1万6千円から。

さて。

『905』と刻まれた金のプレートを叩く。

が、いくら待てどもドアが開く様子はない。もう一度ノックしても、やはり誰かが出る気配もない。

外出しているのか？ 怪訝に思いながらドアノブに手をかけた。何の抵抗もなくドアは開いた。

不用心極まりない。これでは誰が入つて来るか知れたもんじゃ……頭をよぎった最悪の結果にはつとましたが、すぐに消えた。室内に入つすぐのバスルームからシャワーの音がする。なるほど、これではノックに出る事はできない。ノックが聞こえたのかも怪しいところだ。

つてゆーか、カギを開けたまんまでシャワー浴びんな。

驚かせてやろうと思い、音を立てぬよう鍵を閉め、忍び足で奥に入る。リビングに抜けると果然と立ち尽くした。まず目に飛び込んだのは、コンビニのビニール袋や空のカップラーメンやオーギリの袋の散乱した木製のテーブルだった。銀の燭台は本来の位置であるテーブルの真ん中から、足元に移動している。暗く室内を反射するテレビにはゲーム機がつながれ、コントローラーの伸びる安楽イスの周りにはゲームソフトのケースたちがひしめいた。アンティークである事が誇りのソファに至っては、Tシャツやらトランクスやらジーンズやらが乱雑に……

トランクス？

がちゃ。背後でドアの開く音。頭の中を整理できぬままに振り返った。

「あー、スッキリした」

下半身を巻くバスタオル意外何もまとっていない男が、濡れた頭をタオルで拭きながら現れた。細身ではあるが鍛えていると推測で

きる筋肉。考えるより先に身構えた。

「だつ誰だ！？」

がつしがつしと髪をめちゃくちゃに拭いていた手が止まる。バスタオルを少しずらした男は、覗いた右目でこちらを窺つた。

「……ああ、あなたがコースケさん？」

何もかもを面倒臭く感じているような口調だった。それよりも、名前を知っているという事実に戸惑つた。

「てめえ何モンだ！」

怒鳴る。男は大した反応も示す事なく、ゆっくりとタオルを外した。どこからでもかかつて来いと身構えたのだが、半乾きの茶髪の男は空咳をひとつして、短く答えた。

「俺もコースケなんだわ」

「……意味わかんねーし」

麻生浩介と名乗ったその男は、一通りの説明をした後、おもむろに尋ねた。

「タバコある？」

「切らしてる」

「たしか買つたよーな気が」

頭にタオルをかぶつたまま、無造作に散らかったコンビニ袋を漁り始めた麻生を、所在無く眺める。

「おつ。あつたあつた」

袋から未開封のタバコを取り出し早速くわえた彼は、次いできょろきょろと辺りを見回した。

「ほらよ」

「お、あんがと」

放り投げたジッポで火を付け、深く深く息を吸う。実にうまそうに紫煙を吐く男だと思つた。

「……で、今の話は本当なのか？ 梨香が刺されたって」

「井延さんに対して、そんな縁起でもねーウソつくと思つ？」

語調は真剣でも身に着けているのはバスタオル一枚。

信じるに値するのか、本気で迷つた。

「こんなナリだから信じらんねー？」

心を見透かすように言つてから、どうしてか苦虫を噛み潰す。よくわからない男だ。

「……梨香が刺されたなんて」

鼓動が増して胸が苦しい。眩暈もする。ソファに重なる服の上から腰を下ろした。

「何か冷たい物、つてもこれしかねーか」

テレビのとなりで壁に寄り添う小型の冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出し、麻生はそれを放り投げた。

「ありがと」

「飲めば少しは落ち着くだろ?」

受け取ったミネラルウォーターはしつかり冷えていて、喉を程よく刺激して食道を流れる感覚が気持ちいい。汗ばんだ体と乱れる思考を落ち着かせるのには最適だった。

「話は、わかった」

ペットボトルの半分近くを喉に流し込み、麻生を見つめる。窓に向こうを眺める彼はビールの缶を口にしていた。

「何者にか知らねーが、梨香は刺されて大東病院にいる。だが、その刺した野郎は組のモンじゃねえ」

「組長の話だとな」

「それでもって、病院にいる梨香を守つてくれてるって事だな、あんたが」

「そういう事」

「あの野郎じやねーとしたら……」

梨香を刺したのは。

「……誰だ?」

「ああ、それなら問題ない。もつ捕まえた」

至極あつさりと応えてくれた。おかげで疑問も不安も払拭。代わりに、何とも無駄な事を呴いたという疲労感を覚えた。

「……それ以前に、どうしておまえはここにいたんだ？」

根本的な質問を口にする。

「」の部屋は梨香の身の安全を確保するために用意したものだ。梨香が病院にいる事は信じられても、麻生という男がここにいる現状が理解できない。テーブルのビニール袋を見る限り、今日や昨日からいる様子とも思えない。それ以前に、タバコを見付けられなくなるほどにビニール袋を放置するな。

「あんたが姿を消して、今日でちょうど1週間。梨香さんに会いに来る頃かと思って、2日間ほど張つてたってだけ」

窓際から安楽イスに移動した麻生は、散らかつたケースを足でどかしながら、イスを井延と向かい合わせた。

「もしも生きていれば、必ず恋人の所へ来ると思ってたんで」「もしも来なかつたら、そん時はどうしたんだ？」

「組長のとこに直接乗り込む」

イスに座り、事も無げに言いのけた彼を一笑に付す。

「バカか？ 半殺しにされるだけだ」

「もう殺されかけてるし」

「はあ？」

見たところ、麻生の体には傷一つ見当たらない。

「虚勢張りやがる前に『ミミ片せよ』

「……明日、片やうと思つてたんだ」

目が泳いでいる。

「はつ」

失笑してやつた。

「 なあ、井延さん」

「話逸らすな」

「わあかつたよ！ 今片すよ！ 今すぐ片付けますー！」

いきり立つた麻生が立ち上がった拍子に、バスタオルがはらりと。

「 あ」

「……ひとつと履きやがれ」

手近にあつたトランクスを、慌てて前を隠した麻生に放つてやる。

「きつたねー モン見せやがつて」

「うわせーよ」

かくして、トランクス一丁でテーブルの上に付ける麻生の姿
があった。

第17話：「満足 怪訝 驚愕」

「 なあ、井延さん」

イスに置かれたままのタバコを、勝手に吸っていた井延が顔を上げた。

「どうしてあんたは逃げるハメになつたんだ？」

「俺が会長から受け取つたもの、それがほしいんだよ」

「会長？」

「トミをビニール袋に入れる麻生の手が止まつたが、またすぐに動き出す。

「ああ、タケさんか」

「知つてんのかよ？」

仏頂面でトミを片付ける麻生を驚き見つめる。ビニールからどう見たつて井延と同じ側の人間ではない。学生ほどの年齢の、ただの男だ。ましてや会長はアレであるし、こんな平凡な男との接点などあるはずがない。

「受け取つたつて、何を？」

「教えられねーよ。ただでさえ梨香の事で巻き込んでる見てーだし、これ以上首突つ込む事もねーだろ」

言つてから、はたと考えた。

「おい」

「何」

「てめー、梨香に手出すしてたりしたらブツ殺すかんな」

「人の女に手出すかよ。考えるだけ損だ」

「そりやそうだ。トミもまたに片付けられねえよつた男に、梨香が体を許すわけねーし」

笑つてから、ふと思つ。

「おい」

「次は何だよ」

「まさか、力づくで梨香を…」

「だからあ！ そんな事あ一切してねーっつってんだろ！」

声を荒げた麻生が袋でテーブルを叩いたせいで、せっかく集めた「ゴミ」が宙に舞つた。

「…………あーあー」

テーブルから足元にかけて落下した「ゴミ」をげんなりと見下ろす麻生は、見ていて滑稽だった。

「けどよー、井延さん」

テーブルに屈み「ゴミ」を拾い上げる彼を見ているのも飽きた。ゲーム機と並んだリモコンを手に取りテレビを付ける。バラエティ番組だった。

「会長が、どうして井延さんに託したんだ？」

「無難だつて感じたんだろ。それに、社長を良く思つてねー人間の1人でもあつからよ。俺に渡せば社長の手には行かねーつて事だ」画面の中では、氣ぐるみを着たタレントがプールでジタバタと大袈裟なまでに溺れていた。スタッフの笑い声が聞こえる。麻生の声が重なつた。

「でもバレた」

「そう。それで今や逃亡生活よ」

「誰にバラされた？」

「俺」

「は？」

「酒に酔つた勢いで」

「…………ダメじやん」

「んな事あわかつてる」

頭を抱え、井延の顔が苦渋に歪む。

「わかつてんだけどよ……秘密つてのは、酔いつと誰かに話したくな

るだろ？」

「なんねーよ。なるんじやねーよ

「トランクス一丁のゴミ拾いが

「モーゆ事言うんですかあ？」

「何にせよ、そん時いた誰かがチクつたんだ。

麻生の語氣が一気に弱々しく萎んだ。

「最初から渡しちまつとけば、すべては丸く収まつてたんじゃねー

の？」

「おめーなあ……」

抱えた頭を上げると、あれだけ散らかっていたゴミがキレイになくなっている。

「梨香さんとこから離れる必要だつてなかつたんじゃねーの？」「△△でパンパンに膨らんだ袋の口をキュッと縛る麻生。

「……片すの早えな」

「本気出せば早えのよ」

「最初っから本気出しとけよ」

それには応えず、麻生の放り投げた袋は綺麗な弧を描いて、ゴミ箱へ吸い込まれた。

「今からでも、返しに行けば解決するだろ」

「簡単に言つてくれてんじやねーよ」

井延の口調が荒くなる。

「じゃあ、いつまで逃げてんだ？」

睨みを利かせた視線を受けても動じなかつた。

「明日か？ 1年後か？」

「社長に渡すわけにはいかねえんだ」

「だったら俺に預けろ」

何言つてんだ？

「は～あ？」

素つ頓狂にも程がある。身の程もわかつちやいない。酔狂にしたつて笑い飛ばせもないし、ジョークにしては悪趣味だ。

「絶対、悪いようにしない」

麻生の目は真剣だつた。

生じた沈黙に割り込むタレントの悲鳴とスタッフの笑い声。会長を愛称で呼ぶ男。

麻生浩介。

考えがあるのかバカなのか。

井延を真つ向から見据える彼の目は。

「……くつ

どうして吹き出したのか、井延自身にもわからない。

「わかつてねーな」

どうしておかしさが胸から湧くのか。

「これ以上首を突っ込むな」

「それがさあ、もう十分突っ込んでんだよな～」

腕組みした麻生が困り果てたように首を振る。何を言つているのかさっぱりだつたが、決定的な事実を突き付けてやれば大人しくなるだろう。

「麻生。それでもお前に預ける事はできねえよ」

「何で」

「俺の手元にそいつがねえんだよ」

両腕を大きく広げて示してやる。

「俺が捕まつた時のために、コインランドリーに放つちまつたよ。誰のもんだか知らねえヤツの洗濯物の中にだ」

予想通り、予定通り 麻生の目と口が丸くなつた。

「…………あいたー」

失望の念に手の平で額を叩いた彼の反応を、満足のにじんだ笑みで眺めた のも束の間。

「わかった。井延さん ゼツツつて一捕まるんじゃねーぞ」

「…………？」

決意を瞳に宿した麻生をして、満足は怪訝に取つて代わつた。

「 その力ギなら友人が持つてる」

力ギだなんて一言も言つていない

怪訝は驚愕に至つた。

困った。

困り果てた。

麻生は胸中で独り言を呟き、ひたすら前方へ投げ出していった歩を止めた。数にして5、6歩。距離にして3メートル弱。病室の前ではあの細木が、備え付けの長イスを無遠慮に陣取っている。いつも通り仮頂面で、腕を組み、最小限に首を動かして麻生を見た。

「…………」
特に何かを言つて来るわけでもなく、また細木は正面の壁に顔を向けた。無視というよりも、さほど問題ではないといった拳動だった。

困った。

胸中で繰り返した果てに、気まずさを脇に押しやつた麻生は声をかけた。

「こんにちは。右手、大丈夫？」

腕組みする細木の右手には白い包帯が巻かれている。それに至る直接的な関係者として、麻生は気遣つたのだが。

「…………」

細木は何も言わなければ、一警もくれなかつた。
気まずさが手元に戻つた。

しかし、怯むわけには行かなかつた。勇を鼓す。

「…………あのさ、病室に入れてもらえねえ？ 何するつてわけじゃなくて、タケさんを見舞いてえんだけど」
「…………」

沈黙。

「面会謝絶つてわけじゃねえんだろ？ 5分でいい」
「…………」

続、沈黙。

右手の平を突き出して強調した自分と、この状況がバカバカしく思えた。

「……もういい。通るぞ」

麻生は再び歩を進めた。

1歩、2歩、3歩、4歩

「 それ以上進むな

5歩。

細木の正面で麻生は止まった。目だけが見上げるせいで、睨み付けているように感じる。ひょっとしたら睨み付けているのかもしれない。

「医師と社長以外は通せない」

低く空気を震わせる声音には、有無の発言を許してくれそうな隙がない。

「見舞いに来ただけだつてのに？」

眼力だけで相手を縛る事ができるあるいは氣迫に、麻生は抗った。右手にぶら下がる、包装されたフルーツのカゴを掲げて見せる。

「そいつは俺が届ける。おまえは帰れ」

「顔を見に来ただけなんだつて」

「帰れ」

けんもほろろに繰り返す。

まったくもつて、取り付く島もない。勅使河原が手を回しているだろうと予想はしていたが、よりによって細木を部屋に置くとまでは予想しなかつた。勅使河原のとなりが細木のポジションだと想い、顔を合わせる事はないだろうと高をくくっていた。

正直なところ、麻生はこの男が苦手だった。無愛想どころか、よくできたお面を被っているかのように表情の変化が欠如し、発する言は短い。

要は、コミュニケーションの取りにくい相手なのである。

表情が動けないから、感情がつかめない。短い言葉は義務的で、細木自身が見えて来ない。いつだって我が道に猪突猛進な幸輔とは

異なり、相手を見てから次の行動につなげる性分には苦手なタイプ。相手の出方が皆田見当が付かないため、どう出るべきかが見えない。次の言動につなげない。

出直すしかねえか。

お手上げだつた。

力で押そうとしたところで、細木の腕力は一昨日、身をもつて知つている。正面から向かつたとしても、簡単に投げ飛ばされるのが関の山。強行突破は目に見えて無謀だ。

だが。おめおめと引き下がるわけには行かない。

「……タケさんの様子は?」

「……」

「容態くれえ教えてくれてもいいだろ」

「教える義理もない」

「赤の他人つてわけじゃねえんだ」

「俺にとつては赤の他人だ」

麻生の堪忍袋の尾が、音を立てて細くなつた。

「あんたよお

「はーい、はいはい」

一步踏み出した麻生が首を回す。階段を昇りながら、ぱんぱんと手を叩いていたのは勅使河原だつた。

「そんなに力ツカしたらダメだよ、麻生ちゃん」

くそつ 閉じた唇の中で舌打つ。今この時、最も出くわしたくない人物は相も変わらず白のスーツで、目元に微笑を浮かべて、麻生に歩み寄つた。

「せつかく見舞いに来てくれたのに悪いんだけど、会わせるわけにはいかないんだ」

タケさんの容態が芳しくないのではなく、勅使河原の勝手な都合なのだと、軽薄そうな細目から確信する。たかがドア一枚だ。勅使河原と細木の手をかいくぐつて蹴破るくらい いや、蹴破るのは良くない。閉じこもる事ができなくなる。内側から施錠してしまえ

ば そこまで考えて、細木を見た。

ダメか。

「 いまだ麻生を睨め上げる細木ならば、施錠したドアを破るなど容易に違いない。」

「 ……振り出しに戻る」

「 何？」

「 いや。独り言」

諦めて、力ゴトを押し付けた。

「 ありがとう。ジイさん、フルーツに目がないからね」

きつと喜ぶよ。そう言って、勅使河原の手から細木に渡る力ゴトを、煮え切らない思いを胸に麻生の目は追った。

「 ちょっとだけ、時間いい？」

勅使河原の身が翻る。胡乱に眉をひそめた麻生は肩越しに振り返り、サギ師な微笑をくれた。

「 約束について、話がしたいんだ 」

庭に出た2人は、適当なベンチに腰掛けた。まだ南中に達していない太陽が煌々と照らし出す芝生が微風に揺れて、視界で青々と躍る。日当たりの良い場所に置かれたベンチは座ると尻に温もりを感じ、多少の不快感につながったが となりの勅使河原は涼しい顔だった。

その薄い唇に葉巻を挟んだ。

「 で、だ。盗人は見付けてくれた？」

煙まじりの質問を吐く。

「 そんな簡単に見付かるわけねえだろ」

早速ウソをついた。盗人 つまるところ井延耕佑は、ホテルで息を潜めているはずだ。

『 部屋から出てうろちょろすんなよ』

三雲興会の人間に見付かつたら厄介になると釘を刺した麻生へ、嫌味なまでの笑みを作った井延は、麻生のまとめたコンビニのビニール袋をせせら笑った。

『安心しろよ。メシだつてルームサービスで事足りる』

思い出してみると、改めて腹立たしい。

貧富の差なんて大っ嫌いだつ。

勅使河原に見えないように下唇を噛んだ。

「あいつは、どこに行つたんだろうね」

小さな咳きは独り言なのか判じかねたが、聞こえなかつた振りをして彼の横顔を盗み見る。麻生と同年代の人間が葉巻をふかす姿は、見慣れないという事も手伝つて、どこか違和感を抱かせた。

「吸う?」

視線に気付いた勅使河原が吸い口を差し出して來たが、遠慮しておいた。

「俺はこっちで十分だ」

ポケットから出した、しわくちゃなソフトケースからタバコをくわえる。力キンッ 勅使河原の取り出したジッポが硬質な音を立て、麻生のタバコを焼いた。

「あんがと」

「どーいたしましてー」

力キンッ 再び硬質な音を立て火を閉じ込めたジッポは、スースの内ポケットに吸い込まれた。

「細木さん、つつたつけ、あの人」

「団体でかくとも細木」

勅使河原お気に入りのフレーズのようだつた。

「手、大丈夫なのかな?」

「あれくらいの傷、大した事じゃない」

無感情な言葉を微風に乗せた彼は、ふんつと息を鳴らした。彼の狙いを定めたナイフが麻生の右目を射抜かなかつた事が不満なのか、落下するその刃をすんでのところで止めた、細木が気に食わないのか 次いで放つた細木の言葉が腹立たしいのか。

『 社長。これは……こんな事は、しちゃあいけません』

すべてひつくるめて勅使河原の機嫌を損ねていると考えるのが妥

当だろう。

麻生にしてみれば右目を失う事が避けられて万々歳なのだが、刃を素手で握り止めたために皮膚が裂け、赤い零が刃を伝う光景を目の当たりにし、万々歳という氣も失せた。切つ先に流れ着いた零はすぐに膨らみ、反射的に閉じた麻生のまぶたで潰れた。

あの感触を思い出し、右まぶたをこする。

「三雲興会は、井延の行方はつかめてねえの？」

「つかめてないんだよねー！」

「人はいるんだろ？」

だらしなく開いた勅使河原の口から紫煙があふれる。つまらなそうに麻生に流し目を送つて、背もたれに体重を預けると空を見上げた。

「人はいても、使えないんじゃ意味がない」

どうやら、彼の腹の虫を動かす要素は他にもあるらしい。大した興味も湧かないが。

「へー」

「そ。無関心が正解。麻生ちゃんは井延を探してくれればいいだけ」
先程からずっと気になっていたのだが。

麻生は切り出した。

「……いつのまに『ちゃん』付けになつてんだ？」

「格上げ」

「何の」

「友情度数」

「何だそりや」

一笑に付す。

「じゃ、井延が何しでかしたのか、教えてくれてもいいんじゃね？」

「井延を連れて来たら教えてあげる」

友情度数が上がつたんじゃないのか

反論は先を越された。

「信頼度数はまだまだだからね」

微笑^{わら}う彼の基準がつかめない。

第19話：「病院内で騒ぐと」うなります

入院患者たちが起臥を共にする病棟の1Fには売店がある。ガラス戸で囲われた商品棚のレイアウトをのんびりと歩く幸輔は、各種取り揃えられた商品の豊富さに、しきりに感心していた。

うわっ。

「うかり女物の下着の並ぶ棚に挟まれてしまい、うろたえる。足早に棚を抜け、雑誌コーナーに逃げる。下着類は別で扱えよ。突然の出来事で手放してしまった平静を、適当に手に取った雑誌をめくる事で搔き集めようと試みた。

女物のファッショング誌だった。

おいつ。

狼狽するにも限度つてもんがあるだろ。自分で改めて雑誌を選んだ。自身に突っ込んで、改めて雑誌を選んだ。

7割方落ち着きを取り戻したところで、再度店内を見回す。ショッピングストアほどではないにしろ、スーパーに比べてもまだ狭いのだが、それにしても売店と呼ぶには広い空間を抱え込んでいた。飲食物、雑誌、衣類、生活用品……ポータブルゲームまでも置いてあるのだから驚く。ともすれば退屈でしかない入院生活、せめて楽しく時間を費やせるようにとの配慮なのだろうが……何とも。

店に入った時、レジカウンターに貼られた『現像承ります』のポップな文字を見て、激しく突つ込みたいのを必死に抑えたほどである。

ノンノンッ。

適当に選んだファッショング誌を思いの外熱心に読んでいた幸輔は顔を上げた。ガラスを挟んだ向こうに、忍足がいた。軽く驚いても会釈は忘れない。細く綺麗な指先で、ちょいちょいと手招く忍足に

従つてロビーに出た。

「彼女、明日には退院できるわ」

開口一番、忍足が言った。彼女という代名詞が梨香を指しているのだとすぐに思い至り、幸輔は顔を輝かせる。

「本当ですか？」

トーンを調節できずに大声を響かせるほど。通りすがりの看護士に睨まれた。

「病院内は静かにしなさい」

冷淡な忍足に頭を下げる。

「すみません」

「あとは自宅療養で十分よ。もちろん診察には来てもうつけど、普段通りの生活に支障はないでしょう。本人にも言ってあるけど、仕事は完治するまでは出ないよう。生活に支障を来さないって言つても、傷が完全に閉じたわけじゃないから」

続けて、梨香の傷がどんなものだったのかを説明してもらつたが、幸輔の耳には一片も引っかかるなかつた。

梨香が退院する とても喜ばしい事だつた。そうなると見張り役としての幸輔のポジションはどうなるか。梨香を刺した犯人はまだその尻尾を出していない。幸輔の見張り役としての任期は、犯人が尻尾を出すまで。

つまりは、見張り続行。

@梨香 - S HOME。

……いやーははは。

「……退院がうれしいのはわかるけど」

忍足が不気味っぽく幸輔を見ていた。

「どうしてテレッとして……」

彼女の言葉が切れ、嘆息が漏れる。

「完治してないんだから、当分セックスは我慢しなさい」

たつぱり3秒、幸輔フリーズ。

「セックスっていうのは、体にかかる負荷を考えると……」

「ちつ違つ！」

「最近の若い脳みそって、9割方セックスよね」「NO！」

混乱のあまり英語。

「責めてるわけじゃないわ。ただ、彼女を怪我人として労わつてあげて、って言つてるの」

「誤解です、先生！」

「何が」

「なんつーか、いろいろと！」

先の『彼女』が代名詞ではないのだと気付いて、幸輔は抗弁しようとしたのだが。

「おいいいい！ 待て！ ちょっと待て！」

突如騒然とロビーに響き渡つた男声にびっくりして、入り口を振り向いた。

「うるつさいな」

低く呟いた忍足の舌打ち。

入り口の自動ドアにぶつかりながら飛び込んで来たのは、麻生だつた。焦燥に駆り立てられた彼は、目の前を悠然と歩く男に追い付くとその腕をつかむ。立ち止まつた男は迷惑そうに、苛立つた顔を麻生に向けた。スースに柄シャツ 男の顔に、幸輔は見覚えがあつた。

「おめえ、何のつもりだ！？」

「あ？」

「どうして来てんだよ！」

「来ちやわりいのかよ」

「つたりめーだろ！」

わめく麻生と睨み付ける男。ロビーにいた人間の視線を一気に集める中、男が麻生の手を振り払つた。

「梨香に会いに来るぐれえ、いいだろ？」

「それが良くねえんだ！」

衣擦れの音に幸輔は背後を見た 忍足がいない。

「わけわかんねえよ。あ、もしかして手エだしたか？ あ？」

「出すかよ！」

姿を探して すぐに見付けた。

「隠したつてすぐにわかるだぞ？」

「隠してねえし！ 隠す事もねえし！」

脇目も触れずに言い合つ2人の所へ、忍足は歩み寄つていた。

「悪いけど。病院内で騒ぐのなら早々に出てつて」

「あ？ 僕は見舞いに来ただけだ。出でくならお前だろ、麻生」「井延さん、あんたが見舞いに来るにはまだ早えつつつてんだ」

割つて入つた忍足を挟んで、双方睨み合つ。

「まだ早え？ は？ 何言つてんのかさつぱりだ」

「それを説明してやつから外出ろ」

「麻生……そこまでして俺に会わせねえつもりか」「あんたはまだ外に出ちゃいけねえだろ？が」

「手エ出したんだろ？」

「そういう話じやねえんだよ…」

「手エ出したから、俺と梨香を会わせたくねえんだろ？」

「しつけーぞ！」

「どんな手でオトしたんだ？ 僕が死んだとでも言つたか？」

「言つかよ！」

「Jのゲス野郎！」

「はい。じゃ、続きは外で、つて事で」

と制した忍足の白衣を、男が引つつかむ。幸輔は固唾を飲んだ。

「あんた、しゃしゃり出でんじやねえぞ」

彼女に顔を近付け睨み付けた男の首を、忍足の手がつかみ 長い指が頸動脈を確実に圧迫した。

「ぐつ」

男の枯れた呻き声。

「あの、先生……」

うろたえる麻生。

「医者をなめてんじゃねーよ。てめーの息の根止めなんのなんて、ワケねーんだぞ？」ここは治療が必要な人のための場であって、騒ぎ立てていい場所じゃねーんだ。医者として患者を守る側にいる以上、あんたらみてーな人間を迎えるわけにはいかねーんだよ。わかつた？」

凄みを利かせた彼女の視線に射抜かれ、壊れたオモチャのように麻生は、こくこくと頷いた。首をつかむ腕を男がタップする。

「見舞うのはいい。患者にとつとうれしい事だからよ。ただ、2度も騒いでみる、次は実力行使で排除する事を、その足りない脳みそに刻み込んどけ」

この先何があつてもこの人に歯向かう事だけは避けよう　幸輔は心に誓つた。

?

ふと何かを感じ、彼は周囲を見回した。騒ぎを聞き付けたガードマンが、幸輔の背後から駆け抜けれる。成り行きを見守っていた患者、看護士たちの表情に浮かぶ安堵。ロビー内の張り詰めた空気が緩んだ。隅に身を寄せていた老人が拍手する。やがて拍手はまばらに広がり、すぐに渦と化した。

患者、看護士、売店の店員まで　皆一様に拍手を贈る中心で、麻生はバツの悪い顔で、首を解放された男は咳き込んで、忍足は無表情にガードマンに接していた。

彼の人徳が拍手を生んだのか、単に野次馬のはやし立てなのかは区別ができない。しかしこうして現実に拍手は巻き起こっているし、その反面、この状況をつまらなそうに見つめる数人の医師たちもいた。

これが、忍足自身を取り巻く縮図だと感じた。

先程感じた粘着質の気配は、消えていた。

「…………あいつ、何者なんだ？」

「医者」

「ドクター」

8分後には井延、麻生、幸輔の3人はエレベーターで昇り、11分後には梨香が涙ながらに井延に抱き付いた。唐突な離別の再会は、かくして果たされたのだった。

「会わせちゃつて良かつたの？」

抱擁し続ける2人を残して、麻生と幸輔は病室を後にした。ドアを閉めて、麻生に問う。

「三雲興会の人間に見付かりでもしたら、どうなるわからんねえよ？」「ま、そん時はそん時。 実はさ、さつきまで社長と話してんだ」

「社長？」

「三雲興会の」

幸輔の目が点になる。

「…………いつのまに」

「そのまんま社長は帰つてつたから、井延さんを力づくにでも帰す方が、ひょっとしたら危険なんじゃねえかって考えただけ。もしかしたら出くわすかもしんねえし」

「…………よく鉢合わせにならなかつたね」

「まったく。井延さん見付けた時、本気で冷や汗かい。まさか病院にまで来るとは思わねえだろ」

2人はそろつてトイレに入った。3つ並ぶ小便器の両端で仁王立ち。

「幸輔」

「ん？」

「梨香さんの事、好きだろ」

ぎくつ。

「ひと目惚れしやすいヤツだからなー、おまえ
恥ずかしさが麻生の顔を見させない。心臓が高鳴って落ち着かな
い。」

「う、うるせい」

ふてくされた幸輔の耳までが赤くなっていた。

「ま、今回があきらめた方が」

「わかつてるよ」

ファスナーを上げた麻生の言葉を乱暴に搔き消す。彼の視線を感じながらも、幸輔は見つめ返す事もできずに、

「わかつてる」

語を、ただ繰り返した。

「なら、いいけどよ」

麻生の気配が動く。小便器のセンサーが反応し、水が流れた。
ブブブブブ……！

「お

手を洗う麻生のポケットで携帯電話が揺れる。彼は濡れた手を振つて水分を飛ばしてから電話に出た。

「もしもし?」

『おう。俺だ』

用を足し終えた幸輔にまで聞こえる声は、久しぶりなものだった。

「わり。今病院なんだ。公衆電話からかけ直すよ」

『病院で電源入れといてんじゃねえよ』

麻生は小言!』と電話を切った。

「遠野さん?」

「そう。ちょっとくじ電話して来る

「行ってらっしゃい」

手を洗いながら幸輔は、だるそつこドアを開けた麻生を見送った。
ぱたん。

軽い音を立てて閉まるドア。シンクを流れる水。左回りで排水溝に流れる水。

静かにため息を漏らした。

ひと目惚れしやすいヤツ 麻生の言葉が耳朵で反響する。

わかつてゐる。

そんな幸輔自身の厄介な性格も、それを麻生が責めているわけではない事も。

桜田梨香と、井延耕佑。

お似合いの2人じゃないか。

井延が病室のドアを開け、梨香が振り向いた時に見せた、笑顔から泣き顔への転換。すぐにベッドから飛び出し、彼女の足に引っかかつたシーツが床でほどけ、足をもつれさせたその身を井延は優しく抱き止めて。

強く、抱き締めて。

「……あんなの見せ付けられちゃ、出る幕ねえじゃん」

蛇口を力いっぱい閉めて、幸輔はドアを押した。

「おつと

「あつと」

開いたドアの向こうに、本人がいた。

「ごめんなさい」

「いやいや」

ぽんつ 井延は幸輔の肩を叩いてすり抜けた。そそくさと退出しようとした背中に声がかかる。

「なあ」

顔だけ振り向いた。

「おまえ、梨香のヒマな時間潰してくれたんだってな」

井延が笑った。

「ありがとよ。楽しく過ごせたって言ってたぞ」「どういたしまして

うまく笑い返す事ができたか自信のないまま、幸輔は退出した。

あつちやー。

自然、病室に向かつてしまつた足を止めた。ドアを田の前にして、どうしたものかと悩む。

- 1・「ぐく自然に入る
- 2・一発芸をかます
- 3・井延が戻るのを待つ

……一発芸つて。

結局、部屋に入る事はやめた。野暮に思えだし、何より、幸輔の胸を締め付ける何かがまったく消えない。たまには手加減をしてほしいものだ。

庭にでも出よう そう思つた途端、下腹部に鈍痛が走つた。

「うつ」

へつぱり腰で腹を押された。目を閉じれば、大腸が収縮する様子がまぶたの裏に投影される。体内の何かが肛門を荒々しくノックする。

ちつとは空氣読めよ！

己が身をこれまで憎んだ事はない。18年間、よろしくやつて来た体はここに来て居丈高に刃向かつた。

「つくそつ」

唾棄するにも迂闊に腹に力を込められず、情けない弱音にしかならない。軋み立てる排泄欲求で制限された力を幸輔は足に向かた。全身系を集中 ！

肛門に力を込め、脳内でカウントがスタートする ！

残り15秒 爪先が地を蹴つた。低い姿勢から空氣抵抗をくぐり抜ける。すれ違つた女看護士が、彼の必死の形相にぎょっと道を譲る。廊下の患者たちをジグザグに、巧みに身を翻しよけながら疾走。

残り10秒 廊下を駆け抜けた足にブレーキをかける

キキ

イツ！ リノリウムの床を引っ掻いたシューーズが滑る。横に流れ
る前髪越しに睨み付けたドアを引くと同時に飛び込　　ドンッ！

「大丈夫？」

中から現れた清潔感漂う白衣に衝突し思わず尻もちを付いた。
カウントが2秒早まつた。

「大丈夫ですっ」

差し出された手など見えていなかつた。跳ね起きた幸輔は白衣を
よけて、今度こそドアに飛び込む。

残り5秒　　サイレンが回り警告音がつんざく。脂汗が額を覆う。
トイレには個室が3つ　　手前の2つは内側にドアが開いていた。

和式は不可つ！

なげなしのポリシーでもつて奥の個室に向かう。先程トイレに入
った時と同様、ドアは閉じていた。こここのトイレは洋式で、和式と
は違いドアが外側に開く。そして大概、そのドアは閉じっぱなし
そこまで考えて導き出される答えは　　すなわち。

ドアが閉じているからといって使用中とは限らない。

力む肛門が痙攣する中、脳内でGO－サインが煌々と点灯　　幸
輔は力いつぱいドアを開いた　　！

「…………えつ…………」

井延が、いた。

「…………え…………？」

真つ赤に彩られ、便座で脱力した井延が。

第21話：「HIMAY、bloodに塗れた朱」

公衆電話は、エレベーターホールに備え付けられていた。色褪せたような緑色をした電話はテレホンカードも使えたのだが、

「そんなもん、持つてねえし」

持ち歩かなくなつて久しい麻生は、財布を開いて小銭を探つた。10円玉を投入し、番号を押そうとして携帯電話を取り出す。

「番号なんて憶えちゃいねえし」

遠野の番号を出し、ディスプレイを見ながら番号をプッシュ。じつしてみつと、どんなにケータイに頼り切つた生活かつてわかるよなあ。

呼び出し音を数えながら、しみじみと思つた。

『ねづ』

「わり、俺」

『公衆電話じやなくとも、外出りや良かつたんじやねえか?』

「あ……」

正鶴を射抜き貫通した言葉に、今さらながら気付く。

「……次からはそつする

『ははー!』

遠野の豪快な笑い声は、聞いても不快にならないどころか安心感をもたらすから不思議だ。

「ストーカーのヤツ、どうなつた?」

『そう、それで電話したんだ』

「そりやそんだろ」

『あいつ、あつさり自供したぞ。あんまりにもあつさり過ぎて、肩

透かし食らつた気分だ』

「結構な事じやねえか。暴力沙汰にならなくて良かつたんじやね?』

『俺にはそんぐらいがバランスいいんだよ』

「何のバランスだよ」

『あつさりした取り調べなんざ、発狂しそうになる』

とんだ刑事もいたもんだ。

「発狂しちまつた?」

『そんなヒマもねえほどよ。じつちが聞く事全部に素直に答えてくれちゃってよ、張り合いもねえ』

はんつ 遠野は鼻で笑つた。

『志村良人、39歳。IT系の会社で勤務してんだ。口ウ。IT系つて何だ? 系つて言ってくくつちまえば何でもかんでもカツ口イイとか世の中は考へてんのか?』

「知るか」

軽くあしらひ。

「梨香さんにはいつから付きまとつてるつて?」

『去年からだと。風俗店で彼女に世話してもらつて、のめり込んじまつたんだな。結婚もしてねえし、女の経験も少ねえ。仕事上での接客だったとはいえ、志村にひとつちやそれ以上のもんになつたって事だ』

「つへ～え」

『梨香つて口が前にいた店の店主からも聞いたんだが、毎日のようになつて通つちや指名してたんだよ。イチズなオモイつてヤツだ』

「茶化すなつて」

ははつ! 遠野の笑い声が不自然に途切れた。

「……あれ?」

もしもし? 受話口からは何の返答もない。

はたと氣付いた麻生は口いつぱいに苦虫を頬張つた顔で小銭を取り出した。

『長らく公衆電話を使ってねえと、ビのタイミングで切れんのか忘れちまうよなあ』

電話に出るなり、遠野は爆笑した。

「今度は平氣だ。30円入れたし」

『それなら安心だ。どうせなら前良く、100円入れちまえよ』

『釣りつて出るつけ?』

『出ねえよ』

「じゃ、まっぴらだ」

『100円ぐれえでガタつくなよ、口ウ』

「根っこからの貧乏性なんだよ」

ははは! 遠野なら世の中の何事も笑い飛ばせるよ! うな気がする。

「志村、これからどうなんの?」

『ん? ま、今回は不法侵入と傷害だな 口ウ。一つだけ、おまえの話と食い違つてる部分があるんだけどよ』

遠野の口調が一変、低く神妙さを帯びる。

「食い違つてる?」

『ああ。志村はな、梨香つて口を刺してねえつて言つてる』

「はあ?」

『その口が刺された時間、志村は会社にいたんだ。裏も取れてる。残業してたんだよ』

梨香を刺した人間が志村だと疑いもしなかつた。その志村にはアリバイがある。となると、では……梨香を刺した人間は?

「うわああああああああああああああ!..」

突然廊下を突き抜けた悲鳴に、危うく吸音器を落としそうになつた。

『どうした?』

「いや、なんか、悲鳴が」

『悲鳴?』

麻生の脳裏に一瞬だけ井延の顔が浮かんで消えた。今の悲鳴は、被害を受けた時に発する種のそれではなかつた。むしろ、何か衝撃的なものを目の当たりにしてしまつたようだ。

ばんっ！

どよめき始めた廊下に、トイレから飛び出した人影。転がるよう
に現れたのは幸輔だった。

「い、医者！　この中に医者！　医者はいませんか！？」

「病院だぞ、ここ」

よつほどパニックに陥っているらしい、地べたにへたり込み声を
張る彼は一心不乱。その瞳が麻生を捉えた。すがるように幸輔が叫
ぶ。

「お医者ちゃん！」

「誰だそれ」

「いつ、いつ、いつ！」

引き攣った表情は、決してふざけていとは思えない。ざわり…
麻生の胸でヤな感触がうごめいた。

「いつ！　井延つさんがつ……！」

トイレを指した幸輔の右手は震え、紅く濡れていた。

『コウ？　何があった？』

手にしていた受話器を、フックに叩き付けた。

第22話：「そこにある恶意」

「 お願いされるまでもなく、死なせるわけにはいかないのよ。病院内で人殺しがあつたなんて笑えないでしょ。ここには血液もあるし、設備も整つてゐる。その上執刀するのは私よ？ それを承知でなお、何かしたいつて言うのなら、祈つてなさい」

手術直前でもまぶたの半分落ちた無表情は変化がなかつた。毅然と表現するにはいたさか頼りに欠ける背中を見送り、手術灯の光をぼんやり見上げる。

「…………」

麻生はどこか現実味のない今をどう受け止めるべきか迷つていた。ついさつき腕をつかんだ人間はすぐに血に塗れ、手術台に乗つている。洋式の便座で紅く染まり、だらりと両腕を下げ、貯水タンクに背中と頭を預けた肢体を目の当たりにした時、世界の境界に立つ感覚を覚えた。

生と死。

それは決して可視のものではなかつたが、まるでそこだけ空間を異にしているような、処理のしように困る違和感。五感で感じられる井延の向こう。見えるはずもないのに、麻生は目を凝らした。裂かれた衣服から覗く血肉しか見えなかつた。目を凝らした事を後悔した。

そうこうしているうちにトイレに担架が持ち込まれ、井延は便座から引き剥がされた。固まり切らずにまだ流れる血液が、彼の指先を伝つて床に赤を描いた。

てつちゃんか、細木か……

もちろん、他の人間である可能性だつて否定できない。勅使河原は帰つたのだし、細木はきっと、病室から動かない。三雲興会の人間で、井延を知つていれば誰でもいい。

力づくでも病院から引き離すべきだったと、今さらながら後悔した。

「コ一ちゃん」

呼ばれて振り返る。幸輔が小走りで駆け寄った。

「ごめんごめん。なかなか收まりが付かなくて」

「もう済んだのか？」

「そりやもう、キレイさっぱり。後腐れなく」

「そいつ良かつた」

「体重が2キロぐらい減った気分だよ」

「以上、大便トーグ。

「井延さんは？」

幸輔は手術灯を見上げ、憂慮の色を浮かべた。

「忍足姉さんが執刀中。大した自信を持つて入つてったところ」

「そう」

「幸輔。ちょっとくら二雲興会に行つて来るわ」

麻生の発言に、幸輔の憂色が驚愕に変わる。

「どうしていきなり？」

「井延を刺したヤツの面を拝みに行つて来るんだよ」

「……その事なんだけど」

「？」

何やら言ひにくそうに、控えめに口を開いた幸輔に麻生は怪訝を覚えた。

「いや、最初から言えば良かつたんだけど、なんてーか、言ひそびれたつて言つか」

視線をあちこちへ飛ばしじまつくな彼に苛立つ。

「それ、今じやねえとダメな話か？」

「たぶん、井延を刺したの、二雲興会の人間じやない」

何言つてんだこいつとあからさまに軽侮した目で見た。

「……は？」

「忍足さんに言われたんだ」

そこで麻生は始めて、林航助という人物を知った。

忍足と2人つきりで話した事を述べ終えた幸輔の肩に、ぽんつと手を置く。

「幸輔」

ドロップキックを放つ。

吹き飛ぶ幸輔。

「そういう事あ早く言ええ！…」

言うが早いが駆け出し、転がる幸輔の体を跳躍。痛覚に顔をしかめながらも慌てて起きた幸輔が後を追う。

「だつて話す機会なかつたる！？」

「機会くれえ見付けろ！ ビリしてさつき話をねえんだよ！」

「漏れそだつたんだ！」

下世話な主張。

「バカ！ バカバカバカ！」

「ところで！ どこ向かつて走つてんの！？」

「どうしようもなくバカ！」

「どうせ俺はバカさあ！」

「ちょっとと考えりやわかんだろ！ その林つてヤツが井延を刺したのはどうしてだ！ きっと梨香を刺したものそいつだ！ 刺した理由は！」

「井延さんは……梨香さんの恋人だから？」

階段を駆け上がる。危うく老婆にぶつかりそうになつた。

「梨香を刺したらどうなる！ どこに運ばれる！？」

踊り場で麻生の身が翻る。1秒遅れて幸輔も翻す。彼が言わんとするところがわかつた。

「病院！」

葉崎市の有する緊急病院は大東病院しかない。救急車で運ばれるとすれば、ここしかない。

「それが林の計算だつたんだよ！ 自分の領域である病院にまんまと引き込んだんだ！」

「梨香さああああああん！」

飛び出した3階の廊下に幸輔の悲鳴が轟き渡る。信じられない加速を見せた彼の足はすぐに麻生を追い抜いた。

「速つ！？」

幸輔の田は梨香の病室しか見えなかつた。その手がドアノブに伸びる

ぱんつ！

「あはははは！」

ベッドの上で、テレビ番組を見ながら手を叩き爆笑する梨香。麻生に気付くと不思議そうな顔をして聞いて来る。

それは先日にもあつた杞憂。

どんづ 体に乗せた速度を殺し切れずに、麻生が衝突した。

「おまづ、急に立ち止まるんじゃねえよ！」

体がわずかに揺らいだだけで、幸輔は何も答えない。呆然と注ぐ彼の視線を辿る。

シーツの乱れたベッドを残し、梨香は忽然と姿を消していった。

「梨香さん……」

「落ち着け、幸輔」

その場にへたり込んだ幸輔の頭に触れ、麻生は部屋に入った。

「まだ、そうだつて決まつたわけじやねえだろ。トイレに行つてるだけかもしけねえ」

それが氣休めにもならない事だとわかつてはいた。簡易棚に積まれていたマンガが乱雑に転がる床をよけ、ベッドに寄つた。見てわかるほど、ベッドは正位置からずれていた。

腕を引っ張られ、必死に抵抗する梨香の姿が脳裏に投影される。くそつ。

舌打ち。シーツを苛立ちと力任せに引っ張つた。何の重みも持たない布が麻生の視界で舞い、コトン 何かが床で鳴つた。

腕に抱えた彼女は思いの外に重くはあつたが、彼にはまったく苦には感じられなかつた。むしろ、愛しい人を傍に置ける喜びに全身が火照り、今にも踊り出したいほどだつた。

地下駐車場の空氣は外よりも涼しく、彼の靴音が一定のリズムで鳴り響く。白線で区切られたスペースに大人しく納まる車の列は、何の感慨も持たずに彼を見つめた。

やがて彼は1台の車の前で立ち止まつた。右手に持つていたリモコンキーを押すと、深い青色を蛍光灯で鈍く輝かせる車がヘッドライトを瞬かせた。となりの車との隙間は十分に開いている。彼女を抱えたまま隙間に入り、後部シートに横たわらせた。胸を上下させ、静かに寝息を立てる彼女の額に口付けた。

運転席に乗り込んだ彼は、ダッシュボードに転がつていたタバコに手を伸ばし、止めた。ルームミラーで彼女を確認する。慣れた手付きでエンジンをかけ、すぐに発車。ハンドルを切つて駐車スペースを脱した瞬間、車の前に人影が躍り出た。

「うわっ！」

急ブレーキを踏んだ体が前にのめつた。人影が後方に飛んだのをたしかに見た。

「……おいおい」

飛び出したのは向こうだ。ぼくのせいじゃない。向こうが勝手に飛び出して。

責任転嫁の思考を慌てて搔き消す。

ぼくは医者じゃないか。責任追及なんて後でいい。まずは そ う。まずは手当でが先決だ。思い直した彼は車を降り、ドアを閉めた その瞬間。

「 やあ、先生」

胸倉をつかまれ、圧倒的な腕力で背中を車体に押し付けられた。

「な……何？」

状況がわからず瞬きする。車の前から声がした。

「あつぶね～。あと少しでもブレーキが遅かつたら本当に轢かれてた」

「無茶してんじゃねえよ、幸輔。見ててひやつとしたわ」

「ナイスな演技だつたつしょ」

すつと立ち上がり満面の笑みで親指を立てた幸輔から、麻生は目の前の男へ目を移した。焦げ茶っぽいスースイ姿の男。目立たない程度に茶色く染めた髪の下に、細い指と一重の瞳が並ぶ。見た感じ、イケメン。

「俺の方がカツコイイ」

「は？」

意味がわからず見開いた男の目に、麻生はそれを示した。

「これ、先生のだろ？」

それはネームプレートだった。プラスチックの白い長方形。裏にはクリップ、表には林と記されていた。

「……ああ。どこに落としたのかと思つたら」

「どこに落ちてたと思う？」

ネームプレートを受け取らうとした男の手をよける。

「返してくれないのかな？」

怪訝を込めた笑顔で麻生を見つめた。

「そいつの病室に落ちてたよ」

麻生の顎が後部シートをしゃくつた。

「桜田梨香の病室で、だ。どこに連れてくかなんて知らねーが、彼女を返してもらひうど」

「ああ」

林が笑った。清々しいまでに涼しく、人当たりの良い、さぞ患者たちに好評を博しているであろう笑顔でもって。

「きみたちは梨香の友だちなんだね」

人に好印象を与えるはずのそれは、しかし幸輔の背中を悪寒となつて撫で上げた。外より涼しいとはいえ、それとは明らかに異なる寒気に鳥肌が立つ。得体の知れない黒い何かが幸輔の前で両翼を広げた。右の頸の付け根が痙攣し頬を引っ張る。

違う。

直感的に悟った。

「ああ、友だちだ。だから返せ」

「あ、きみの声」

林の瞳が見開いた。

「知ってるよ。梨香の家に来てたね。もう一人の女は？ そこのきみじゃがないみたいだけど」

幸輔と麻生の顔を見比べる。

こいつか 麻生は確信した。梨香の家で見付けた、招き猫の中から転がった小型マイク。

「梨香の事ならぼくに任せてくれて大丈夫だよ。彼女を不幸になんてしない」

まるで麻生の言葉なんて聞こえていない。彼の眉間のシワが深くなるのも構わず言をつなぐ。

「名前を教えてよ。ぼくらの結婚を祝つてほしいんだ」

「ああ？」

「きみの名前は？」

麻生の何かが弾けた。頭は白く体が動く。固く握った右手が林の頬に打ち込まれる はずだった。

「じつ。

あれ？

麻生の視界がブレた。林を睨んでいた焦点がずれ、浮遊感。頸で爆発した強烈な痛覚を思い出した時にはもう吹き飛んでいた。

「コ一ちゃん！」

幸輔の悲鳴が聞こえ どすつ コンクリートに背中を打つ。痛い。

「先に手を出したのはきみの方だよ。これは正当防衛だ」

歌うような林の聲音。

「つて~」

しかめつ面で顎をさすりながら、麻生は立ち上がった。眼間の林は軽く両腕を開いて言った。

「暴力に訴えようなんて野蛮だよ。いきなり殴りかかられたら、ぼくだってつい反応してしまつよ」

変わらぬ笑顔で右アッパーを素振りする。ビック 空を裂く鋭利な音と、先の、顎で弾けた痛覚が結び付く。単なる医者だと思つていた自分は甘かった。素振りの音、体の軸を揺らさない自然体な構え。ただの医者でない事に気付いた。

「こう見えて、中学から格闘技をやってたんだ。最近はなかなか体を動かす機会がないのが残念だけど

「みたいだな。全然効いてこねえ」

格闘技だあ？ 麻生に知る由もない。にこやかに笑い続ける医者 接し方を改める必要性があつた。

「梨香の友だちを傷付けたくないんだ。初対面だから信頼性に欠けるのはわかるけど、ゆっくり話せばわかつてもらえるよ」

唄うように語を紡ぐ林は、己に心酔しているようにも見えた。

「だから今は、大人しく通してくれないか？」

「断固拒否」

「しようがないね」

一瞬で林は麻生に肉薄する。彼の左拳の軌道上で、とっさに両腕で顔面をガードした麻生の脇腹を右拳が入つた。

「くつ！」

胃が震える。歯を食いしばり反撃のためガードを解いた瞬間、頬を左拳が打つ。

「もう痛くねえ」

頬で受け止めた体勢から打ち出した拳は林の鼻先を掠めるに留まつた。さらに林の懷に踏み込み顎を狙う。

「おつと、危ない」

後ろに重心を移すだけで林は回避した。動体視力もしつかり備えているらしい。麻生がチラリと幸輔を見た。

「よそ見するなんて

林の拳がその左頬を鈍く鳴らす。

「余裕じやないか

次いで右頬を鳴らす。

「

「何だつて？」

訝った林の動きが止まった。生じたわずかな隙に、麻生の身が沈

み彼の腰にタックル

「ファックつつたんだよ！」

どんっ！ 林もろとも車体に突進した。

「ああ！？ 車が！？」

裏返る悲鳴 構う事なく身を翻しざまに林の右腕を取る。

「ケチくせえ事言つな！」

一本背負い 麻生の背で軽々と持ち上がった林はコンクリートに叩き付けられた。

「つでえ！」

硬い衝突音と潰されたガエルのような声が重なった。

「高収入の分際で、車1台でガタガタ わつ！」

勝利を確信していた麻生の腕が急に引っ張られる。体が前のめりに崩れた 倒れ込む腹にめり込んだ左拳。

「うつ

吐き気を押さえ膝を付いた地面には、すでに林はいなかつた。彼を探すため上げた顔を右フックが射止める。視界で星がちらついた。地に手を付いたはずが、麻生は右肩から倒れた。

「さすが、と言うか。ケンカ慣れしてるのかな」

やや息の乱れた声をぼんやりと聞く。吐き気で胃の上辺りが気持ち悪い。鼻腔を鉄臭い匂いが横切った。右頬に当たっているコンク

リートの冷たい感触。

「だけど、やつぱりそれはケンカでしかないよ。敵うはずがない。一本背負いには参ったけどね」

林が大きく咳き込んだ。

「……まだ肺がおかしいよ。つたく

どつ！

「がふつ！」

腹部に衝撃。綺麗に磨かれた革靴がめり込んだらしい。喉元まで迫った胃酸を何とか飲み込んだ。鼻の奥が痛かつた。

「 きみ

びくつ 林に対し車の陰にいた幸輔の肩が震える。

「梨香を返してよ」

先程麻生のアイコンタクトを受け取った幸輔はすぐに車に回り込み、今まさに梨香を背負つたところだった。

「婚約者から恋人を奪うなんて、ひどい事をするもんだ」

「あんたは婚約者じやない」

梨香を背に乗せ立ち上がる。車を挟んで、林は微笑していた。どこまでもやさしく、それでいて狂気をにじませる微笑を浮かべていた。

「返してよ」

手を差し伸べたその微笑が、にわかに破綻する。

「返せって言つてんだろ！」

駐車場内に響いた声が長く尾を引いて
カツツ、カツツ。

靴音に変わった。

第24話：「幸輔サイレン＝赤」

林のものではなく、幸輔のそれでもなく。

「あ～あ。 麻生ちゃん、こてんぱんにヤラレちゃったね」
2人の視線が男声に引っ張られる。

幸輔の左。

林の右側。

エレベーターホールから白ステッジが歩み寄っていた。

えつと……誰？

無造作ヘアに細目。勅使河原という人物を、幸輔は初めて目にした。

横倒れになつた麻生の頭で立ち止まる。

「で。 麻生ちゃんをこんなにしたのは、あんた？」

勅使河原が林を見た。

「……引つ込んでろよ、てつしー」

麻生がうめく。

「つれないね。 あ」

幸輔の背に梨香を見付けた勅使河原は、ふんふんと数度頷いて、「なるほど。 一つだけ確認しよう」

人差し指を立て、林に向ける。

「あんたはあの口の何？」

「婚約者だよ」

いつのまにか、林は微笑に戻っていた。

「そいつは変だね。 あの口には恋人がいたと思うんだけど。 それとも、井延は遊びでしかなかつたのかな。 あの口も、かわいい顔して罪深いもんだね。 いやいや、いやいやいや、ずっと同棲していたは

ずだ。となると、婚約者であるあんたとはいつ会つてたんだろう」「過剰に芝居がかつた身振りで言う勅使河原の見つめる先で、林がぼそりと零す。

「……どいつもこいつも

その右手が震えていた。うつむいたせいで前髪が瞳を隠す。

空気が、振動した。

「何だ！ どいつも邪魔すんじゃねえ！ わけわからんねえ事ばかり言いやがつて！」

「……てつしー、あっち行つてろ」

「麻生ちゃんは大人しく寝てな」

身を起こすために立てた麻生の腕を足で払う。

「いてつ！」

「婚約者だつて言つてんだろ！」

再び倒れた彼を越え、林が飛び掛かった。

「婚約者だらうが何だらうが、興味ないんだけどね」「後方に跳んだ勅使河原の鼻先で右フックがうなる。彼の右手がスーツの内側に回つた。林の左足が大きく踏み込む。つながる右ストレート

捉えた……！

息を呑んだ幸輔の視界で勅使河原の身が沈む。その頭上を紙一重で拳が過ぎた。

どすつ。

勅使河原と林が すれ違った。

「麻生ちゃんを痛め付けていいのは俺だけだよ」

くるりと振り返つた勅使河原の言葉をまるで聞いていない風で、右腕が伸び切つたまま静止した林は呆然と、左太腿を見つめていた。そこに何があるのか、幸輔の位置からでもはつきりと見えた。

深々と、ナイフが突き刺さっていた 林の表情が引き攣る。

「ひいやあああああ！」

「大袈裟だよ。刺されたくらいで」

喉が割れんばかりの悲鳴を上げ、膝を付き太腿を押さえる。ナイフを中心に赤い染みが広がる様を、今にも泣き出しそうな顔で見つめる。

二二

「ナイフとか血とか、慣れたもんでしょう？」

空氣よりも涼しげに言ひながら、彼の前に回つた勅使河原は

卷之二

刃先が骨を削りなおも肉を裂く。林の喉が喘音に振るえ、

悲鳴が荒々しく荒れた。傷口からあふれた血でパンツが赤く闇う。

鬼の形相で飛び上がつた林の左腕が勅使河原の胸倉をつかんだ。

「五五七」

九典
卷之三

ひとつかけらの躊躇もなく。

右拳を打ち込んだ。

一九三〇年六月

「黙んなよ」

「あああー、ああー、ああああああああああーーー！」

激痛に惜し気なく叫ぶ林を、やれやれと見下ろし その右足を

持ち上げる。丹念に磨かれた靴底の下には林の頭部。

「 黙れ」

右足が全体重を乗せて落ちる

「 やめろ！」

寸前に、彼の後ろから幸輔が羽交い絞めにした。

「 もういいだろ！ これ以上痛め付けなくたっていいだろ！」

訴えた。必死だった。直感的サイレンが、勅使河原が危険だと報知していた。林とは異なつて危険だと知らせていた。尋常でなく異常だと。

勅使河原の足が下りた。林の頭ではなかつた。林は泣いていた。恥ずかしげもなく泣いていた。

「 つまんないよ、きみ」

興が冷めた口調で勅使河原が言つ。

つまらなくたつて結構だ。

「 ……あんたは、おもしれえのかよ」

鼻で笑つたのが聞こえた。

麻生がタケさんと呼び慕う老人は、途方もなく穏やかで、途轍もなく和やかで、比類もなく朗らかだった。

老人と出会った時、麻生は高校2年生に上がつたばかりだった。3つ年上の恋人がいた。学校はサボりがちだった。夜は当然のように出歩いていた。思春期にあって、達観めいた目線で優越を、すべての物事に斜に構えて、皮肉めいた立ち位置で睥睨を、常に持ち歩いていた。

年上の恋人はブランドであつたし、学校に至つては名ばかりのファッショングでしかなかつた。

真もつて、こまつしゃくれたガキだつたと、麻生は思う。

その日も麻生は堂々と、平日にもかかわらず制服で、マンガ雑誌しか入つていらないカバンを肩から提げ、恋人と遊んでいた。昼に待ち合わせて昼食を済ました後にホテルへ直行。行為、休憩、行為、休憩、行為、行為、行為 平日フリー タイムをがつたり消化した。年上の恋人はステータスであつたし、学校なんてものは履歴書を埋めるための文字でしかなかつた。

真もつて、性欲に貪欲なガキだつたと、麻生は思う。

その後も麻生は堂々と、平日にもかかわらず制服で、捨てた漫画雑誌分の軽くなつたカバンを肩から提げ、恋人と佐岩井公園へと足を伸ばした。時刻は夕刻。時期にやつて来る夜闇と、恋人との第2ラウンドを楽しむつもりだつた。

真もつて、性欲に貪（以下略）。

恋人と談笑しながら公園の奥へと入り込み。

麻生は、老人を見付けた。

もう少し視野を広げて 5、6人の少年に囲まれてうずくまる

老人を見付けた。

少年の1人が、老人の背中を蹴つ飛ばした。手加減なんてない。絶対的な暴力しかない。

恋人の高感度を上げるためにもあつた。

当時の麻生がケンカつ早い性格のためでもあつた。

ただ、3年経つた今でも麻生が憶えている事はそのどれでもなく。老人を蹴り付けた少年が笑いながら吐いた言葉。

「ゴミが。

その後の事を、麻生は良く憶えていない。

気付いた時には、少年たちは全員倒れていた。口を切った少年がいた。右目が腫れた少年もいた。吐瀉物を撒き散らした少年もいた。右足が間接を無視して曲がった少年もいたし、両腕があり得ない方向へ捻じ曲がった少年もいた。

記憶はなくとも、わかりやすい状況だった。

彼らをのした時間などないまま、とりあえず、うすくまつたままの老人に声をかけた。すると老人は、がばつ、と起き上がるや、麻生の横つ面をはたいたのだった。小気味のいい音は、さわさわと揺れる葉擦れに紛れた。

2秒たつぷり、何が起こったのか把握できなかつた。

「……」

我に返る。

「……」

「てめえ！ 助けてもらつてそりやねえだろ！」

「おめえの周り見てみろ！ これが人助けか！」

麻生が噛み付くと老人は倒れた少年たちを指し示し、「力を振り回しただけじゃねえか！」

「ああ！？」

「ガンつけるぐれえしかできねえか！」

「んだと、ジジイ！」

「来い！」

詰め寄つた麻生の腕を取つた老人の手を、すぐに振り払う。

「さわんじやねえよ！」

老人は妙に静かな瞳で、麻生を見つめた。

「手当てしてやるつつってんだ。大人しくついて来い」

「はあ？」 右眉を上げて直後、左脇腹を刺した激痛に顔をしかめた。見れば、銀色に光るバタフライナイフが刃を沈めていた。

「ええ！？」

いつ刺されたのか思い出そうとしたが、元より記憶が飛んでいる。手繰り寄せた記憶の紐はハズレだつた。恐る恐る傷口に手を当ててみる。白いシャツを赤く濡らし肌に貼り付けたナイフは現実で、触れた手にはべつたりと血が付いた。

クウン……

思いがけず、仔犬の声が聞こえた。屈んだ老人は、足元に擦り寄つていた仔犬を抱え上げ、

「傷が悪くなる前に来い。応急処置くれえ、できる」

大事そうに抱えられた仔犬は雑種で、傷だらけだつた。

そのまま老人を無視し、病院に向かう事もできた。いろいろと面

倒な事になるのは目に見えていたが、それが目下妥当な選択だと思つた のだが、麻生は。

「来るのか？ 来ねえのか？」

「……行くよ」

痛みがうずく脇腹を押さえ、ぶつきらぼうに言い放つて老人の後に従つた。

歩道の敷かれたその先 人が入るためのものではない公園の奥は緑豊かで、老人はそこに住んでいるようだつた。並ぶ木々の中でもひと際太い幹を持つ木の根元にダンボールを組み合わせ、ビニールシートを被せた手作りの家を眺め、感嘆する自分に戸惑つた。

ホームレスじやねえか。

胸中に吐き捨てる。老人が身に突けているぼろぼろの衣服から予想できた事ではあつた。そして麻生は今、そのホームレスから応急

処置を受けようとしている。肉に刺さった異物を早く抜き去りたかったのだが、

「絶対に抜くんじゃねえぞ」

老人に4回もクギを刺されたため、触れてもいない。芝生にあぐらを組み、手負いの仔犬を抱えている。時折鼻の奥で鳴くそいつの頭を撫でてやると、温かかった。

「いよつこらせ」

ダンボールホームから現れた老人の手には、ワンカップの酒と木箱があつた。

「ボーズ。寝つ転がれ」

仔犬を脇に置いてやり、言われるままにその場で横たわった。やつぱ帰ろうか そう思つた瞬間、老人は微塵にも迷いなくナイフを引き抜いた。覚悟もしていなかつた激しい痛みに上体が浮く。「抜くなあ抜くつて言えよ！」

しかし麻生の叫びなど気にせず、口に含んだ酒を傷口に吹き付ける。さらに激痛が走り悲鳴を奥歯で噛み潰した。

ぶつ殺ス！ ゼットーぶつ殺ス！

謙虚のかけらもない痛みが脇腹を無遠慮に搔き回す中、ひたすら頭の中で叫び続けた。

「 終わつたぞ」

激痛に殺意でもつて対抗し続けたせいで、何をされたのかなんて憶えていなかつた。しかし麻生の腹はきれいな包帯で巻かれていて、痛みも幾分か引いていた。

「一発殴らせる」

開口一番に言った。

「そんなに痛かつたか？」

仔犬の治療に移つていた老人は、黄ばんだ歯を見せて笑つた。

「……ジイさん」

麻生は、気になつていた事を口にした。

「その犬を守るために、ずっとやられつ放しだつたのか？」

その問いに、老人は答えなかつた。

「俺を殴る前に、まず病院に行け。しつかりした治療を受けるのが優先だ。そしたら、殴りに来い」

麻生としては今すぐにでも殴り倒したかつたのだが、老人の手当を受けながら、痛みを堪える仔犬に見上げられ、気分が削がれた。「ぜつて一殴りに来てやる」

言い置いて、老人に背を向けた。

「おまえがのした連中も一緒にな！」

去り際に背後から言われたが、正直億劫だつた。面倒だから、救急車を呼んでやつた。

病院で診察を受けた麻生は、医師に驚かれる事になる。

「誰に処置してもらつた？」

老人の応急処置は完璧だつたらしい。

「5、6人の少年にボコられてたホームレスのジイさんです。少年の方？　ああ、そつちはぼくがボコりましたよ。あつはつは」とはまさか口にできず、曖昧に応えておいた。

その晩、恋人に電話した。公園からいつの間にか姿を消していた恋人は、すぐに出た。

『浩介……なんか、怖いよ』

そして強制的にフラれた。

「クソ女」

ぶつつり電話を切られた。

未練なんてものは、髪の毛先程も生まれなかつた。今までがそうであつたように、今回も淡白に終わつた　ただそれだけの事だつた。

翌日。麻生は早速、佐岩井公園へと足を伸ばした。約束通り、あの老人に一発お見舞いするために。平日のバスは空いていて、制服姿の麻生は運転手に一瞥されはしたが、氣にもならなかつた。バスに揺られ、後方に流れる窓の景色を眺めながら、ぼんやりと思考した。

「ミミが　たつた一言で吹き飛んだ記憶。過去、幾度となく向かれた言葉だつた。直接的な暴力に添えられていた単語だつた。泣く女もセットだつた。

「ごめんね。ごめんね」

麻生の鼻から吹き出した血を、何度も謝罪しながら女は拭ってくれた。どうして女が謝るのか不思議でしようがなかつた。確實だつたのは、麻生の中で芽生えていた殺意が成長している事のみだつた。

麻生の殺意は　しかし果たされる事はなく。

ゴミが　その言葉と痛みしか教えてくれなかつた男は、街を千鳥足で歩いているところをトラックに轢かれた。泥酔していた彼には、赤信号が青信号に見えたらしい。

窓に、佐岩井公園が映つた。

老人の元に辿り着いた麻生は面食らつた。そこにいたのは老人だけではなく、加えて7人のホームレスたちが集まつていた。誰1人として声を発する事もなく、皆一様にいびつな輪となり座つていた。

「おい、ジジイ」

輪の中心で、昨日の仔犬を膝に乗せた老人が顔を上げ、はつとなつた。

老人は泣いていた。

仔犬は横たわっていた。口から舌をたらし、苦しそうに浅く速い呼吸に身を揺らしながら。

第26話：「トウ！」

「……どうしたんだよ」

「見守つてんだ」

麻生の近くにいた初老の男が、どこか訛りのある口調で言った。

「見届けようとしてんだ」

「待てよ……昨日、ジジイが手当てしてたろ？」

老人は歯を食いしばり、首を横に振った。

「傷口に菌が入ったんだ……こいつはまだ、生まれたばかりだから免疫が……」

かろうじて、嗚咽と区別ができる。震える仔犬にポツリと添える。

「……すまない」

「ごめんね」 麻生の足が勝手に動いた。輪の中に飛び込んだ彼は、ホームレスたちを縫つて老人の前に立つ。

「何する！？」

仔犬を奪い上げた。麻生の暴挙に老人だけでなく、全員が立ち上がりつた。

「返せ」

伸ばされた老人の手に言葉を突き付けてやつた。自分のどの部分から放たれたのかわからない思いも一緒に。

「獣医に診てもらおう」

子犬の体は驚くほど軽かつた。見るからに痛々しい傷　　どうして俺は。

「無理だ……」

「決め付けてんじゃねえよ

「もう、無理……」

「俺は連れて行く」

周囲のホームレスたちを睨み付け声を張つた。

「シケたソラで見守つて！ それだけで満足か！」

麻生は駆け出した。ホームレスたちをすり抜けひた走る。

「……どうして」

公園を抜け出た彼は、勘に任せて道路沿いを駆けた。バスで外を眺めていた時、獣医の看板を見たような気がする。

「……どうしてこんな事してんだよ」

「ミミが。

「ごめんね。

なんか、怖いよ。

「どうして走つてんだよつ

ひたすら地を蹴つた。

蹴つて駆けて走つて

あつた！

視界に飛び込んだ獣医の看板

掲げた建物に飛び込んだ。

「急患なんです！」

声を張つて受付窓口に迫る。驚いて飛び上がつた窓口の女は、露骨に迷惑そうな顔で、

「あー、じゃあ、この用紙に氏名と…」

「ばんつ！ 差し出された用紙に手の平を叩き付けた。女が再び飛び上がる。

「すぐに診てやつてくれよ！ その後だつたら何でも書いてやるから！ この通りだから！」

麻生は、脇目も振らずに頭を下げていた。

「お願ひします！」

人に頭を下げた事なんてなかつた。教師にだつて下げた事なんてないし、親にだつて そもそも、いて、いないうなものだつた。そして、人に何かをお願いする事なんてなかつた。

「……そう言われても」

女の言葉が途切れる。自動ドアの開く音に、慌しい足音が加わつた。何事かと振り向けば

「 お願いします！ 」 いつを救つてやつてください！」

麻生のとなりで老人が頭を下げていた。彼だけではなかつた先程のホームレスたちが勢い良く待合室になだれ込んでいた。

「 お願いします！」

「 お願いします！」

待合室いっぱいに幾重も声が重なる。大の男たちが一斉に頭を下げるその風景を、呆然と、半ば呆れながら麻生は見つめた。その風景に、今、麻生はいる。

「 お願いします！」

再び、麻生は頭を下げた

「 これだけの人たちに付いてもらつて、この「は幸せだね」治療を終えた後、若い男の獣医はそう言つた。
仔犬はトウゴと名付けられた。

「 どうせい！」

気合いの入りまくつた掛け声とともに棒切れが空に飛ぶ。

ワン！ ワンワン！ 棒の軌道を鼻先で追つたトウゴは、すぐさま尻尾を振つて追い駆けた。幸輔が腕時計のストップウォッチをスタートする。

「さて！ 何秒で戻つて来るでしょうー！」

「 知るか」

勢い良く振り返つた彼の問いかけを、麻生は叩き折つた。

「 突つ走れ！ トウゴー！」

跳ねるように駆ける茶色の毛玉に声援を贈る、幸輔を眺めてあくび。背中を倒せば視界がグルッと回つて、紺碧に伸びる枝葉と葉擦れと陽光。となりに座るリヨージが、ボサボサの白髪を搔いた。

「タケさんのお孫さん、おまえの事を憶えてたか」

「2年前に1度しか会つてねえのにな」

「おまえだつて憶えてたんだろ？ それと同じだ」

「俺の場合、腕折られたつてのがあるし」

右手をかざす。2年前、この佐岩井公園で、麻生は折られた。勅使河原が強引にホームレスの老人を連れ去るつとしたところへ飛び込んだ代償だつた。

その時の事を思い出したのか、リヨージが苦笑する。

「まさか食つてかかるなんぞ、考えもしなかつたからな」

「血氣盛んだつたから」

「その顔も、お孫さん？」

やや腫れた麻生の頬と、唇のカサブタを指しているのだろう。

「いや、これは違う人」

「今でも血氣盛んじゃねえか」

言われて麻生も苦笑する。遠くからトーゴの足音が聞こえた。

「ま、コースケのおかげでもあるからな。タケさんがここにいるのも」

「そりや言い過ぎでしょ」

顔だけ持ち上げれば、棒をくわえ猛ダッシュで戻つて来るトーゴが見えた。興奮気味に幸輔が叫ぶ。

「すげえ！ 新記録！ 一分切つた！」

「リヨージさんとか、じいりー帯のみんながいたからタケさんは残つたんだ」

「コースケもその一人だ」

「そうだとうれしいね」

両手を広げ迎え入れた幸輔の顔面にトーゴが突っ込む。くわえた棒が鈍い音を立てた。

「少なくとも、俺はそうだよ。トーゴを助けたあの時から」

「……その話されつと、恥ずかしいんだよね」

「ははは！ 恥ずかしい事なんてひとつだつてねえよー」

涙目で顔を押さえながらもトーゴの頭を撫でる幸輔の姿は微笑ましかつた。

「タケさんつてや」

「おう？」

「どうして三雲興会から抜けて、ここに生活し始めたんだ?」「目的ってか目標ってか、目指すもんが変わっちゃったつってたな」

赤くなつた幸輔の鼻をトウゴーが舐める。申し訳なさそうに耳を垂らしていた。

「目指すもん」

「そう。この生活を選んだのは、目指すもんがやりやすいからだつて、酔つてる時に言つてたな」

「酒、好きだつたもんな」

酒を飲んで機嫌になるとよく、麻生が吐くまで飲ませた。麻生にとつては迷惑な話だったのだが、おかげでアルコールには強くなつた。

トウゴーが幸輔にじやれ付く。しまいには押し倒された。死に瀕していた彼を救つたのは麻生だというのに、何故か幸輔の方によく懷いていた。あれから2年 健康に育つた仔犬は大きくなつて、今は主人の帰りを待つている。

「――

それは突然だつた。弾かれたかの如く、麻生の上体が起き上がる。もしかして……!

思考は不意に仮定を打ち出した。

「トウゴー?」

見開いた麻生の瞳の中、あれだけ嬉々としてじやれ付いていたトウゴーが静かになつた。その身に乗つかられた幸輔の呼びかけにも応じない。

午後1時9分 その時に何が起つたのか、鋭敏に感じ取つたのはトウゴーだけだつた。

「どうしたんだ?」

リョージが疑問符を投げる。

トウゴーが空を仰いだ。夏の蒼をこれでもかと敷き詰めた空はどこまでも抜けていて。

長い長い彼の遠吠えを寛大に吸い込んだ。

黒くつぶらなトウゴの瞳は、心なしか濡れているよう見えた。きっと、それは事実だったのだろうと思ふ。

午後1時9分。

タケさんが、逝った時間だつた。

第27話：「ドアを挟んだコッコッチャッ」

『たつた今、ジイさんが死んだよ』

その電話をくれた人物は、律儀にも大東病院の入り口で葉巻片手に待っていた。

「やあ」

「こーちゃん！」

呑気に葉巻をくゆらせる勅使河原の頬を、幸輔の制止も聞かずに殴り付けた。

「いきなり殴るなんてひどいんじゃない？」

殴り返された勅使河原の拳は重かつたのだが、痛みはなかつた。体中の血液が煮えている。

「ストップ！」

睨み合つた2人の間に幸輔が滑り込む。奥歯を軋ませ麻生が睨み付ける勅使河原の口角が、左だけ上がつた。

「ジイさんに最期の挨拶をしに来たんだろ？」

「ついでにその面も殴りに来た」

「それじゃ、あとはジイさんと対面するだけつて事だ」

「まだ殴り足んねえ」

「ほんと、キミって男は」

ニタリと、勅使河原の唇が左右に伸びた。

「おもしろい男だよ」

その身が180度回転する。自動ドアをぐぐりながら、
「ジイさんの所に連れてつてあげるよ」

そう言つた無防備な背中に殴りかかるのは後にして、麻生と幸輔は大人しく従う事にした。

地下2階。陽の光に代わつて蛍光灯が照らし出す無機質な廊下には、露出した肌にひんやりと触れる空気が飽和していた。3つの足

音だけが鳴り、一枚のドアを前にして立ち止まる。靈安室と書かれたプレートを一瞥し、麻生は部屋に入った。

蛍光灯が2本。簡素なベッドが1台。横たわる老人が一人。佇む巨体が1つ。

思いの外狭く区切られた部屋で、細木が手を合わせていた。

「何だ、来てたんだ」

勅使河原の放った言葉は何の感慨も意味も携えたものではなく、細木がいてもいなくても大した差はないようだつた。ドア脇の壁に寄りかかった彼は、麻生と幸輔に目で促した。

久しぶりに対面する老人は瘦せこけていた。胸元で組み合わせられた手は骨張つていた。そつと麻生の手を乗せた。信じられないくらい当たり前に、老人の手は冷たかつた。

「体中ガタついてたんだってさ」

勅使河原の声を聞きながら、老人の顔まで視線を這わせる。筋張つた首筋、乾いた唇、血の氣のない頬、綿を詰められた鼻、閉じたまぶた、数本だけ立つ薄い眉、富士額。

「あんな生活してたんだ、ボロボロになるのも当然」

穏やかに眠る老人の顔が霞む。浅く吸い込んだ空気は、吐き出す時にはかされていた。

「……タケさん。久しぶり」

やつと、会えた。

「病院のメシ、まずかつたのか？　ずいぶん痩せたな」

無言のまま、細木が退室する。勅使河原は声をかける事すらしない。

「シケたメシ出すんだな、この病院。金あるんだから、メシぐれえまともなもん出せよな」

老人の手を優しく叩く。

「こんな手じや、俺を殴つたら砕けちまうよ。タケさん。トウゴが泣いてたよ。俺、犬が泣くのなんて初めて見たんだけどさ、本当に哀しそうに、泣くんだよ。ちゃんとあの頭撫でてやつたのか？　あ

んたがガキどもから守つた犬なんだ、最後まで面倒見てやれよ。そ
うだ、まだ言つてなかつたけど、俺が刺された時に応急処置してく

れただろ？ あれ、医者が驚いてたよ。完璧な処置だつたつてさ。

「んたすけよタケさん」

「アーティスト」

「俺…………まだ…………まだあんたを殴つてねえだろがよーーー。」

張った声が狹すぎる室内を飛び交った。

幸輔が振り向いた時にはもう、勅使河原の背中はドアの向こうに
あつた。麻生の嗚咽を残し、ドアの隙間が細くなる。

ばたん。

「こんな所で何してんの？」

後ろ手にドアを閉めた勅使河原の前に、白衣を着た女が立つていた。メガネをかけた顔は眠そうではあるが、どこか理知的で、無機質な廊下に違和感なく溶け込んだ。白衣のポケットに手を入れたまま、その唇を最小限に動かす。

「お別れの挨拶をしに来ただけよ」

「ジイさんの主治医でもないのに?」

「病院の患者だから、じゃあ理由として不十分かしら？」

邪魔する事になるし

鼻頭と眉間に縦ジワを刻み込む。

「湿った空気に気が滅入るだけだ」

۱۷۴

女は無関心な顔で受け止めた。

「じゃあ、しねりへいりで待つ事にするわ」

「それが賢明だ」

彼女の肩をすり抜ける勅使河原は、まだ昼食を取つていなかつた事を思い出した。さて、何を食べようか

「コースケ」

足が止まる。

「これつて何かの縁かしらね。同じ場所に同じような名前の男たちが集まるなんて」

肩越しに振り向いた。女の背中は微動だにしない。

「偶然にしては出来過ぎに思えるけど、それでもやっぱり偶然なのはよ。こんな事言つても私自身信じられないけど 偶然じゃなければきっと、あの老人が呼んだんでしょうね」

勅使河原の表情に陰が浮き彫られる。頭の片隅にすら、空腹感は残らなかつた。

「…………」

「あと1人、ね」

あと1人 その意味は皆田わからなかつたが、

「おまえ何者だ？」

我知らず早口で質す。

女はゆっくり ゆっくりと振り返つた。

「しがない女の医者よ」

口元が意味深に微笑んだように見えた。

「しがない女の医者が」

勅使河原の語尾まで聞く事なく、彼女の手がドアノブにかかる。

「俺の名前知ってるわけないだろ」

彼の言葉をすり抜け、女は靈安室に吸い込まれた。

ばたん。

ドアが閉まる音に勅使河原を連想したが、振り向いた幸輔をじつと見つめていたのは忍足だつた。

「先生？ あれ……」

「どうしてここに？」尋ねようとしたところで彼女の視線が足元にずれた。あぐらを搔いて座る麻生は先程よりずっと落ち着いたもの、ずっと頭を垂れたまま何も言わない。

「もうお別れは済んだ？」

忍足の声音が凜と揺れた。こつも慈愛を感じさせる声音を紡げるなんて、初めて知った。

「……どうしてあんたがいんだ？」

天井を仰いだ麻生が鼻をすすつて、背を向けたまま尋ねた。

「さつきも同じ事聞かれたけど

」

きつと勅使河原だろう 幸輔が予想できる範囲では彼しかいな

い。

あ。あの人もいるか。

入室した時にいた巨躯が脳裏をかすめた。

「 その人の主治医ってわけじゃなくとも、逝った人に祈る事が
らいでできるでしょ」

「じゃあ、この男がどんな人間かつてのは知らねえよな
死に顔を見る限り、穏やかに逝けたつてのはわかるわ」

「そうとは限らねえだろ」

「もちろん」

「穏やかにだなんて軽々しく言うんじゃないよ」

「そっちこそ」

「あ？」

「少なくとも、私はあんたより人の死に顔を見てる。病院つて、思つての以上に人の死が多い場所なのよ。病で逝く人だけじゃない、ここは緊急病棟だもの、突然の事故に見舞われて逝く人だつている。そのすべての死に顔を、私は見てるの」

いつたん言葉を区切つた。麻生と幸輔が黙つていると、再び語を連ねる。

「 そうしてるうちに、その人の最期が見えるようになったのよ。た

だ、実際に見たり聞いたりしたものじゃないから本当のところはわからない。あなたの言う通り、その老人が穏やかに逝けたなんて確証はないわ。私は死に顔から読んだだけ。そしてあなたは、穏やかにとは限らないって決め付けてるだけ。それを断言できるのは、あんたじやない

「……なんか

やや間を置いて、麻生の首が忍足に向いた。

「人の死に対して冷静だな」

幸輔の目に映る彼はどこか卑屈さがにじみ出でていた。彼の敬愛してやまない老人の死がそうさせているのだとわかつてはいるのだが。

「怖いよ。人の死は」

忍足の右足が前に出た。

「めつた刺しにされた彼の手術なんて、あまりにリアルに死を想像できて手が震えたもの」

「あんなに自信満々だったじゃねえか」

「そうしないとダメなのよ」

壁に沿つて歩く忍足の瞳が、麻生から老人に移動する。ベッドの頭でぴたりと足を止めた。

「あれは自己暗示。人を助けたくて医者になつたのに、手術する直前に怖いだなんて言つてたら笑われるでしょ？ けど、死が怖いつていう気持ちは絶対に忘れてはいけない。私が手術しても死んでしまうんじゃないかな」 そう思つても手が震えなくなつた時は、医者を辞めるつもり。死に対して怖いっていう思いと、それでも助けるっていう想いが極限まで引っ張り合つて、拮抗してる状態が私にとつてベストだから

「すっげー精神状態だな」

反発し合う恐怖心と救護心に、両端から体を引っ張られる 幸輔には想像がつかない。限界まで引っ張られ、張り詰めて、プツンと切れた時なんて その反動を想像もしたくない。

「そんなんによく、これまでつな

「神経図太いのよ」

麻生の感嘆に彼女が振るつた言葉もまた自己暗示なのかと 幸輔は頭を振つて、思考を追い出した。それか否かを追求したところで意味なんてものは成さないのだから。

忍足の両手が、老人の頬を挟み込むように触れた。

「おやすみなさい」

初めて見た彼女の微笑は慈悲にあふれていて、美しかった。こんなにも優しい笑顔をどこに隠し持つていたのか、どうしていつもは出さないのか、不思議だった。

「 2人とも、見送るんでしょう？」

見上げた時には跡形もなく引っ込んでいたけれど。

「見送る？」

麻生の片眉が跳ねた様子を呆れて見やり、忍足の顔が幸輔に向く。「この老人が斎場に向かうのを、見送るんでしょう？」

「え……もう？」

穴を開けてやろうかといふほどの幸輔の視線を、老人を見る事によつて忍足は受け流した。

「せめて葬式くらい開けばとも思うんだけど、斎場に直行するつていつ話らしいわ」

麻生の目が見開く。

「どうして…」

「私に詰めたところでどうにもなんないつて事くらいわかるでしょう…」

田の前に正論をぶら下げられては、麻生も口をつぐむ他ない。

「 ……じゃあ、せめて」

幸輔が提案する。

「俺らも車に乗せてよ。一緒に、斎場に行く」

忍足のまぶたが閉じ、開いて ゆっくり瞬いた彼女の言葉は重く沈んでいた。

「そんな権限、私にはない」

第28話：「ガチ」

これから老人を見送るというのに、麻生と幸輔はまるで見えないヒモに引っ張られているかのように階段を昇っていた。ヒモの先はもちろん、2人の先を行く忍足の背中だった。病棟はいつもと何ら変化なく、患者と看護士で賑わっている。老人が死んだ事が、まるで悪趣味な虚偽だったかの錯覚。

ぱつたり、梨香と出くわした。

「アソーケン！ 幸輔！」

ストーカーの件が落ち着き、無事に退院を果たした彼女は、今度は井延の見舞いとして大東病院に通っている。

「あ、先生」

「忘れてたの？ 見えなかつたの？」

「いや、そんな事……あれ？ 痛い、痛いです先生」

忍足のゴブランクロードが梨香のこめかみをきれいに捕らえていた。麻生と幸輔が全力を注いで引き離した後、顔をしかめてこめかみをさすりながら、梨香は物珍しそうに聞いて来る。

「どこ行くんですか？」

「屋上に、ちょっとね」

麻生に羽交い絞めにされながらも淡々と答える忍足。

『屋上？』

麻生と幸輔は、付いて来なさい、としか言われていなかつた。梨香と別れ、また階段を昇る。

まだ階段を昇る。

「なあ先生」

「何？」

「どうしてエレベーター使わねえの？」

麻生の素朴な質問。

「屋上まで、エレベーターじゃ行けないのよ
途中までエレベーターを使えばいいじゃん」

「…………」

「何も、ひたすら階段昇る事ないんじゃねえの？」

「あの口、おもしろい口よね」

ナチュラルに流したつ。

「つい、からかいたくなるわ」

「いや、さっきのコブラクローは本気でした。確実に潰しにかかりました」

幸輔もコブラクローを食らう羽目になつた。気持ち、強めだつた。麻生が必死に止めなければ、頭を潰されかねなかつた。

「ほら、私つて人付き合いが下手だから」

眩いた忍足を2人そろつて無視して

たどり着いた屋上には、細木と勅使河原がいた。背の高いフレンスに寄りかかるつて、言葉を交わすでもなく勅使河原は空を仰ぎ、細木はどこか虚空を見つめる。天井の中心で干されたシーツが、幾重も風にはためく様は波を彷彿とさせた。

勅使河原が3人に気付いた。

「最期の挨拶は終わつた？」

「この鼻にかかるつた声が好きになる事など一生来ないと、麻生ははつきり断言できる。

「あなたも見送りに来たの？」

彼らに歩み寄つた忍足が、勅使河原の右手に葉巻を見付けた。

「ここ、禁煙よ」

「ああ、ゴメンナサイ」

形式のみの詫び。見せ付けるように紫煙をくゆらせ、視線を空に戻す。

「あいつ、うそみてえに瘦せこけてたよな」

眩いた瞳には愛しさも懐古もなく、まるで一仕事終えた後の一服といった口調で。

「やーっと、いなくなつた」

「 勅使河原あああ！」

麻生が殴りかかった。止めようとした幸輔の手はもう少しのところで空を搔き、麻生の目の前に巨体が立ちはだかつた。

「邪魔すんなあ！」

「 ストップ」

右足に何かが引っかかる。前進する身を支えるものを失った麻生は無様に細木の足元まで転がつた。

「 つてえじやねえか！」

すぐさま飛び起き振り返れば、足を引っ込んだ忍足が麻生を睥睨している。

「 麻生ちゃん」

思いがけず柔軟な声を発した勅使河原を睨み付けた。彼はまだ、空を見上げていた。何を熱心に見入っているのか　　彼に倣つて幸輔も見上げてみる。遠くに入道雲が低空に浮かび、煌々と照る太陽の脇を綿あめの形をした雲がよぎる。夏の空。蒼は澄み、広大

視界を戻すと、勅使河原は麻生を見つめていた。

「 もう、隠すのはやめよ。井延と会つたんだろ？」

「 はあ？」

「 井延の恋人、もう退院したんだろ？　さつき見かけたよ。まだここにいるのはどうしてだ？　　ああ、俺が隠すのもアレだな。彼女についてつたんだ。そしたら、まあ、あんな平和そうに寝ちゃつてさ」

勅使河原はゆっくりと、麻生に近付いた。無言で睨み返す麻生との距離を10センチほどに縮め、

「 近えよ」

麻生の抗議をひねり潰す。

「 井延が預かつたもの、俺によこせ。もし麻生ちゃんが井延と接触

してるんなら、あいつが持つたまんまだなんて考えにくいんだよ

「じゃあ、教える」

麻生の鼻をぐっと寄せる。勅使河原は身じろぎもしない。

「コインロッカーには何が入ってんだ?」

「やっぱ持つてたんだ」

「教えてもうまで渡さねえ」

「頑固なんだね」

「頑固なんだよ」

「じつ! 勅使河原の頭突きが麻生の額を弾いた。仰け反つた麻生の背筋と腹筋が膨らむ。

「じつ! 反った身を返す反動を頭突きに乗せる。揺らいだ勅使河原の頬を麻生の拳がえぐつた。回る体 左足を軸にした回し蹴りに変わる。革靴の踵が麻生のこめかみを捉え、

「力づくって、好きじゃないんだよ」

「ああ、俺もだ」

麻生が軸足を払う。バランスを崩し肩から落ちたところをとつさに受身を取つた、勅使河原の頭に容赦なく打ち込む蹴り 腹筋と屈伸で跳ね起き、寸でのところで空振り。

「せつかくの白ステッジが汚れちゃうじゃないか

「そんなもん着てつから気になるんだ」

麻生が間合いを詰める 勅使河原の肘打ちを紙一重でかわし、ガラ空きになつた胸元から突き上げた拳がその顎を碎く。彼の手が麻生の髪をつかんだ。

「つかまえた」

かわした肘打ちが顔面に入つた。鈍痛 鼻の奥でキンと痛覚が弾け、たまらずうめいた。噴いた鼻血がステッジを汚す。勅使河原が顔をしかめ、生じた隙を見逃さなかつた。麻生の拳がみぞおちにめり込み、体をくの字に折つた彼の手が緩んで、

「沈め!」

両手で固定した顎に膝を打ち込む。

「つ！」

骨と骨がぶつかり合うう鈍い音が空に抜けた。

白目を剥いた勅使河原の膝が地面に落ち、脱力した身がふらふらと左右に揺れた後 前のめりに伏す。乱れた呼吸に肩を上下させて彼の脇に座り込んだ麻生は、しびれた鼻に触れ、

「つ！」

しかめつ面。俯けば、鼻先から地面に血が滴る。赤い点のとなりに吐いた唾もまた、赤かつた。口の中はきっと鉄臭いのだろうが、鼻がこの通りだ、嗅覚よりも痛覚の方が断然勝っている。

白目で動かない勅使河原を一瞥、麻生は俯いたままで首をねじった。

忍足は腕を組んで傍観に徹していた。

細木は自分よりも2回りほど小さい体を抱え込んでいた。幸輔は自分よりも2回りほど大きい体に埋もれていた。

第29話：「咆哮が裂く」

「一ちゃん！」

いくら必死に暴れ、もがき、足搔いたところで細木の束縛は強固だった。

「……そんな泣きそうな顔すんなよ」

冗談でなく鼻が痛かった。もしかしたら折れているのかもしれない。それでも麻生は、幸輔に笑顔を作った。次いで、忍足と細木を見上げる。

「どうして止めなかつた？なんて聞かないでね。どうせ止まらなかつただろうし」

予想通り、忍足は冷ややかな調子で、

「今のは、社長からけしかけたものですから」
予想外に、細木は突き放した意見だった。

「 麻生さん」

仏頂面かつ野太い声で名を呼ばれ、麻生は警戒した。今の状態でも、そこら辺のヤツなら相手は出来るだろ。テンションもまだ高い位置にあるし、鼻血を垂らしながらでも体を動かす事は出来る。しかし、相手が細木となると話は別だった。

「カギを、私にください」

やっぱ来た。

「麻生さんが持つていても意味のないものなんです」

「……そうかしら」

忍足がそう呟くのが聞こえた。彼女がどのよつた意図でそう呟いたのかまではわからないが。

「……何なんだよ、あのカギは」

「会長の意志なんです」

「意志？」

細木が口を開きかけた時 階下がにわかに騒々しくなった。それは繁華街の喧騒にも似た、しかし決して樂観的なものではなく、むしろ悲嘆色が濃厚な。悲鳴や慟哭が風の塊となつて、屋上にまであふれていた。

「……何だ？」

怪訝を覚えたのは麻生だけではなかつた。何事かと周囲を見回す幸輔も、黙して様子を探る細木も。

忍足だけが、知つていた。

「始まつたわ」

「何が」

麻生の問いにしかし答えず、静かにフェンスに歩み寄つた忍足は網越しに見下ろした。

「何が始まつたって……」

腰を上げた麻生が鼻を押さえながらフェンスに近付き 絶句した。

「何だこれ！」

細木から解放された幸輔がフェンスに額を押し付ける。同じようにとなりで見下ろす細木が、唾を飲み込む音が聞こえた。

4人が見下ろす大東病院裏口は、人の頭で埋め尽くされていた。何十人というレベルを越え、とうに百を越えているであろう人の数は裏口に收まり切るはずもなく、道路上にまであふれ返つていた。目を凝らせば、ホームレスが大半 見るからにヤクザと判別できる者や、コツク姿もある。子供を抱える女の姿や、ひと際大声で嘆く青年も見受けられた。百何十人という老若男女が泣き叫ぶ渦の中 心に、白いバンが埋まつていた。

「もしもし？」

いつの間にか携帯電話を耳に当てていた忍足。

『せつ先生！ 大変です！ 人が！ 人が！ 前に進めません！』

電話相手はどうやら、あの中心にいるらしい。金切り声に近い男声と周囲の喧々囂々が麻生の元まで聞こえる。ただただ啞然と、麻

生は足下の信じられない光景に目を奪われつ放しだったが。

「彼ら、何か言つてる？」

『会わせろつて！ 誰つ！ タケさんつて誰！ 助けてええ！』

かわいそうに、すっかりパニクつている様子。

『会わせてあげて。あなたの後ろで眠つてゐる人がタケさんよ』

『何なんですかこの人たちは！ あ！ ダメだつて！ ワイパー引

つ張つちゃダメだつて！』

『早く会わせてあげないと、青柳くんに襲いかかり兼ねないわよ』

『ええええええええええええ！？』

『いいから、早く会わせてあげなさい』

『誰たちなんですかこの人たちは！』

『家族よ。その人たち、みんな』

淡々と、忍足は一方的に通話を切つた。

『……どーゆこと？』

点になつた幸輔の目を見るなり忍足の鼻が鳴る。

『……俺の事が嫌いですか……？』

『あの人は、これまでの人生を、實に慌しく駆けて來たんです』
と、開口したのは細木だつた。直立不動だつたその手が網にかかる。

「任侠の世界に生まれ、ホームレスとして天寿を全うするまでに教師、三雲興会社長、会長として、様々な人と接して来て。一度でも関係した人であれば、たとえ道端で肩がぶつかつただけの人でさえも、その人のために尽力し、奔走した人なんです」

あれだけ寡黙だったのにこんなにも滑らかに話す細木にも驚いたが、

「教師！？」

そちらの驚愕に麻生の目が剥いた。

「すげー、タケさん」

幸輔が見やるフェンス越しで、今まさに、バンから棺桶が下ろされる。騒々しかつた群衆が水を打つたように静まり返る。戸惑いを

隠せざにいる職員がおどおどと落ち着きなく、だが無事に箱を下ろし終えた。老人の顔の部分にある窓が開かれる

棺桶を中心に、黙祷の輪が広がった。

皆一様に手を合わせるまでに1分とかからなかつた。

彼らに倣つて、麻生も手を合わせる。

まぶたの裏でその老人は、黄ばんだ歯を見せ、笑つた。

「ありがとう！ タケさん！」

誰かの張り上げた声が、静寂を感謝の波に変える。

「ありがとう！」

「ありがとう！」

「ありがとうおおお！」

皆が皆、口々に諸手を挙げて空に声を張る。それぞれの謝恩を、想いを乗せて手の平を突き上げる。これだけの人数が1箇所に集つて、それそれでも同一の感謝を、逝つてしまつたたつた1人の老人に贈る。

「これだけ盛大に見送られれば、葬式なんていらないわね」

忍足の言葉は幸輔の目頭を熱くさせた。

この光景を一生忘れまいと、幸輔は心に誓つた。それはあまりにも神秘的で、奇跡で、それでも1人1人の想いが形となつた結果で、だから現実で。

だからこそ、つんざいた銃声を認識するのが遅れてしまった。

「てつしーあ……」

麻生が背後を振り返る。

そのTシャツの脇腹に穿たれた穴が嘘みみたいに、みるみる血で染まり、

「……空氣読めよお」

脇腹を押さえたまま彼が揺れた　　どつ　　横に倒れ込んだ。

「Jーちゃんつ！？」

第30話：「快晴レクイエム」

「なんか、下がうるやくなつてんなあ。何の騒ぎ?」

銃を下ろした勅使河原が首をひねる。ぽきぽきと骨が鳴つた。

「勅使河原さんのお葬儀よ」

口調は呑氣でも忍足の行動は早く、伏した麻生に駆け寄るやーティヤツを裂きにかかる。

「……先生」

「何?」

「積極的だね」

「銃痕広げてやるうか」

「ごめんなさい」

ジョークだつたつもりが紛れもなく本気の田だつた。

「先生、何してんですか?」

「見てわかるでしょ。応急処置。すぐに手術する」

勅使河原を横目に、裂いて脱がせたシャツをわらじでつに裂く。

「そこのキミ。ちょっと手伝つて」

呼んだ幸輔にTシャツの布切れを渡し、忍足は携帯電話を取り出した。

「これで傷口押さえてあげて」

「え……」

「怯んでる場合じゃない。少しでも流血を止めないといけないの。死んでもいいの?」

慌てた。左右の手にした布を当てるために傷口を確かめ、それでも一瞬怯んだ。ちょうどよく付いた筋肉を露わにする麻生の上半身に穿つた銃痕は見るも痛々しく、流れる血と、ぬらぬらと光る肉と、血に濡れた骨が覗く。

「早く」

急かされて泣きそうになりながら、傷口を隠すように布を押し当

てた。

「ついたつ！」

麻生の眉間がシワを刻む。

「あ、ごめつ」

「強く押さえなさい」

言われるままに幸輔は引っ込めかけた布を再度押し当てた。腹部と背中を、麻生の体を挟むようにして。なおもうめき声が聞こえたが今度は力を弱めなかつた。

「もしもし？ 早く出なさいよ、何してたの あつそ。急患よ。すぐにオペの準備。左脇腹を負傷してる。出血が多いから輸血の用意もして」

布は瞬く間に真っ赤に染まり上がつた。生暖かく湿つた感触に幸輔の喉頭が上下する。

「 なあ、先生」

気付けば、すぐ頭上から声が降つた。

「この人の血液型は？」

頬と肩で携帯電話を挟み脈を確認しながら、忍足の目が幸輔を向く。

「……A型」

「血液型はA型。よろしくね あと、屋上に担架持つて来て。説明なんて後にするわ。いいから早く」

「無視すんなよ、先生」

携帯電話を切り、そこで初めて忍足の瞳が上を向いた。

「助けなくていいんだよ、そいつなんて」

「どうして」

「もつと早く気付けば良かつた。他人のために熱くなる性格、祖父母さんがこいつを大切にしていた事」

どこか虚ろな勅使河原の瞳は、苦痛に耐える麻生を見下ろしていた。

「そいつだったんだ」

「 そいつが、祖父さんの隠し子だったんだ」

隠し子！？

幸輔の首が跳ね上がった。同時に、勅使河原の足が麻生の腹に、傷を押さえる幸輔の右手ごと食い込んだ。

「あつ！」

「ぐあ！」

2人が激痛を叫ぶ。

勢い良く立ち上がるや忍足の手が胸倉をつかみ、勅使河原の顔を引き寄せた。

「何してくれてんだてめえ」

凄みの利く睨みとセツトで低く押し殺した声を放つ。

「これは俺と麻生ちゃんの問題なんだよ先生。だから邪魔すんなよ」「だったら傷を負ってる以上、私と麻生の問題だ。てめえこそ邪魔すんな」

「ずいぶんドスの効く声出すね」

「引っ込んでる」

「つぜえ」

「つーつー？」

勅使河原の手の中で下を向いていた銃口は、忍足の左足を射抜いた。屈む幸輔の眼間で、スリッパを履く足の甲が血を噴いた。忍足の顔が歪み、胸倉をつかんでいた手が緩む。

「つざけやがれ！」

痛覚に歯を食いしばり憤怒の形相で殴りかかったその胸元に銃口を突き付ける。

「どけよ」

ぴたりと静止した彼女をおかしそうに見つめる。

この男を、幸輔は心の底から憎らしく思えた。

負傷し氣息奄々の麻生、泣きながら彼の傷を押さえ続ける幸輔、銃

を田の前に動きを封じられた忍足、そして

「 もうやめましょ、社長」

勅使河原へ向けて伸ばした右手に銃を握り込んだ、細木。勅使河原の首が、彼の方へ倒れた。

「そんなもん向けてどうするつもりだよ、細木イ」

細木の音吐は太いがために、はつきりと聞こえた。

「社長は人を傷付けすぎます」

「何だそれ」

「あなたが殺した先代の社長から、どれほど血を見れば気が済むのですか」

「俺にそんなもん向けていいのかつて聞いてんだ」

「会長は、血を見るために三雲を発展させたわけじゃないんですよ」

「おまえも無視かよ、おい」

「下を見てください」

「とんだ茶番だ」

「ですが、彼らが会長を慕う気持ちは本物です」

「根性が腐れてる」

「会長は、この街が好きで 好きで好きで好きで好きで」

「気でも触れたか？」

「大好きな葉崎という街を、守るために三雲を存続させたかった」

「くだらねえな」

「三雲は暴力を振るうためのものじゃない」

「ヤクザが泣くぜ」

「社長はヤクザを履き違えているんです」

「何を履き違えてるつて？ あ？ 僕が何を履き違えてるつて？」

「任侠は人を傷付けるためにあるんじゃない。家族を守るものです」

「だから何だ」

「葉崎全体が、家族なんですよ」

「はっはっはっはっ！」

勅使河原の哄笑が弾けた。

「バカじやねえか！？ 葉崎全体が家族ときた！ ヒヨツた事言つのも大概にしろよ！」

「家族を思つたからこそ、今こつして、多くの人々が集まつてゐるんです」

「ホームレスのたわ言だらうが！」

声を荒げた彼に細木は躊躇いなく、決定的な言を投げ付ける。

「あなたは間違つてる」

一切の表情が欠片なく落ちた勅使河原の瞳が見据える先で、細木は繰り返した。

「あなたは、間違つてる」

強めの風が吹いた。

勅使河原の裾を揺らし、忍足の前髪を払い、蒼白な麻生の頬を撫で、布いっぱいに吸い込んだ血を冷やした。ひと際大きくなめたシーツが竿から外れ空を飛んだ。

「……殺させるなよ、細木」

零細な声は無感情。

「俺に、おまえを殺させるな」

仏頂面の唇は動かない。

シーツが、対峙する2人の間に割り込んだ。細木は、陽光に輝く潔癖な白に目を細めた。

お互ひが死角になつた刹那の後。

通り過ぎたシーツの向こうで。

勅使河原の銃口は。

細木を睨んでいた。

名を叫ぶ。

「 細木イイイイイイイイイイイイイイイ！」

フェンスさえも越えて宙に舞つたシーツは、風に煽られひっくり返つた。

銃声が2発。

乗っていた風を失い、重力に引っ張られるままに群衆にはためく。瞳を赤く泣き腫らした人々に見守られる中、シーツは躍るように地面へと

棺桶を、やわらかく包み込んだ。

第31話：「大東病院308」

大東病院308号室は6台のベッドが並ぶ相部屋だった。ドア脇によるベッドが1台空いているのは、そこにいた少年がつい昨日、無事に退院したばかりだからだ。彼と仲の良かつた向かいのベッドの少年は、新たに話す相手を見付けようともせずに、白いボディのゲーム機とばかり睨めっこしている。

窓際のベッドでは、両足にギブスをはめた老人のとなりで、老婆がナシを切っていた。開け放たれた窓から吹き込む涼しげな微風に、甘い匂いが乗つた。その向かいのベッドはシーツが乱れたまま放置されている。デザイナーだと言っていた無精ヒゲの男は、タバコでも吸いに出たのだろう。

そして、部屋の真ん中で向かい合つベッドでは、2人の男が睨み合っていた。

少年がくしゃみした。

「……見てんじゃねえよ」

「見てねえよ」

「ガンつけてんじゃねえか」

「気に入らねえなら出てけ」

「そっちが出てけよ」

「生憎、血がないもんで療養しろって言われてる身なんだよ」

「ああそうかい。こちとらメツタ刺しにされたもんですよ。無茶すんなって言われてんだ」

言葉を返す代わりに手近にあつた雑誌を投げ付け

「ガキか」

宙で叩き落された雑誌が脇腹を強打。

「はうっ！」

麻生はたまらず身をよじつた。呆れ顔で彼を見下ろした尋ねは向

かいのベッドに笑顔を向けて、

「初めまして。秋野です」

「ああ」

麻生の時とは打つて変わった明るい声で、井延が会釈する。
「梨香、すぐに戻つて来るよ。話は聞いてる。俺がいない間、梨香
が世話をなつたみたいで」

「とんでもない」

謙虚に手を振る尋絵に一言。

「何もしてねーし」

「黙れ」

指で腹を弾かれた。

「はうつ！」

「ケガ人はケガ人らしく大人しく寝てやがれ」

「……ひやい」

麻生、涙目。

「尋絵！」

「おつと」

尋絵の背中にぶつかつて来たのは梨香。思わずよろめいた。

「アソーくんの見舞いに来たの？」

言いながら麻生に手を振つて来た彼女へ、麻生もまた振り返す。

「……死ね」

井延が殺意を呴いた。

「そ、この男の見舞い」

「これ」

麻生の催促で差し出されたそれは、

「……これだけ？」

リンゴ一個。包装ナシ。直接手づかみ。

「かじれるじやん」

シャクツ！ と皮」と。

「……えー」

「文句？」

「滅相も『いざな』ません」

尋絵の手から、ありがたくリングを戴いた。赤い球体を、どこか脇に落ちない思いを抱えて見つめる。尋絵が入院した暁には、抱え切れないほどのバラを贈つてやろうと決意した。

「梨香」

井延が不満顔で声をかけた。

「ん？」

「ちょっと外に出ようや。そいつの顔見てたら胸クソ悪くなつた」吐き捨てた井延の言葉を赤字覚悟で即お買い上げ。

「よーし、そんなセリフ一度と口に出せねえよつじしてやる」尋絵の指が弾く。

「はつひー…」

赤字のままに終わつた。

「秋野さん」

ベッド脇の靴に足を突っかけた井延が尋絵に笑いかける。

「これからも、梨香をよろしく頼みます」

「もちろんです」

笑顔で首肯した彼女に笑みを深くし、

「じゃ」「じゅつくり」

「また後でね」

退室した2人の背中を、尋絵は内心戸惑いながら、麻生は中指を立てて、見送つた。

「ガキか」

「あだだだだだだだだだ！」

指を逆方向に曲げられ、麻生はたまらずタップした。

第32話：「大東病院、それぞれ」

中庭を目的もなく歩く。夏の太陽は肌に厳しくとも、風は優しい。
井延と並んで歩く今この瞬間が、梨香にはとても幸せに思えた。

「心配かけて、ごめんな」

井延が呟いた。

「これからは、傍にいて守るから」

梨香が見上げた彼の目は、照れくさそうに、あせつての方向を向いていた。

あの時もそうだった。

梨香が、襲われた時。

レイプされかけた時。

果敢にも犯人に挑み、殴り殴られ蹴り蹴られ、相手をのした後恐怖につづくまり打ち震える梨香へ手を差し伸べた時。
傷だらけになりながらも差し伸べた時。

「ねえ、耕佑」

井延の手を握って、梨香は足を止めた。手を引っ張られ、立ち止まつた井延が振り返ったその顔を、両手で素早く固定する。

「そういう事は、目を見て言おうよ」

井延は少しだけうろたえてから、覗き込む梨香の瞳を見つめて言った。

「俺が梨香を守る」

俺が傍にいて、おまえを守つてやる。

それは、2人の始まりの言葉。

彼の言葉を一言一句残さず吸い込むように、深く深く、梨香は深呼吸した。膨らむ肺が井延でいっぱいになる。吸い込んだ語句たちを零さぬよう慎重に息を吐いて。

「よくできました」

満面に笑んだ。

手で弄び、ためつ眇めつ眺めた後、麻生はリング口に噛り付いた。シャクツ 甘酸っぱい汁が舌を濡らし、香りが鼻腔に昇る。

存外、美味。

尋絵はと言えば、イスに座つて雑誌に読みふけつてゐる。何をするでもなく、ただそこにいる。

ふと視線に気付いた。窓際のベッドの老夫婦が麻生の様子を窺つてゐる。老婆が差し出したナシを、老人が頬張る ふつ 勝ち誇られた。

ハラ立つー。

「ねえ、アソー」

麻生の前に雑誌を置いて、尋絵があぐびを噛み殺した。

「退院したら、ここ行かない？」

「どー?」

「こー」

尋絵の指が示したページでは、写真やら地図やらメントやらがカラフルに色めき立つていて、見ているだけで目がチカチカする。「イベント会場つて言うのかな。最近できたらしいんだけど、ちょっと興味があるんだよね」

地図を見て、それが葉崎市にあるのだと知った。市内とはいえ、内陸地のこと海岸のそこは両端。それでも、車を使えばすぐだらう。

「クラブとギャラリーが一緒くたになつてんの。おもしろいづじやない?」

「んー」

「行きたくないなら別にいいんだけど」

あつさり引っ込められた雑誌を麻生は俊敏に奪い取つた。

「行かねえなんて言つてねえだろ」

「じゃ、行く？」

ページに目を通し　田がチカチカ、頭がクラクラ。

「……ちょっと考えたして」

「ちょっとだけね」

ぶつきあらぼうに言ひ尋絵。とりあえず麻生はリンク口をかじった。

視線　窓際の老夫婦はすっかりナシを片付け、麻生を見つめながら硬く手を握り合つた　ふん　またもや老人が勝ち誇る。

「何なんだあんたらは」

「失礼します」

前触れもなく声をかけられ、麻生と尋絵の肩が震えた。ベッドの前にぬつと現れた巨躯は、やはり細木だった。

「……あ」

尋絵の口が小さく動いて、あからさまに警戒する。睨み付ける彼女へ、細木は深々と頭を下げた。

「先日は手荒なまねをして、すみませんでした」

尋絵を拉致した事だと、すぐに思い至る。丁寧な謝罪を受けて尋絵は戸惑っている様子だったが。

「お詫びと言つてはおこがましいとは思いますが」

と言つて細木が差し出した紙袋は、彼が持つとやたら小さく見えた。恐る恐る尋絵が受け取ると、相対的に通常の大きさに戻つたそれには、そちらの面には疎い麻生でも知つているブランドマークがプリントされていた。警戒心を解かぬまま好奇心に煽られ中身を覗めた、

「……しあうがない。今回だけですよ」

「ニヤけてるニヤけてる」

「え〜?」

「口元を締める」

「麻生さん」

「俺にも手土産?」

「卑しいぞ、アソー」

「おめーに言われたかねえよ」

後生大事に紙袋を抱える尋絵を睨み付けた。

「お話があるのでですが、いいですか？」

相変わらずの仏頂面ではあるが、何かしらの敵意のようなものは、細木からは一切感じられない。いきなりボロられるといった心配はなさそうだ。

「ああ、見ての通りヒマだし」

「ここでは、その……」

細き程の巨体が言いにくそうにキヨドキヨドする様は見物ではあったが、麻生から促す事にした。

「屋上でいいか？」

「助かります」

頭を下げる細木。この人物、外見だけが凄まじく先走っているがその実、中身は礼儀正しいらしい。

「それと」

「まだなんかあんの？」

「お連れの方は……」

「ここで待つてんだろ」

「うん、待ってる」

頬の筋肉という筋肉が弛み切った尋絵には、さすがの麻生も引いた。

第33話：「葉崎Guardianの意志」

病室に尋ねを残して屋上へと上がった麻生は、一昨日の事をぽんやり思い出しながら、物干し竿で風に揺れるシーツ郡を眺めた。

「傷の具合はどうよ？」

一昨日と同じ場所で、フェンス越しに街並みを眺望する。左胸に手を当てた細木は麻生と肩を並べて、

「まだ少し痛みます。しかし、心配はないようです。あの医師の処置は迅速でしたし、何より社長は　　本気で殺すつもりなどなかつた」

「あんただつて、殺すつもりなんてなかつたんだろ？」

あれだけ血に塗れた地面はきれいなものだつた。染みの1つや2つは残るだろうという浅生の予想は杞憂に終わつた。誰が清掃したのか　まさか忍足ではないとは思うが　見事なお手並みである。「殺そつと、思つたのかもしれません」

仏頂面からはわずかに沈痛が垣間見えた。

「私は会長の人柄に惚れ込んでいた。会長の志に正真正銘、魅かれていった。だから、その逆にいる社長が許せなかつたのは事実です」

「じゃあ、どうして傍にいたんだよ？」

「社長に気付いてほしかつた。社長にも会長の血が流れているはずですから」

「孫の代で、その血も薄まつちまつたんだろ」

あの老人とあの男は、思想も思考もかけ離れすぎる。2人のそれが重なる事など、麻生からは想像に難かつた。

「その事、なんですが」

「どの事？」

「社長は会長の孫じやないんです」

麻生の顎が軽く落ちた。

「孫じやない?」

「そうです」

孫でなければ何だと言つのか。それに、細木の発言と矛盾する。まさか彼自身、忘れたなんて言い出すわけがないだろうが。

「けど、タケさんの血が流れてんだろ?」

「会長の子供です」

「子供おー?」

突飛な言葉に麻生が仰け反る。

「会長は逝つた人の、こうこつた事を話すのは少しばかり心苦しいんですけど その……」

驚愕で硬直中の麻生をそのままに、伏田がちに歯切れ悪く、それでも細木は言葉を選び出した。

「……こちらの方が、やや見境なかつたり、盛んだつたりしまして巨体が躊躇いつつ小指を立てる姿は見るに滑稽だった。

「……そ、そうなの」

「で、社長ができてしまつたといつ話です」

ふと思つ。

「勅使河原 社長つていくつだっけか」

「今年で23です」

「タケさんは?」

「78です」

78 - 23 = 55

55!?

「……動くもんなんだな、腰」

「麻生さん、それは下世話です」

思考が先走つてしまつのだから仕方ない。

「社長の言葉、憶えてますか?」

と突然聞かれても、はてどの言葉かなんてわからない。

「どれ」

「麻生さんが会長の隠し子だといつ

「……ああ、あれ」

腹を思い切り蹴られる直前、そんな事を言つていていたような気もする。

「あれも本当です」

「まっさか～」

笑い飛ばしてみたが、細木の瞳はそれを虚言とするには真剣過ぎた。

「……マジっすか」

「大マジです」

にわかには信じられなかつた。

麻生には父親がいた。麻生が殺意を向けた父親がいた。麻生の前に、トラックに殺された父親が。

「身に覚えがねえよ」

「子種に覚えのある人間なんざいません」

正論。

「いやつ、でもよ……」

戸惑いつぶたえ、混乱する麻生の頭は必死に反論を探つたが、細木の方が早かつた。

「私なりに調べさせてもらいました。葉崎に関する情報収集は、三雲が一番得意としているものなんです。量も多く、確実な情報を集められるんです」

「そりゃ、すげー」

混戦する頭で茫然と応えた。

「こんな事、社長には言えなかつたんです。しかし、麻生さんが隠し子だというのは直感的に悟つたんでしょう。麻生さんの父親が母親と出会つた時、すでに麻生さんは生まれていたんですよ」

そんな話、一度だつて聞いた事ねえしつ！

「あと、麻生さんと一緒にいた少年

」

「幸輔？」

「やはり」

どこに合点を見付けたのかわからず麻生は眉をひそめた。

「彼もまた、そうです」

「つはあ！？」

「さらに言えば、井延もそうなんです」

「オフクロー！ 今俺、とんでもねえ状況にいんぞお！！」

「乱心するのもわかります」

フェンスをつかみ叫んだ麻生の肩に手を置く。

「だあ！ メチャクチャだ！」

頭を搔き垂つた彼にどこまでも冷静な口調で細木は続けた。

「社長を含めて、会長の過ちは5人います」

「5人の過ちとかゆーな」

「この5人、共通点があるんです」

試すように見つめられるまでもなく、すぐにわかった。

「全員、コースケだつつーんだろ？」

「そうです」

麻生浩介。

松原幸輔。

井延耕佑。

勅使河原

功祐。

「……あれ、もう一人いなくねえか？」

指折り数えてはつとする。麻生の頬が嫌悪感に痺れた。
麻生が潰された人物。笑顔。医者。ストーカー。

「林航助え？」

「彼は無関係です」

間髪入れずに否定され、どこか損をした感覚。

「もう1人のコースケなんですが 見付からないんです」

言つ細木の表情は変化に乏しく、彼の心中は探れなかつた。

「消息がぶつづり途切れてしまつてるんです」

果たしてそれが彼の感情をどの程度揺さぶつているのか。見付からぬといふ結果で満足しているのか、それともまだ探し続けるつ

もりなのか。

「消えたのか、消されたのか　とにかく、会長の子供は5人いたんです。そして、ロッカーのカギ。社長があんなに執着したのは、遺書なんですよ」

「遺書」

反芻してみる。

「今現在、社長が三雲を取り仕切る立場にあっても、それはまだ代理でしかないんです。先代の社長　戸籍上の父親ですが　を殺してのし上がつても、正式な立場ではなかつたんです」

ロッカーのカギ。固執。正式な社長。隠し子　話が見えた。

「その遺書に、跡継ぎが書かれてるつてわけだ」

「そういう事です」

「タケさんに隠し子がいるつて事、あいつは知つてたんだな」「まさか4人もいるとは思つてなかつたようですが」

「思い付かねーだろ」

勅使河原武行　麻生の知らなかつたその一面。

老人は知つていたのだろうか。麻生が、幸輔が、自分の子供だという事を知つていて上で接していたのだろうか。

否　そんな風には思えなかつた。

麻生にも、幸輔にも、トウゴにもコミュニティの人間にも、老人は等しく笑顔を振り撒いた。

老人の笑顔は等しかつた。

「……結局のところ」

麻生は呟いた。

「根本は跡継ぎ問題じゃねえか

とどのつまり、お家騒動。

「勝手に種蒔いといって、大いに巻き込みやがつて」

今や人気のない裏口を見下ろす。一昨日の光景は鮮明に目に焼き付いていた。

「ところで、麻生さん」

「あ？」

まだ胸を焼く思いを乱暴な物言いで隠した。視線を交わした細木が、わかりづらいほどの微妙さで笑つたように見えたから、涙を悟られてしまったのかもしれない。

「カギがどこにロッカーなのか、わかつたんですか？」

その質問に白を切る事もできた。せめてもの抵抗として、こんな状況を生産してくれた子憎たらしい元凶をひとつそり処分してやろうかとも考えていた。

「あー」

逡巡した麻生は、今こつして屋上から一望できる街を見渡して決断した。

「もう少し待つてくれるか？ そろそろ届く頃だから」

この街を守り続けようとした老人の意志とやらを、最期まで尊重する事を選んだ。

第34話：「Eliminated 男子」

麻生からその話を聞いた時、幸輔の頭は半信半疑どころか、一割信九割疑に傾いていた。

「ロッカーのカギをトウゴに渡してみてくれねえか。もしかすると、ロッカーまで行けるかもしんねえから」

「トウゴが連れてつてくれるつて？」

「そういう事」

病室のベッドで頷く麻生は、どうやら信じ切っているようだった。「場所を示してくれんのがトウゴにしか思えねえんだよ」

「まさか～」

幸輔は一笑したのだが、もしもそれが本当ならば少しだけ素敵だと思えたのが一割。彼を実行に移させたのは、むしろ九割の『ありえない』であって、その証明のために行動を起こしたようなものだつた。

幸輔はトウゴを氣に入っていた。トウゴも幸輔にはよく懐いていた。ロッカーのカギはむしろついでとしての付加物に追いやつて、純粹にトウゴと遊ぼうと思つた のだが。

「…………」

呆然と佇む幸輔の足元で、尻尾を上機嫌に振るトウゴがいる。

「…………」

くわえたカギを地面に置いて、トウゴは吠えた。

「……ま、ここはひとつ、整理してみよう」

平静を取り戻すため、つい先刻の事をわざわざ思い返してみる。

トウゴに会いに行くためロミコニティへ向かつて、幸輔を見付けたるなり飛び込んだトウゴをひとしきり撫でた後にカギを見せ、匂いを嗅ぐや彼の手から奪つて駆け出して、どうしたのかと追い駆けて。

ガタタン！ ガタタン！ ガタタン！

頭上を電車が過ぎる。佐岩井公園から10分ほど走って辿り着いた高架下は人気がなく、蛍光灯は思い出したように灯り、使われなくなつて久しいと窺える寂れたコインロッカーが、陰湿な空気を致命的までに演出していた。

「……マジでか」

本当に、コインロッカーまで来てしまった。

「どうしてここを知つてんだ？」

聞いたところで、トウゴは幸輔の撫でる手に頭をこすり付けるだけ。

に、しても ロッカーと対峙する。酔っ払いかケンカかハツ当たりか、随所がボツ「リとへこんでいる外観、中にはドアがひつしやげ、閉じる事も適わないものもある。ずいぶんと開放的になつてしまつた戸を指先で押してみると、錆びた蝶番が軋んで鳴つた。

一抹の不安。

「……まだ残つてんのか……？」

意見を求めたら、トウゴに首を傾げられた。

カギを拾い上げた幸輔の目の高さに、『015』と記されたロッカーを見付けた。恐々とカギを差し込む。錆付いているせいかわずかな抵抗もありはしたが

ガチッ。

カギは回り、施錠は解けた。

「……あれ？」

ふと手を止め、目の前にある『015』のプレートとトウゴを交互に見比べる。

「もしかして、そういう事？」

トウゴは幸輔をじつと見つめていた

「 015（トウゴ）って事？」

「 そういう事」

大東病院308号室。投げかけた問いを、麻生は顎を引いて受け止めた。

「015 15 トウゴ。頼んどいてアレだけど、まさかなんとか思つたんだけど、アタリだつたわけだ」

入院生活は退屈なようで、大口開けてあぐびする麻生。

「これで全部、終わりだ」

ベッドいっぱいに背伸びした。

「あれ、中身は何？」

「遺書だつてさ」

「へ」そんな大層なもん、コインロッカーに入れてたんかい「ロッカーにぽつんと置かれていたのは一枚の茶封筒だつた。さすがに、しっかりと閉じられた封を切る勇気も、ふてぶてしさも備えていなかつた幸輔は一旦コミュニケーションに寄つてからトウゴを返し、ここまで足を運んだ次第。病室の前で、麻生と細木という奇妙な組み合わせと出くわし、麻生を介して茶封筒を受け取つた細木は、「迷惑かけました」と深々と頭を下げ、帰つて行つた。

「中身、見なくて良かつたの？」

「タケさんの遺書なんか、見たくねえよ」

ぶつきらぼうな麻生の語調は、どこか不安定さを隠し切れていな

い。そうだね 小さく、幸輔は応えた。

「 そういうば。細木さんは元気そうだつたけど、あの、勅使河原つてヤツは？」

「元気みてえ」

今度は安定したぶつきらぼう。大して興味なしといつた口調。赤く染まる左肩に手を当て苦痛に歪めた勅使河原の顔を、麻生は思い出していた。2人とも、撃とうと思えば続けて撃てたはずだ。いち早く動いた忍足を押しのければ、勅使河原は確実に細木を殺す事はできた。

しかし実際は 2丁の拳銃が同時に地面に落ちた。

殺すつもりなんてなかつたんだろよ。

屋上に到着した看護士たちは有り様を田の当たりにするなり蒼褪めたが、忍足の機敏かつ的確な指示を前に処置を優先してくれた。担架に乗せた麻生を先頭にして、左足を引きずる忍足、左肩を押さえる勅使河原、左脇腹から血を流す細木 一列になつて手術室に吸い込まれる様は、端から見ればさぞ珍奇に思えただろうに。

「ふふ、ふふふ

「……」

聞こえない振りをしていたが、先程からずつと尋絵の含み笑いが続いていた。

「あ、そうそう」

尋絵を、まるで不気味な何かのように見ていた幸輔が口を開く。「受付の奥にさ、その日にいる医者の名前がひと田でわかるボードがあるんだよ。医者のフルネームが書かれたプレートを差し込んで、簡単にに入れ替えられるやツ」

単なる無駄話。

「へーそー」

麻生があぐびするのも構わず。幸輔の話は進む。

「忍足先生の下の名前、憶えてる?」

「忘れた」

「ヒロトっていうんだけど、どういう漢字だと思つ?」

「知らん」

「糸偏に広いの『紜』、透けるの『透』でヒロトなんだつて。読み方かえると『コースケ』になるなあとか考えて、すっげー偶然!」

勝手に感動する幸輔、依然として含み笑う尋絵。

紜透 紜透。

過ちは5人 細木の言葉が蘇る。

消息を絶つた、5人目のコースケ。

もし……

もしも性転換をしていたら 女になつていたら、どうなる?

コースケという男を探し続けても、女には辿り着かないのではない
か。

忍足は時折、女とは思えない気迫を發揮した。元が男であつたな
ら。

「……バカバカしい」

「何か言った？」

呟いた麻生の声は小さくて、幸輔の耳にまでは届かなかつた。

「女つて、ブランド物を与えたらいこうなるもんなのか？」

「あんたにはわかんねえだけだ」

指差した先で尋絵に睨まれた。

「ブランド物つてキレイだし、女としては持ち歩きたいものなんじ
やないの？」

「幸輔つてばいい男！ どうして恋人いないのか不思議！ どうし
ていよいの？」

「俺に聞かれてもわからないつす」

「何でいよいの？」

「わからないつす」

「ほしくないの？」

「ほしつす」

「どうして作んないの？」

「できないんつす」

何とも取り留めのない一問一答を始めた2人をよそに、

まさかな。

麻生は思考をシャットダウンした。

最終話・「T e s s y s a i d . . .」

1ヶ月後、勅使河原が死んだ。

「…………」
食料を詰め込んだビニール袋を下げて、マンションの前で、彼を待っていた細木から聞いた。

「いつ」

「昨日、「亡くなりました」

いつでも仮頂面だつた目が、心なしか腫れていた。

「どうして」

「街をぶらついていたんです。新入りに街を案内するって言い出しまして」

「あいつらしくねえ」

「私もそう思います。それで、隣町の組のヤツと出くわして……」

「やられたのか」

「はい。新入りをかばつて、撃たれました」

ガタタン！ ガタタン！

高台の線路で電車が騒ぎ立てる。

勅使河原が、新人をかばつて死んだ。

あの勅使河原が。

ガタタン！

あつという間に電車は過ぎた。

「…………会長の遺書を目にしてから、社長は少し変わったんです」

遺書。そこに何があつたのか、麻生は知らない。細木は 憲勲

な彼の事だ、きっと目の前にあつても読みはしないだろ？

「むやみやたらに血を流さなくなりました」

「大きな変化じやねえか」

「はい」

細木はぐすりとも笑わなかつた。

「じゃ、三雲興会はどうなるんだ?」

社長である勅使河原が死んだ今、組織はそれでも存続するのだろうか。

「私が、社長になります」

やはり仮面に変化はない。麻生は頷いた。

「そつか。なんつーか…ま、がんばれ」

我ながら、もっと気の利いた、場の空気を汲んだセリフはないものかと呆れる。それでも細木は、「ありがとうございます」と礼をした。

顔を上げた細木が一度だけ瞬いた。

「それと、社長の今際の際に言った言葉なんですが

2人の脇を乗用車が走り去つた。エンジン音に紛れて、細木の声が鼓膜を震わせる。もしも彼の声が太いものでなければ、きっと聞こえなかつたように思う。

「麻生さんは、どう思いますか?」

返答を求めた細木の瞳は、少しだけ潤み始めている。いくら心のどこかで許せなかつた相手だつたとしても、細木にとっては社長であり続けていたのだと実感した。

「そんな事ねえよ。あんただつてそういう思つだろ?」

「はい」

確固たる信念を感じさせる首肯だった。

「それでは 失礼します」

一礼して踵を返した細木を、麻生は慌てて呼び止めた。

「どうしました?」

「あんた、社長だろ? 迎えの車とか、ねえの?」

見回した範囲には、それらしき車は見られない。社長という身分上、一人ノコノコ歩いていいものでもないはずだ。

「正式に社長となるのは明日からなんです。だから、まだ社長は社

「長のままなんです」

「おやらいわしいって」

「ソノまで、歩いて来たんですよ」

「電車とか使えよ」

「葉崎を歩きたかったもので。よく、社長と歩いていたんですよ。

では、失礼します」

それ以上、話す事はなかつた。細木は勅使河原の死を云々に来ただけだらうし、麻生はこれから食事の準備をしようと思つていたところだつた。

「じゃあな！」

別れの挨拶が一泊遅れてしまつたのは、不意を衝かれたから。よく、社長と歩いていたんですよ。そういつた細木は微笑ついていた。普段能面のような彼らしい、さわいちなく照れもある笑顔だつた。

「さて、と」

ガサガサビール袋を鳴らしてマンションに足を向けた麻生の頭の中では、勅使河原が言つ。

あー。

かつこわりいな、俺。

「そんな事ねえよ、てつしー」

もつ一度眩いで、麻生はエレベーターのボタンを押した。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3722c/>

葉崎Guardian

2010年10月8日14時17分発行